
織斑家の最強お父さん！

親バカ最強パパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑家の最強お父さん！

【Nコード】

N7710X

【作者名】

親バカ最強パパ

【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに……。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろう。二人が立派に育つその日まで……。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

現在、全話修正中。キャラや文字数とか増やしたり減らしたりします。

オリキャラは何名か消えます・・・。

あと、かなり中身が変わるのもあるので楽しめたら。と思います。

親父、爆誕。
(前書き)

修正しました。

親父、爆誕。

本日は晴天なり。

空には憎たらしいほど太陽がさんさんと言うよりかんかん照っております。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑おりむら春樹はるき。

年は三十路、詳しく言えば三十二歳。バリバリのおっさんをしています。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめてニート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・

兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられないから……。

「……………そりゃない
ぜマイシスター」

「あ、あの……よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。

玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と赤ん坊の息

子が手紙を持って現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿二人（一人はゴミ）・・・！子供を押し付けて蒸発しやがったな・・・！

「・・・ん~~~~~まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します・・・」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞆と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引つ張ってソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「・・・おい。まさか秋枝あきえはお前らを残して消えたのか？」

「・・・それは・・・」

「ああ・・・いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すとやっぱ
り少し暗い顔して俯いた。

「……んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋
枝の夫）とどこかに行っただる。」

昔に親父と喧嘩をしてから会ってないが元気なのかね？

とうとうかやはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働か
ずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか……。

「んー、行く宛はあるか？」

「……ない、です……。」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時
に病気で死んでる。

親戚はいるがどいつもこいつもろくでなしだからな……金しか
考えないやつがいるし、育てられるとは思えん。

……仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わって俺がお前らの親父になってやる
よ」

「え、でも！春樹叔父さんに迷惑が……きょう！？」

バチンとデコピンをするとマイシスターの娘は額を押さえて涙目で見てきた。

さあてさて。まずは代理組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・！」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし手に追えなくなるような事が起きたらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、もしも組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝のことはよくわかってるな。

取り敢えず昔、世話になった人達に電話をして養子縁組申請せねば。

額を押さえながらおろおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。

娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうおやつさん。助かったよ」

『気にすんな春坊。死んだ馬鹿からの頼みだからいくらでも言いな他にすることないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがとう。じ

「やあな」

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするといけてない娘に目を向ける。

「おい」

「は、ひゃい!?!」

「出掛けるぞ。上着を着ろ」

「え?え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負うと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい……わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負うとマンションの一室から出て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングダムゾンが浮かんだのは気にしない。
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあ
やす。

昔から親戚のガキとか孤児院のガキの面倒を見てたから慣れたも
のだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・！」

「いやあああああつ！！織斑さんが子供を連れてるううううう！！」

「神は死んだ！狙ってたのにいいいい！！」

そんな声が聞こえたのはご愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシス
ターの子供は俺の養子となった。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あったがまず

はマンションに帰ることにした。

「というわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしる。部屋はまだあるからそこ使うか？そつちは俺が面倒見なきゃならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、大丈夫かね・・・？」

「（・・・母さんから少し聞いてたけど・・・優しそうな人だな・・・）」

・・・織斑春樹。二児のパパになりました。
娘、おりむら ちふゆ織斑千冬。息子、おりむら いちか織斑一夏。

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。

現在住所ちよい高めのマンション。

残金・・・二億七千万（荒稼ぎしたぜい！）。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”ラストサムライと呼ばれる人類最強。現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

第一話 親父視点（前書き）

修正しました。

第一話 親父視点

本日は晴天なり。

ぼかぼかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。
とうか日差しに当たりながら昼寝をしております。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。
涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子にサンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにNewパパさんであるわたくしは育児のめんどくささに
ダウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減ってもギ
ャーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・。

軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で
逃げやがったな？そうだろ秋枝エ!!!

「・・・すー・・・すー・・・にへへ」

「・・・涎がダラダラだ・・・これ、お気に入りのシャツなんだが
な」

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染み

を作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メって写メって〜。

二人、千冬と一夏を引き取ってからすでに一ヶ月。秋枝はあれから手紙も何も寄越さないから心配だと思っこの頃。

千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入り料理はきんぴらごぼうである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボデーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやったことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほっ」

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でフィッシング。テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑っていいかもを視聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。

日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しながら視聴視聴。

「・・・にへへへ・・・お父さん・・・」

「あぁっ！千冬の奴、さらに涎を!？」

定番のいいかも〜！を言った途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。

長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押して退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

妙に力が強いな！ここは親父の遺伝か!？

「離せ千冬！冷たいんだよゴラア・・・あぁっ！洗濯物干さなきゃ!」

「でへへへ・・・」

仕方がなく、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。

ちなみに二人に買い与えた服は二桁を越えている。

正直、服なんかわからんから適当に買った。

予算はユククにて買ったため、一万以内。

一夏はベビー！らずで服やらガラガラやらオモチャを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の金が消えていきます。

駄菓子菓子！！

親父が残してくれた金を実家から送金されたので口座の金の桁が跳ね上がる！！

・・・最初見たときは目を疑ったね。0の桁が二つ上がったもん。

親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴラァ・・・。
妙にコソコソしてたのはこのせいか。

「今日は天気がいいからもう少し干すか。というかいい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセミよろしくへばりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬ごとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら

寝てやがった。

しかも頬擦りしながら匂いを嗅いでるし。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーッ、アホーッ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなって暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇 拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから二人で鍋をつつくことにした。

「一夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。ミルクを飲んでいたまえ。」

「あ！お父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食うのも食われるのも当たり前なのだよ千冬！」

「！？し、知らなかった・・・！さすがお父さん！勉強になる！」

「・・・ふつ。チヨ口いな・・・ガキなんざこれにて封殺できるのさ。」

大人気ないな俺。

そのせいで将来、千冬を再教育するのに苦勞するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどっぴり入れて完食。二人分だから腹はちよつどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナニコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言う千冬の後ろにはバタバタ手足を

動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座って緑茶を飲みながらホツと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみか
んを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を
連れて入浴することにした。

髪は少しずつつ生えてるがまだ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は
薄かった。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考
えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

変態露出狂が当たり前みたいになってるからな。うちの実家。

シャツの長袖を捲り、スボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入
念に洗う。

・・・当たり前だがまだチ コは小さいな・・・俺は大口径マグ
ナムだが。

親父はあれだ。拳銃どころかデス ター並みのでかさだな。

「うー、あー、あー」

「ん？もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカクンカク
ン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないうように丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた（ドラ エ風に）！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。なのに千冬は一緒に入る！と言って聞かないため、仕方なく入浴。俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし・・・というか日本にいるのか？連れていくのがいいかな？（ボソツ）」

「そ、そう・・・やった・・・」

湯船に二人で浸かりながら話すと予定ができた。

こつこつこの話を話していると千冬が成長していると実感できる気がする。

こつこつして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものごとく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら

ら熟睡開始。

寝顔が可愛いので気にしないよ。

第二話 親父視点（前書き）

修正しました。

第二話 親父視点

本日は曇りのち晴れ。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくい日である。

実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してある。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。

我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

千冬は小学生なので小学校に登校。

「あー、あー」

「いててて！髪を引っ張るな一夏！」

きゃっきゃつと笑うベビーボデーのマイサンは俺の髪を引っ張って遊んでおります。

髪を切らないので簡単に整えて縛ってポニーテールにしている。

そのため、一夏の一番お気に入りのおモチャとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを発揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。

俺が義理の父親になったことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからないって事はなかったの
でパパとしては一安心一安心。

ちゃんと勉強はさせてるみたいだな、秋枝。

「まむまむ」

「ぎえあああつ!?一夏、俺の髪を食べるでない!」

ポーツと一夏を組んだ脚の中にすっぽり埋めて平日の笑っていい
かもを見ていると一夏がポニテの俺の髪を口にくわえてもむもむ食
べていた。

離させようとすればごねて泣くため、何かないと周りを見渡す。

テレビから司会のマリモさんの声と観客の笑い声が聞こえるのを
傍目に、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のおしゃぶりは一夏が気に入らないから駄目。オモチ
ヤ・・・却下。

・・・一夏って・・・何が好きなん?

「あー!あー!」

「いだだだだだっ!」

どうするか考えていたら一夏に思いっきり髪を引っ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーツと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求しているのか。

「あー・・・わかったわかった。準備するから待てや」

「あー！あー！あー！あー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・・・・・・これが、親バカの心得か!？」

両手を上げて喜びを体現する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・・・・・・ああ・・・・・・・・親父・・・・・・・・刻が見えるよ・・・・・・・・新しい親の愛に目覚めそうだよ・・・・・・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものようにミルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶を持ってぐびぐび飲み始めた。

ハイハイはできるが、まだ立てないみたいだから残念。

「あーいー！」

「……………一夏のバツクに銭湯の脱衣場が見えた……………疲れてるのか俺は？」

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶとぷはー！と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男や腰にタオルを巻いたジジイが見えた。……………疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作った焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「あー！あー！あーいー！あーうー！」

「……………少しは静かにできないのかおのれは。ジャングルのゴリラみたいだぞ」

なぜか一夏はチーターのごきげんようを見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

……………将来は親父似だな。母さんの要素はないわ。

秋枝はどちらかといえば母さん似だけど。

でも親父の負の遺産（遺伝子）はたっぷりと受け継いでるからな。

焼きそばを食い終わると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みゃーうー！」

「いだだだだっ！痛い！痛いっで一夏！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にぶら下がって遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

ミルクは無いから諦める！

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴った。一夏が反応して喜んだ。

「あー！！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーうー！！」

「・・・もうどうにでもなれ。親父、昔は苦労したんだな・・・子育て大変だ。改めて育ててくれてありがとう・・・」

少ししんみりしながら一夏を抱いたまま、ソファーに座ると一夏は手を伸ばして俺の鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたり好き放題していた。

なすがままにされていると疲れがどんどん貯まり始め、気のせいかけっそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姐さん呼ぼうかな？

ホームヘルパーはやめとこう。たぶん手に追えなくてギブアップするし、金ももつたない。

姐さんと呼ぶにしてもどこにいるかわからんし、貞操を寄越せと言われそうだから却下。

・・・・・・駄目だな。親父が生きてればなんとかなのが今はいない。一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな・・・」

「うー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらどうしようかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやっさんか姐さんのツテで就職するつてのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何してますか？って言われて無職ですと

「ただいまお父さん」

「お帰り千冬。今日はどうだった？」

「んー、特には無かった。でも遠足があるからプリントをもらってきた」

「・・・ん？遠足？こんな寒くなってきた時期にか？」

ポニーテールの髪を一夏がギリギリ届くか届かないかの場所に垂らすように首に巻き付けて千冬からプリントをもらい、チエツク。

一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうになれば触らせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み終える。

11月7日に遠足・・・よくよく見たら弁当持参って書いてるな・・・あれ？俺が作るのか？

クフフフ・・・姐さんとおやつさんからお墨付きの俺の料理の腕をみたいと申すか・・・。

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗ってうがいへゴー。冷蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきます！」

ダダダツと千冬が洗面所に向かうといまだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。

泣きそうな一夏を見て張り裂けそうになるマイハートを必死で我慢しながらホットココアを作る。

千冬が戻ると一目散にチーズケーキにかぶりつき、完食。

・・・はやっ。一瞬でなくなったな、チーズケーキ。

「宿題あるならやっつけ。飯はまだかかるからな」

「わかった!」

「できたら檻に入ってる一夏の相手もよろしく。オムツは変えたからやらなくてよし」

そう言つと包丁でネギをとんとんと切っていく。

千冬はランドセルからプリントやらノートを出して宿題をし始めた。

それを見ながらキャベツを上に向けて包丁で秘剣・千切り。

フライパンで炒めながら味噌汁を作る。

「んー・・・味が薄いかな？味噌味噌・・・っと」

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作っていく。

刻んだネギを味噌汁に入れると一回、二回、三回とかき混ぜて火

を止める。

切ったキャベツを皿に盛り、焼いておいた豚のしょうが焼きを盛り付けて完成。

「ご飯も炊けたから台拭きを持ってテーブルへ。」

テーブルをしっかりと拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くと千冬は一夏と遊んでいた。

ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「いただきます」

千冬としつかりいただきますを言うとまずは豚のしょうが焼きを食べる。うん。うまい。

千冬を見るとパツクパク食べており、嬉しそうにキャベツにドレッシングをかけて食べていた。

俺は空の茶碗に盛り盛りと白米を盛ると二杯目を千冬に渡す。

「取り敢えず弁当は作るう。何がいい？」

「きんぴらごぼろー」

……二回目だけ……。

お前は年寄りか。

でもまあ、弁当の中身は決まったな。

まずは千冬ご要望のきんぴらごぼう。そして定番の玉子にタコさんウィンナー、後は子供らしくハンバーグでも入れとこう。

うーむ・・・親父は違うが、姐さんとおやつさんは料理得意だからな・・・かなり鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなきゃな。

小学校の給食で弁当いらなかったから朝飯と晩飯だけでよかったが弁当となれば早起しなくては。

四季組にいた時は普通に朝五時に起床してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。

一夏はすでにドリームインしており、ベビーベッドで寝ている。

「・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもらいたいものだな」

そう考えると昔のあの記憶が蘇って体がブルリと震えた。

あ、あれは・・・悪夢だったな。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出て牛乳を飲んでいた。

・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳か日本酒を飲むのが好きだったからな。

皿洗いを終えると昼に洗った分まで乾燥機に纏めて入れてスイツチオン。明日の朝には終わってるはず。
着替えを持って脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・昼の疲れが癒される・・・！風呂は命の洗濯？
とか言ってたやつがいたはず。うん。
こうして一日は終わるのであった。

第三話 親父視点（前書き）

修正しました。

第三話 親父視点

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するにはもってこいである。

少し肌寒いが、服をしっかりと着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

場所は誰が決めたのか、動物園と水族館がある大規模な公園である。

「あー、あー」

「……眠いんだよー夏……少しだけ寝させてくれよ」

「あー！あー！」

「……」

そして俺と一夏は家で留守番、というよりはいつものようにだらけた生活をしている。

……ニートとか言つな。主夫と言え主夫と。

……というか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではしゃぐ一夏を眠たそうに見ながら一夏のペシペシを止める。

そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持ってまむまむと口に入れて食べ始めた。

・・・一夏にとって俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだったし。

・・・今度、昆布かわかめを渡してみるか。似てるし。

さてさて。時間があるので軽く俺の事を説明しよう。

まずは四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言われてる由緒ある一家。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、もともと力があるものが組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入っている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。

千冬と一夏も“冬”と“夏”がある。

親父は冬樹ゆきで“冬”を持っていた。母さんは嫁いできたからないが似たような感じはある。

織斑家直属はみな、ある特徴を持って生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持っている。俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれるくらい、人類最強の戦闘能力を持っている。

親父が生きていたら親父が人類最強だが。

反対に、秋枝はあまり才能はなかったが、普通の人なら才能があると云われる程度にはあった。

おかげで、四季組の頭のお堅い馬鹿のせいで秋枝は荒んでいたが。

いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になってから家事やらで忙しかったから久しぶりだな。本当に。

「……………なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そう。

親父で四季組九代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。

現在の組長は代理組長で俺が受け継ぐべきなのだが、今はまだ戻る気はない。

四季組九代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にはならなくてもいいと言われているからという理由もあるけどな。

親父は小さい頃に自由に生きられなかったからせめて息子だけとは自由にしてくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー」

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行ったのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神経で熊を撃退したが全治三ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治ったのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経歴がある。

なんとか生き残ったのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学二年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかった。

退院すると真っ先に親父に殴りかかったが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になった事がある。

退院 親父に殴りかかる 返り討ち 入院 ナースさん達のオモチャになる 退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじゃねえな・・・やたらと女性に好かれるし。

中学に上がってからは親父に勝つために親父の知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。

以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学二年生から折れなくなってきた。

俺の知らないうちにボロボロの姿が男らしいと中学のアイドル的な存在になってたらしい。

中学三年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上がると親父と互角に渡り合っていたが、親父は今の今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。貞操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

じゃねーと戦ってくれないし、飯抜きになるもん。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はあんパン七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となった。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をしている組織も潰して回った。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組がバグキャラ、“最後の侍”ラストサムライだなんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかった。

秋枝が駆け落ちした？心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝った・・・が。

絶対に親父、天国にしる地獄にしる、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しんではないけど。

前に神様相手に戦ったら勝てるかの？みたいに言ってたのを聞いたし。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠っている一夏を見ながらそう思うと親父の話聞かせようか迷った。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思う。

俺は小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知ってるからな。一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙な雰囲気染まりそうで怖い。

孫の顔が見たい！

「ぬおっ!？」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファから飛び起きた。

「いたい・・・!」

「ん?帰ってたのか千冬・・・っていま何時だ?」

下を見ると千冬が額を押さえて涙目になっており、ジトーツと見えてきた。

頭を撫でながら時間を確認すると午後五時。どうやら昼前から爆睡してたようだ。

千冬は帰ってきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになって覗いているとひっくり返り、痛みに堪えてるらしい。

ちなみに一夏は千冬がベビーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

偉い偉い。頭をさらに撫でてやるぞ。

「……はふう……お父さん、もう夕方だけど寝てていいの？—
夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど……」

「んあー、悪い。朝に早起したからつい、な……」

「うー。一夏、お腹が空いていて泣いていたんだぞ？気を付けてよ
お父さん」

あー、それは悪い事をしたな……一夏には少し高めミルクを
あげようか。

千冬は俺に撫でられながら、一夏の頭を撫でながら言うが反省し
ないとな。あまり空腹にさせると成長に悪いって親父が言ってたし
な。

拗ねた感じの千冬の要望、“ぎゅーっ”と抱きしめて？”によ
り、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く……だが。人類最強の俺が本気を出したらスプラッ
クになるのは見えているから。

「えっとね！今日の遠足は……」

「ほっほっ」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について話し出す。

動物園でライオンとじゃれた、ゴリラと握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のくだりはツツコミをするべきなのか？
親父みたいになってんじゃねーか。

「でね！たばねちゃんが弁当を交換しようってやってね！美味しいって言ってくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからね！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを主にして」
「本当!?!」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間があるので千冬と一夏と買い物に行こう。

ジャ コでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が数十人いるから余裕で買
い物ができるだろう。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパーカーを羽織って
から一夏のベビーカーを玄関から出す。

千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒
くないように毛布をかけた。

「なんかいる？好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「・・・む。ありそうでないよお父さん」

「考えとけ。じゃ行きますか」

「お〜！」

「あい〜！」

ジャ コに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。
シヨッピング中は逆ナンが多かったので疲れた。
なぜ女性に逆ナンされるんだ俺は・・・。

第四話 親父視点（前書き）

修正しました。

第四話。親父視点

本日は晴天なり。

寒かった冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなってきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと！今日は記念すべき日。我が息子、一夏の二歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはどこでいい？」

「いいぞ」

「あー！」

というわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝うことにした。

引き取ってから一年近く、千冬と一夏と暮らし始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。少しは歩けるがまだまだといったところ。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝った。

ちなみにだが、千冬は十二月七日、一夏は九月二十七日、俺は九

月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を与えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気が似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、八代目四季組組長の事である。

顔は知らない。アルバムで見たことはあるが、会ったことはない。

「それよりお父さん？一夏のプレゼントってあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組勢からのプレゼントなんだが。

組長代理や昔に親父にお世話になった奴等、おやつさん、姐さん、四季組の幹部メンバーが一夏に贈ってきたのだ。

若様にプレゼントを！ってな。

千冬の時もあいつら、一夏と同じくらいのプレゼントを贈ってきたからな。

千冬が唾然としていたから予想なんかできなかったんだろうな。

取り敢えず中身を確認したら変なものが出るわ出るわでさすがの俺も呆れ果てた。

ドスやら日本酒やらチャカ（拳銃）やらと子供にあるまじきプレゼントがあった。

それらは四季組に贈り返して贈った奴等を血祭りにしたが。

「……お父さん、また変なの入ってないよね？」

「……不安すぎる」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬に似合うものがあったがどれも高級品のため、少しあれである。

他にも洋服や着物を贈ってきたがそれは大事に仕舞ってある。

準備を終え、プレゼントの山を千冬と眺めていると不安のせいかわ、プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出してる気がする。

「……お父さん、やってよ」

「……千冬に譲る」

「……」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合って固まる。

「……じゃん、けん！」

「ぼん！」

「ぼおおん！！！」

俺、パー。

千冬、チヨキ。

勝者、千冬。

「……………神は残酷だつ！！！」

「やった！去年みたいな事はしなくて済む！」

「……………変なものを見つけたらもれなく地獄への片道切符を贈ってやる。オプションで本気のグーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの山の中を調べる。

……………うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供と聞いたのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でしょっぴかれそうになったし。

四季組、日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではどうにもならん。

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ……………ねえ？

「・・・案外マトモだな」

「あれ？これっておしゃぶり？」

「他にはオムツやらなんやらベビーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベビーグッズしか出てこない。
今年はヤバいものはないのか？と思いつながらさらにプレゼントを
確認していく。

七割方終わると合計120ほどのプレゼントが開けられた。
その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそうなもの
がわんさか出てきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところにと
んでもないものが出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジでか？」

「金ぴか・・・！」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎっしりと詰まっていた。
馬鹿か？あいつらは馬鹿なのか？一夏に金塊あげてなんになる？
まさに豚に真珠、子供に金塊だろうがっ！

「返そう。こんなのもらっても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「……はぁ……重い……」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。

取り敢えずその金塊の山はきっちり返すことにした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがもうやめさせよう。

一夏が大きくなってこれを見たらグレるかもしれない。

某大晦日の恒例のあれ（ガキ使）に出る引き出しを開けるみたいなドキドキ感はいらん。

「おとう、しゃー！」

「ん？」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていて。

上目遣いで俺を見てきたため、抱き上げて一夏と目を合わせる。

「どっした一夏」

「お、なか……しゅいた！」

「・・・さすがは親父の孫・・・成長が早すぎるな」

この一年で一夏はかなり成長し、舌つ足らずだが少しは喋れる。第一声は“おとうしゃ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

どうやら密かにお姉ちゃんって呼ばれるのを楽しみにしてたらしい。

まあ、今は“ねえちゃ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり自慢してた。

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一夏と遊びながら一夏の誕生日の準備をした。

ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もう少しで三人でケーキを食べられそう。パパは楽しみです。

「・・・よし。千冬、そろそろ食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかった！私はお皿を出す！」

「みゃー！」

「一夏も楽しみか？でもまだケーキは食べさせられないから・・・来年辺りには大丈夫だから。な？」

「みゃーっー！」

ズルいぞ！と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうしゃ”“ねえちゃ”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気まずそうであった。

お前、腹ぺこキャラだったか？

それは置いて。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は・・・これでいいか」

「うわ・・・またすごいね・・・」

「あいいー！」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんと俺は」

「でも一夏は食べられないよね？」

「.....」

千冬のメスのように鋭いツツコミにより、俺沈黙。

それを見た千冬はハツとして慰めるようにわたわたと手を振る。

・・・確かにそうだけども・・・祝うくらいいいだろ？息子のはじめての誕生日なんだからさ・・・。

「・・・で。お父さん？また食べないの？」

「・・・いや。俺は食べなくても大丈夫なんだが・・・」

「駄目！しっかり食べてよお父さん！」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと二人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト目により空気が凍るのを感じた。

ビシッと俺を指差すと千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は食べるのは好きじゃないんだがな・・・。

二日に一回の食事で持つし、ニート生活では丸二週間も食べなかったことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ？って思う。

少食なんだよ。俺はさ・・・。

だが、娘となった千冬により、食事は必ず三食食べるように言われた。

おかげで58？だった体重が67？まで増えてしまったし・・・。

「・・・めんどくさいな・・・食わなくても死なないから俺は」

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時の他にジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいようになった経歴がある。

そのせいか、親父が死んでニート生活をしていても餓死はしなかったのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65？と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持っていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「気合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。

取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。付け加えるなら人類の神秘を超越した神秘と思え。

「ほら！もっと食べてよ！」

「や、やめ・・・食えない・・・！」

「きちはは」

・・・ま。いつか。こんな誕生日も思い出になる。

一夏。誕生日おめでとくな。これからもよろしく。俺の大事な息

子よ・・・。

第五話 親父視点（前書き）

修正しました。

第五話 親父視点

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降っているが俺はとある場所に来ている。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入っけて預けている。

「採用」

「はやいなおいっ!」

とある場所、それは……

「じゃあ明日からお願いしますね。制服とかはこちらで用意しますから。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でもいいですか?」

「ええ、まあ……」

「大変ですねえ……二十歳で子供二人を……」

「ちょっとストップ。……年齢、書いてますけど……読みました?」

「はっはっはっは！もちろんじゃありませんか！二十・・・え？三十・・・四歳・・・？え、まさか嘘ですよね？」

「なぜ嘘と呼ばねなければならぬんだ・・・嘘言っても仕方ないでしょう」

「・・・えええええええええええっ！？若すぎるわよっ！！」

静かなオフィスにて面接官の女性の甲高い声が響き渡った。

「おわかり？俺は現在、とある会社の面接に来ております。」

「仕事内容は清掃。姐さんとおやっさんのツテで探してもらって今日、こうして来たわけである。」

結果採用！のんびり働きまっせ！

「じゃあ今の通りをお願いします・・・ところで今日の夜はお暇ですか？よかつたら私とホテルに行きませんか？」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。

食事ではなくやろうと言う面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言った。

・・・なのに何かに悶える姿ははつきり言って気持ち悪い。

この女性、真性のドMなのか？

説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かうことにした。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

与えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか」

めんどくさいがやろうか。姐さんとおやつさんがわざわざ紹介してくれた仕事だし。

仕事は明日からなので一夏を迎えに行くか。

「親父、移動。幼稚園到着」

「あ、おとうさん!」

「よし」

「こ、こんにちは織斑さん!」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう・・・」

一夏がいる幼稚園に着くと真つ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよー夏君！？織斑さん、これ！伝達用のプリントです！」

「はあ・・・どうも・・・」

「で、では私はこれにて失礼しましゅ！」

わたたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏はそれを見ると顔を合わせて同時に首を傾げた。

・・・なんなんだ？

「・・・帰ろうか」

「うん！」

帰ることにした。

帰る途中で一夏と幼稚園の 君は絵が上手とか、 ちゃんは
かわいいとか、 先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。
なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

また女性に好かれるとか・・・。

「でね！ほつきちゃんがおれにたまごやきをくれたんだよ！」

「ほー、ほつきちゃんねえ・・・可愛いのか？」

「うん！おとこっぽいけどかわいいよほつきちゃんは！」

さつきから“ほつきちゃん”の事を話す一夏は楽しそうだった。好きなのか？と聞いたら好きって何？と予想外の返答がされた。しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解できないのか・・・。

まあ、ゆっくりと教えていくか。

・・・それと一夏、女の子に男っぽいとかはやめる。って姐さんが言ってた。

「で？そのほつきちゃんの上の名前はわかるか？」

「ん、ん、ん・・・し、しの・・・しの・・・しののめ？」

「東雲あそら？また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。

昔に世話になった剣道場の師範代の姓が似たような感じだったし。

何かと俺が師範代、ジジイの道場に入った頃から目の敵にされて毛嫌いされたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけだね。そのせいでさらに目の敵にされることになるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほうきちゃんと仲良くな？」

「わかった！」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いているとすぐに着くもんだな。今まで、二人がいない間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかった。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。

二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思う。

「おとうさん、ちふゆねえはまだかな？」

「もう帰ってるだろ。時間も四時回ってるしな・・・で？今日は何が食べたい？」

「ハンバーグ！」

「よしてきた」

一夏は喋れるようになる“ねえちゃ”から“ちふゆねえ”と呼ぶようになった。

千冬も満更ではなく、千冬姉と呼ばれるのは嬉しいみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

一回、パパと呼ばれてみたかった・・・。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かったな」

「うん。今日は特に用事も無かったから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいか？」

「それくらいかな？もうちょっと早い気もするけど」

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・！手を洗ってから食べと言ったのにそのまま食べちゃって！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおとうさん・・・!」

「黙れ。帰ってきたら手を洗えと言っただろうが。風邪をひいたらどうすんだ阿呆」

「うっ!りふじんだよー!ちふゆねえもそつおもつでしょ!?!」

「・・・残念ながら一夏が悪い。父さんは毎日手を洗うように言っ
ていただろう?」

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケーキを食べ、千冬は学校からもらったプリントをズズイッと渡してきた。

えーつと・・・三者面談?またやるのか?

「それで父さん、面接はどうだったの?」

「開始五分で採用された」

「・・・なんで?」

「俺に聞くな」

「？」

千冬はマジかよ？みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえたまま首を傾げていた。

まあそうなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思うよな。

なんでだろうな？まさかとは思うが顔で選んだ訳じゃないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「……いやいや。カッコいい顔してるのにそれはないない」

「なんか言ったか？」

「なんでも。それより父さん？今度の日曜日に用事があるんじゃないのか？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからないぞ」

「……そ、それなら友達の家遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないと……誰の家に行くんだ？」

「東つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ……千冬がよく話していた東ちゃんか……」

東ちゃんとは千冬が付き合ってる友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けて友達になったとは千冬から聞いている。

前に遠足でオカズ交換したあの子だな。間違いなく。

・・・お父さん、優しい子に育って嬉しい。

友達が多い千冬だが、あんな風を楽しそうに話すのは初めてのめ、仲良くはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからなあ・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでるのを先生から聞いた事があるし。

危ない教育されてる訳じゃないよな？

「気を付けてな。家に入ったらお邪魔しますはきちんと覚えよ」

「わかってる」

「おとうさん！おれもほうきちゃんとあそびたい!!」

「・・・んー、また聞いておくよ」

住所や名前は知らないが担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、エプロンをつけて一緒に料理中。

千冬はリビングのソファーに座ってテレビを見ている。

だって・・・千冬が料理をすると暗黒物質ダークマターができるもの。
最初は頑張つて教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧な
のでできるのは暗黒物質ダークマター。

こんなとこまで親父に似なくていいのに・・・と思う。
親父は料理や家事は壊滅的だったからな・・・。
反対に母さんは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝してい
る。

「ちふゆねえ、せなかからなにかでてる」

「・・・見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が
漂っていた。

・・・親父より秋枝の遺伝かもしれんな。あいつも家事は壊滅的
だったし。

涙を誘われるので千冬のハンバーグにはチーズを入れておこう。

案の定、嬉しそうにハンバーグを食べる千冬でしたとき。

第六話 親父視点（前書き）

修正しました。

第六話 親父視点

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないようなので洗濯物を干している。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちょっと。

千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。

まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえってくるかな？」

「んー、もう少しじゃないか？時間的にもそろそろ学校は終わる頃だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「・・・迎えに行くか？」

「いく！あとなにかたべたい！」

「ならコロッケかなんかを食べ歩きするか。場所は・・・商店街のおっちゃんからもらおう」

「コロッケ!? おれ、だいすきなんだ!」

「おうおう。じゃあ行こうか。千冬の方も買ってな」

「うん!」

一夏は三歳。大体は喋れるようになり、歩くことも出来るようになったのでこうしてたまに散歩をするのが新しい日常になった。

散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになってたりする。

・・・千冬に言われてから外に出るようにしたらまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

よくわからんが一般より少し重い体重になってしまい、絞るのも苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言により、染み付いた習慣になりつつあった。

できるだけスピードが出るようにと、絞りまくったせいだな。うん。

千冬のおかげでもうそれは無くなったがまだ断食の習慣は直りそうにない。

「おとうさん? きいてるの?」

「・・・ああ、すまん。聞いてなかった」

「もう！ちゃんと聞いてよ！おれ、しょうらいはちふゆねえやおとうさんをまもれるヒーローになりたいんだよ！」

「ん。なれるんじゃないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチートな戦闘力ありそうだし（ボソツ）」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことがある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はぶんぷんと怒っているようだがコロッケを買い与えて機嫌を直した。

「じゃあ行くっか」

「おー！」

親父、息子、移動

所変わって千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゆねえ、まだかな？」

「もう終わってるはずだからもう少し待てば来ると思うよ」

もむもむとコロツケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線がバシバシ感じます。

「・・・あ！ちふゆねえだ！」

「ん？」

時間にして七分待っていると校舎の玄関から千冬と変わった髪色の少女が出てきた。

「・・・？千冬、なんか嫌そうな顔してるな？どうしたんだ？」

「……おとうさん、あいつだれ？」

「……なんだあのガキは……」

千冬と少女は足早に玄関から出てこちらに歩いてくるが後ろからニヤニヤとここからでもはつきりとわかる気持ち悪い笑いをしたガキが追い掛けていた。

……取り敢えず殺すか。

「おい千冬！」

「！……父さん？どうしてここに……一夏まで」

「どうしたんだ千冬？こいつ、お前の知り合いか？」

「あ？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかったのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走ってくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そうにしてるのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取ってそこから離れるように歩き出す。

千冬は少女の手を取って歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おいオッサン、俺の千冬になれなれしくしてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」

「・・・喧嘩売ってんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかつたのか？あんまりしつこいとお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるってな」

「はっ！嫁と話していて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから何をしようと勝手だろうが」

なんなんだこのクソガキは・・・！いいよな？殺してもいいよな？親もろともぶっ殺していいよな？

プルプルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おいオッサン。その手はなんだ？俺を殴っていいのか？俺は“如月コーポレーション”の御曹司だぞ！！」

「・・・・・・如月コーポレーション？・・・あいつの息子か・・・」

目の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。
・・・似てない。金髪に黒と赤のオッドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月コーポレーションとは日本有数の大会社のひとつではあるが、残念ながら四季組の下にある会社である。

その社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知っている。

・・・さて。如月コーポレーションの御曹司と言っていたが四季組組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか・・・。
取り敢えず潰す。教育してないガキもろとも路頭に迷わせようか？
あん？

「父さん、もういいから行こう。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「・・・同感だな」

いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなと・・・」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだったな・・・」

ガシッとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で脅すように言う。
う。

「織斑春樹。千冬の父親だ・・・次に千冬に近付いたら・・・わか

「つてるな？」

「なっ……！？千冬に父親はいないはず……ぶべっ!？」

クソガキを離すと尻餅をつく。

その間に三人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、
帰路につく。

「なんであんなクソガキと会ったんだ？」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきたから」

「……なぜ相談しなかったんだ？」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思った。でも転校して二週間
経つとあんな風にエスカレートしたんだ……」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。

あのクソガキは二ヶ月前に転校してきたようで千冬を見た時から
何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。

仮に如月コーポレーションから圧力が掛けられても潰すから問題
はない。

後悔しろ。俺の子供に手を出すやつは皆殺しにしてやんよ。

「それで……君は千冬のお友達かな？」

「うるさいよ。ちーちゃんの父親だからって気安く話しかけるな」

ビキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。
罵声はプラスチックアルファ。

「東！ごめん父さん、東は人見知りか激しくて・・・」

「インダイインダ。オレハオコツテナイカラネ？」

「おとうさん、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ？」

「なんでもありませんぐんそう！」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドリダゾ？

千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違ってしっかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能の毒牙にやられたのか？

「いいか東？いくら東でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすること

は許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してるからな」

「・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。
今日はシースーだ。特上のシースーを注文しよう。」

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む？どうした束？」

束と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシツと肩を
掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知ってる。

姐さんの病みモードの空気だ・・・。

と、トラウマ・・・トラウマがあああああああつ！！

「た、束？痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「いつ・・・」

「束さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうで

もいいくらいにだよ？あ、篝ちゃんは別だよ？束さんにはちーちゃん
んと篝ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだ
よ？あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、束さん
と篝ちゃんと宇宙に行こう。誰もいないちーちゃんと篝ちゃんと束
さんだけで一生一緒に暮らそう！できたらちーちゃんの子供も欲し
いな。男の子はいらない、女の子が二人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。
ちーちゃんの愛があれば束さんは妊娠できるからね！んー、少しだ
け待ってて。束さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅
ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さつ
ぱり消えるから・・・ウフフフ。ちーちゃん、君は・・・束さん
だけのものだよ・・・？」

・・・百合か？なんか姐さんよかは軽い感じはするな。

「お、おとうさんこわい・・・！」

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない」

束ちゃん・・・だったか？見事に歪みに歪んでるな。

姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄ったりだな。

まさかこの年でヤンデレとは・・・千冬の将来真つ暗だな。

友達がヤンデレとか波瀾万丈の人生しかないぞ。これ、経験者の
アドバイス。

「だからね」

「……ん？」

東ちゃんは俺の目の前に立ち、狂気を孕んだ虚ろな目で俺を見てくる。

……似ている。かつての俺のように世界から認められなかった
(……) 時と同じ目をしている。
そして……母さんから絶望してた俺の目と。

「お前を殺して……ちーちゃんをもらおうよ」

ならば……俺は親父にしてくれたようにこの子にも見せようか。

例え、どんなに人と違うことはあれども、みんな一緒だってことをな……。

「……面白い。俺相手にそこまで言うとはな……いいぜ。相手になってやるよ……“束”^{たはね}」

「気安く名前を呼ぶな！ちーちゃんに呼ばれるためだけにある名前なんだ！」

「と、父さん!？」

「心配するな。俺の事は知ってるだろ？死にやしないさ」

これが・・・後に世界を変える天才科学者となる“篠ノ之束”しのののたばねとの出会い。

ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言われるのはまだ先。

そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ先。

第七話 親父視点（前書き）

修正しました。

第七話 親父視点

本日は雷鳴轟く嵐の日なり。

外の空は雨と雷がどしゃ降りであらねず、家にいる奴もいるだらう。

ニュースでも台風って言って警報が出ており、外出は控えるようにと放送されてる。

そんな中、俺は……。

「あああつ！またやられたかつ！」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きながら立っていた。

周りにはここらを縄張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になっているのは彼女、束の仕業である。

彼女と出会い、宣戦布告されてから早五ヶ月。彼女にあらゆる襲撃を受けている。

十一月に出会ってから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年を取った。

今月は四月。だがそろそろそれも終わりそうである。

「・・・取り敢えず帰るか。懲りたらもうシヤブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう・・・くそが、てめえ・・・誰なんだよ・・・」

「名乗る必要はない」

そう言つと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を亡き者にしようとし、今回は覚醒剤をばら蒔くグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。

返り討ちにはしたが。今回でこのような手は七十八回目である。毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするような事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

・・・そのせいで鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん？どれくらいかって？取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじゃないか？

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「・・・俺もお人好しだな・・・嘘だとわかってても動くからな」

ため息をつきながら自宅を目指して走る。

「つーか雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。」

「・・・懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行ったな・・・おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。」

他にも気絶してる間に親父にイカダに乗せられて太平洋に放置されたこともあったな。

「・・・鮫、怖い。」

「ただいま」

「おかえりおとうさ・・・わわわっ、おとうさんびしょぬれ！ちふゆねえー！」

「なんだ一夏、今私は・・・と、父さん！？なんでびしょ濡れなんだ！？一夏、タオルタオル！」

「わかったー！」

「あ、ストップ。風呂に入るからいい」

家、マンションの自宅に帰ると案の定、千冬と一夏は慌てたようにバタバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになった靴を逆さまにしてぶら下げて乾かす。

ダバーッと水が流れ出て玄関に水溜まりができた。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まっていく。それを千冬と一夏が拭こうとするが自分でやると言い、脱衣場に濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場に入室。

温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・束は頭がいい。それも同年代より遥かに、大人よりもそのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかも知れない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいしな。いじめもあつたようだし。

人は自分と違う他人を毛嫌いする性質があるからな・・・束もそれに当てはまるのだろう。

・・・似ている、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろうか・・・」

かつて親父と姐さんが助け出してくれたあの日・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言っていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。

そんな母さんに甘えた俺は信じられなかったのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかったが体が弱かったせいで死んだと舎弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかった。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまった。

母さんは・・・もう帰ってこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなった。

部屋に閉じこもり、飯も食べずにずっと。

親父や舎弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかった。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姐さんもいたのに」

苦笑しながらシャワーを止めると風呂場から出てタオルで水気を拭く。

千冬が一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着るとタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん！ちゃんと服を着てよ！」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ると言ってきた。前までは一緒に風呂に入ってたのにな。と思いながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姐さんと出会った日からだったな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな？ボクは。よろしくね』？

そう言って姐さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかった。

その笑顔が、母さんとダブったから・・・。

俺は拒絶し、姐さんを殴った。

でも姐さんは殴られても止めようとはせずにただ俺に殴られ続けていた。

『フフフ・・・君がボクを殴って気が晴れるならいくらでも殴られてやるさ。君のお父さん、冬君に頼まれたからね』

そう言う姐さんにまたも母さんがダブリ、辛くなった。

部屋からは出なかったがその時は怖くて、母さんがいなくなるよ
うな気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かず走っている
と姐さんに助けられた。

最初は何があったかわからなかったが姐さんが俺を抱きながらコ
ンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたの
を見た。

・・・そういえば親父のやつ、トラックを海に向かって蹴り飛ば
してた気が・・・。

後から聞いたらあのトラックの運転手、俺を狙った刺客だったみ
たいだが・・・。

と、とにかく！姐さんは頭を少し打っただけで命に別状はなかつ
た。

簡単な検査で退院した姐さんは真っ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だったかい？怪我はなかったかい？』

その時の姐さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていた。

それで感極まって俺は思いっきり泣いた。枯れたと思った涙を流した。

姐さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持っているだろう。

母さんという支えを失った俺、本当の支えがない束。似ている。あの様子から、両親から愛されてないかもしれない。

「それより父さん、何してたの？こんな嵐の中で傘も差さずに」

「傘は飛んだし、仕事があつたし。お前らは休みでいいな・・・というわけで八つ当たりで今日の晩飯はゴーヤチャンプルーオンリーだ」

「え〜！またあのにがいの！？」

「理不尽だぞ父さん！せめてご飯を付けてくれ！」

「おかゆな。おかゆ」

ギヤーギヤー叫ぶ千冬と一夏をにやにやした顔で見ながらテレビをつけてみた。

嵐の影響か、見にくかったがニュースは見れた。

『怪奇！湖を走る女性！？』

「・・・なんじゃこら?」

「えー、こんなよりあいぼう! あいぼうがみたい!」

「人が湖を走るのか・・・? そんなの父さんくらいじゃないのか?」

「千冬、お前はゴーヤチャンプルと納豆を混ぜたものを食べ」

「ごめんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これです! これが湖を走る女性です!』

「どつせCGだろ。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎」

「・・・でも父さんならできるよね?」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやったことがある」

沈黙する千冬に訳がわからないといった一夏。

俺は二本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビューされた映像が映し出され・・・。

『やつほー。春君、元気かなー?』

「ブ

ッ!」

「うわっ!」

「ひゃっ!」

そこに映し出されたのはさっきまで思い出していた姐さんだった。それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

な、な、な、な、な、な、な、な、なんで!?!なんで姐さんがテレビにっ
!?

……よくよく見ると映像提供ロシア某局と書かれていた。
まさか姐さん……ロシアでまたやったのか(……)?

94

『春君、元気かな?できたら連絡ほしいなー!ボクに君の声を聞か
せて?』

『……あの、誰ですかこの人は?』

キャスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姐さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心が
へし折られるぞ。

前に俺に手を出した敵対組織の刺客がどれだけ心が折れたか……

テレビには昔、最後に会った時から変わらない姐さんの笑った顔が映っていた。

「・・・不老不死かあの人。俺より十以上年上のはずだぞ。」

「なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの方は・・・親父もだがなんで姐さんも化け物チートなんだ？」

「おとうさん、しりあい？」

「・・・うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になった人だ」

「お祖父さんの？父さん、でもあの方は二十歳前後に見えるけど」

「あれで十三歳年上だ。俺よりもな」

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗ったのは安心院なじみ（あじむ なじみ）だったか？

変な名前だが、前に

『ボクの事は親しみを込めてなじみさんと呼びなさい。もしくは妻と・・・』

『なんでやねん』

・・・あつたな。うん。こんなことが。
確か・・・さ、さ、さ・・・なんだっけ？とある対暗部用暗部の十六代目の当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主って噂があるが・・・どうだろ？

親父にひけを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたことで呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。
小学五年生にご褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌ま
で入れられて喰われる一歩手前だったと記そう。

親父に助けられなかったら大切な何かとお別れをした気が・・・。
くそう・・・ファーストキスは好きな人に捧げようと思ったのに・・・と悔やんだ。

姐さんは好きだが、ファーストキスを無理矢理奪われたから・・・
微妙。

「・・・どういつ関係なの？かなり親しいみたいだけど・・・」

・・・そんなに睨むな。何を不機嫌になってるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。

「さっき言ったがお世話になった人だ。母さんが死んでからは母親代わりをしてくれた」

「・・・ふーん・・・本当？」

「・・・なぜ疑う？そりゃあ、ファーストキスの相手は姐さんだが・・・」

バキィッ！

「ひえっ!?!」

「・・・おい千冬。したんじゃなくて無理矢理された（・・・）
（）からな？俺からは一切してない」

「・・・ふ、ふふふ・・・こいつは敵敵敵敵・・・」

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの姐さんを睨んでいた。

・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。どこで育て方を間違えたんだ？

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。

その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

死ぬ蛆虫とか、ちーちゃんを汚すゴミがとか、さっさと死んでちーちゃんを渡してくれない？みたいな内容だ。

・・・そういえば束って名字何かな？知らないんだけど。

「え？束の？束は篠ノ之ノノだけどどうかした？」

「・・・は？」

「あ！それぞれ！ほうきちちゃんのなまえもそれだよおとうさん！」

「・・・し、篠ノ之・・・？千冬、一夏、マジでか？」

「「うん」「

・・・うわぁ・・・東雲じゃなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘か
よー！

・・・ってことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして
生まれたんだな。彼女は。

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え？」

「篠ノ之なら俺も知ってるからな。挨拶するついでに束の話聞きに行こう」

「父さん？なんで束の名字でそんなに慌てるんだ？」

「……………」
篠ノ之とこの先代、つまりは束の祖父なんだが……俺の、剣の師匠なんだよ」

「……………え？」

てなわけで篠ノ之家、篠ノ之神社に行くことになった。

あの馬鹿（柳韻）から聞かにならん。あいつ、子供は大切に
すると思っただがな。

結果次第では躊躇いもなく柳韻を殺してしまうかもな……。

……今日の夢に姐さんが出てきて喰われそうになった。
鬱になって死にたくなった。

第八話 親父視点（前書き）

修正しました。

第八話 親父視点

本日は晴天なり。

季節外れの台風も去り、嵐も嘘のように過ぎ去った。
雨が降ったせいも、少しジメツとしていたが特には気にならなかった。

「……おとうさん、どこだよ？」

「篠ノ之神社。懐かしいな……かれこれ親父が死んでからだから……十二年か。何も変わっていないな」

現在、我ら織斑ファミリーはとある神社に来ている。
名前は“篠ノ之神社”。昔に修行していた時に住んでいたことがある場所である。

今日は東に会うためと一夏の言う“ほうきちちゃん”とやらに会うためにここに来た。

あのジジイ、まだくたばってないかな……。

「お。ここだここだ」

「……道場？大きいね」

「まあな。かなり昔に建てられた武家屋敷を改装したらしいから広いのは当たり前。さ・て・と・・・・」

神社の裏。少し分かりにくいがそこには木の扉があり、そこを開けると庭があり、その先には道場があった。

千冬と一夏ははっと感心する。

その間に俺はゆっくりと道場に近付くと中から僅かな音が聞こえる。

なるほど・・・練習中か・・・好都合だな。

ニヤリと笑うと千冬と一夏に待機するように言う。

でもついてくる。と言うので何があっても手は出さない、口は出さないと約束をした。

「んじゃ・・・たのも~~~~~!!」

ドゴオンッ!!

「え!?!」

「わっ!?!」

「お邪魔します。道場破りです!」

道場の扉を蹴り開けてずかずかと中に入る。

中に入れば袴を着た男女が竹刀を持ったまま固まっております、俺は靴を脱いで跨ぐ。

キョロキョロと見渡すと、壁側に苦虫を潰したような顔をする渋いイケメソがいた。

「……………お前か春樹……………」

「ういつす！柳韻、元気にしてたか？」

現在進行形で苦虫を万単位で食い潰したような顔をするイケメソは腕を組みながら俺を嫌そうに見ていた。

そいつの名は篠ノ之柳韻しののけりゅういん。篠ノ之神社、道場の現師範代である。

「お前は昔から変わらん。二十歳の時からまったく老けてない」

「体質だ。親父も似たようなもんだろ？」

「……………まあいい。何をしにきた春樹？」

「道場破り。てめえがどんだけ強いかと俺がどんだけ力を取り戻せるか知りたい」

「……………ふん。まあいい……………積年の恨み、ここで晴らさせてもらっぞ」

「それ、負けフラグだから。俺、カッコいいと思ってるようだがカッコ悪いぞお前」

「・・・・・・・・殺す！！春樹、貴様は何も変わってないのか!？」

「変わったぜ？体重と好物が。酒とマグロに加えてケーキをプラスだ。あ、他には一夏と千冬が好きだ」

「ぐっ・・・・・・・・貴様あ・・・・・・・・！」

「やるの？やんのか？やんのかゴラ？てめえ、一度も俺に勝てなかつたくせにいきがんじゃないやねえぞ柳韻」

「は、春樹iiiiiiiiiiiiっ!!！」

「あ。千冬に一夏、下がってな」

「ぼかーんとしている千冬と一夏を壁まで押してやると木刀・・・・ではなく真剣を持った柳韻がこちらに向かってきた。

「いいねえ・・・・・・・・達人の殺気、それは衰えていた俺を目覚めさせる・

・・・・・・・・」

「はああああああああっ!!！」

「楽しませてもらっぜ柳韻!」

「あ、いちか・・・あのひとは?」

「うらあつ!親父直伝のリアットオ!」

「ぐっ・・・!」

「あ!ほづきちゃん!おれのおとつさんだよ!まえにはなしたよね?」

「うん・・・すい、さわがしいね・・・」

「なんかスゴいパンチ(右ver)!!」

ドッゴオオオン！！

ぐぬおっ！？道場の壁に穴が！？

「ちーちゃん！東さんに会いに来てくれたの！？」

「東・・・ほら。父さんだよ、なんかお前の父さんと知り合いみたいぞ？」

「・・・あの腐れ野郎が・・・」

チエストオオオオオ！！

なんの！織斑家必須科目『指で真剣白刃取り』！！

カッキイイイン！！

な、なんだと！？

ウイイイイイハアアアアア！！

ぐばあっ！！

「え？いちかのおとうさんとちちつえはしりあいなの？」

「ああ。父さんは君のお祖父さんの弟子と聞いたんだが・・・」

「じいさまの？あの、あなたは・・・」

「あ、すまないな。織斑千冬、一夏の姉であの人の娘だ」

「は、はじめまして・・・しのののほづきっていいいます」

親父直伝！『手刀で何もかも叩き斬れ』！！

ズッパアン！！

や、やめろ春樹！道場が崩れる！！

ふははははは！！なんか楽しくなってきた！！

「おれ、おりむらいちか！おねえさんは？」

「・・・君、ちーちゃんの弟？」

「うん！ちふゆねえがいつもお世話になってます！」

「・・・うん。君はいいかな？私は篠ノ之束。束さんと呼ぶがいい
いっくん！ぶいぶい」

篠ノ之流古武術奥義・・・

させつかあ！織斑家必須科目『妙に痛い目潰し』！！

ズブツ。

ぐぎゃあああああああ！？目が！目があああああああ
あつー！！

「……つよい……いちか、いちかのおとうさんつよいね……」
「うん！まえにくまをなぐりころしたっていったよ！」

ドツゴオオオオンー！！

おらおらおらあ！！柳韻、弱くなったんじゃないかねえのか！？

ちよ、まつ、ちよつと待て春樹！

「……ちちつえ……」

「気にするな篝ちゃん、父さんはあんな感じだから気にしたら負け
だぞ……はあ……」

「ちーちゃん……やっぱり殺そう。指名手配させて世界から狙わ
れるように……ぶっぶっ……」

ランインパクト!!

著作権が……ぎゃああああああっ!?

ズドオオオオン!!

「……いつまでやるのだ父さん……」

「おー!すごいおとうさん!てからビームがでた!」

「ええ……?」

最後!親父直伝裏奥義!『シャイニングウィザード改』!!

あべっし!!

「……………」

「あつはっはっは！悪い悪い！ついやりすぎたわ！」

「春樹貴様あ！道場の修理にいくらかかると思ってるんだ！？」

柳韻との模擬戦、もとい俺のワンサイドゲーム終了後、道場は穴だらけになっていた。

他にも門下生数名がラ　ンインパクトに当たり、ボンバーアフロになっていた。

最大の被害を受けた柳韻は軽く頭に包帯を巻いて道場の無事な床に座って俺を睨んでいた。

当の俺は爆笑しながら柳韻の肩をバシバシ叩いているが。

その近くには千冬に束、一夏に篝ちゃんが道場の穴が開いた場所をつついたり、残骸を持っていた。

「・・・お前、体力が落ちたな？昔ならもつと鋭い動きができるだろっつ。」

「あー、お前にはわかるか・・・“氣”の操作も下手になったし」

「まあ・・・今までサボっていたツケだろ。なのにあの戦闘能力・・・化け物め」

「その化け物と戦ってその程度で済むお前もお前だからな？」

不良やヤクザ相手に暴れたから勘は戻ったが体力等はまだ微妙な感じである。

ラ インパクトは某野菜少年が主人公の筋肉バグキャラの技だが、“氣”を使うからな。

昔なら本気でやれば駆逐艦を消し飛ばせたが本当に衰えたな。

柳韻は真剣を鞘に納めながらため息をつく。

んだゴラア・・・殴り殺してやろうか。あん？

「春樹・・・もう大丈夫なのか？」

「・・・ああ。親父が死んだのは仕方がないと振り切ったよ。くよくよしてたら親父に殴られるからな・・・それにガキもできたからな」

「・・・信じられんな。あの春樹が子供を持つとは・・・昔から子供に好かれていたが・・・」

なんでこう、昔からの友人は信じられないみたいなの顔をするんだ？

子供は昔から好きだし、好かれていたし。だから何の問題はない
だろ？

少し大きめの竹刀を持つ千冬、篝ちゃんが使っているだろう竹刀
を持つ一夏を見てみると柳韻もまた、二人を見ていた。

視線に気付くと千冬は軽く微笑み、一夏は満面の笑顔で竹刀を持
ちながら手を振っていた。

それを微笑ましく見ながら手を軽く振り返した。

「父親らしくしているな春樹。かなりなついているじゃないか」

「まあな。可愛くて堪らん。邪魔するやつを二分で消し炭にできそ
うだかな」

「……………昔みたいに山を消し飛ばすなよ？」

「善処する。あれは仕方がないだろ」

「……………まあ、昔にちょっと……………ね。俺も若かったと言っかなん
と言っか……………」

「それより柳韻。てめえに聞きたいことがある」

「なんだ？そんなに改まって」

「お前の娘、束の事だ」

ピクツと眉が動いたのがわかった。

柳韻は真剣な表情で目を閉じると何かを考えるような仕草をする。持っていた真剣も床に置いて腕を組むと言いつらそうに口を開く。

「・・・東は生まれた時から剣の才能が無かった。代わりにあり得ない頭脳を持って生まれた」

「確かにな・・・あの年であの頭脳は異常だ。響と渡り合えるほどの、な・・・」

「・・・やはり、か・・・」

「で？てめえはいったい何をしてるんだ？東があそこまで歪んでるのはてめえのせいでもあるんだぞ？」

柳韻は千冬に抱きつく束を見る。

織斑家同様、篠ノ之家もまた昔から存在する由緒ある家系。

最初は神社の巫女としての家系だが、いつからか“篠ノ之流古武術”を編み出した時からそれは変わり、剣術家として変わった。

最初、織斑家と篠ノ之家は犬猿の仲だったが、俺の親父と柳韻の父親、篠ノ之^{しのの}総^{そうげん}蔵^{ぞうざん}の代から仲良くなった。

親父曰く、根性を叩き直したらなんか仲良くなった。らしい。

ジジイから剣を教えてもらったが、やはりどこか、才能の有無で

差別のようなものはするのだから。

子供は鋭いからそういう感情には誰よりも早く気付く。それを知ったからこそ、束は歪んだのではないか？

篠ノ之家に生まれたのに剣の才能は皆無。代わりに響と並べるような頭脳を持って生まれた。

嫌われない方が難しいだろう。だが、俺はそれすらも受け入れられる。

・・・親父がそうしてくれたように。

「てめえは馬鹿か？自分の娘と接するのに避けてどうするんだよ。子供は勘がいいからすぐにわかるぞ。嫌われてることくらいな」

「わかってる。わかってるんだが・・・どうしても考えるんだ。なぜ、あの子はあんな風に生まれたのか・・・って」

「・・・見損なっただけ柳韻。てめえがそんなクズだったとは・・・昔は背中を預けられる親友だと思っただんだがな・・・」

「・・・っ!」

「話は終わりだ。もし、束との接し方を違^{たが}えるようならば・・・俺はお前を殺す・・・!」

昔から衰えてない殺気を柳韻にぶつけながら、忠告をする。

・・・時が経てば人は変わるといっが、変わらないでほしかったな・・・。

「・・・帰るぞ千冬、一夏。話は終わったからな」

「え？あ、うん。わかったよ父さん」

竹刀を持っていた二人を呼ぶと、そのまま篠ノ之道場から出る。去り際に、柳韻の耳にこっそり呟く。

「ジジイにも伝えとけ。もし、変わらぬようなら俺は篠ノ之家を破壊するとな・・・」

「は、春樹！お前っ！」

「自業自得だ。あの子を追い詰めたのはてめえらだ。てめえらがあの子に愛情を注いでやってれば歪みはしなかった・・・わかるな？」

「ぐっ！」

「・・・はじめまして。ほうきちちゃん・・・でいいのかな？」

「あ、は、はい！」

一夏と同一年のポニーテールをした少女に話し掛けると、静かに自己紹介をする。

この子が束の妹か・・・目が似ている。歪みとかは関係なく、どこか、似ているな・・・。

自分の名前を教えると、ほうきちゃん……篠ノ之箒ののひと挨拶あいさつを交わす。

「いい？君はお姉さんが好きだろ？」

「はい！ちょっとこわいけどじまんのおねえちゃんです！」

「うん……君はそのままがいい。お姉さんを支えてやってくれ」

「……？」

「まだ、難しいかな？でも忘れないように。家族は、かけがえのないものだってね？」

よくわかってないようだが、箒ちゃんは花が咲いたような笑顔で頷いた。

頭を撫でてやると立ち上がり、千冬と話す束つかに近付く。

「……なに？今はちーちゃんと話してるんだ。お前に用はないから消えるよ」

「た、束！」

「……忘れるなよ。人は一人では生きられない。たった一人の肉親と親友だけではお前は間違まちがいなく壊れる（……）ぞ」

「・・・っ！う、五月蠅い！五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！お前には関係ないだろ！束さんの事は何も知らないくせに！！」

「当たり前だ。ちゃんと話してくれないからな・・・辛いことがあれば、千冬に相談するんだ、俺は嫌なんだろう？千冬、お前になら束は本心を明かす。絶対に、束を“一人にはするな”」

「？よくわからないけどわかった」

「じゃあな」

最後にポンと頭を軽く叩いてやる。

払い除けるかと思いきや、抵抗がなかったのに少し驚きながら今度こそ篠ノ之道場を出る。

・・・少しは、付き合ってくれたらいいのにねえ・・・。

柳韻、二度とへまはやらかすなよ。

お前は俺と同じ、父親なのだから・・・。

第九話 娘視点

今日の天気は晴れ。

雲もあまりなく、日光がさんさんと穏やかに照る、そんな日。
今日は祝日で休み。父さんと一夏と家におり、遊びに行く予定だ
つたが……。

「ううゝ……げほっげほっ！」

「38、6……風邪ひいたの？」

父さん、風邪ひいたようだ。

いくらバグキャラでも風邪はひくんだねって実感したよ。

「ち、千冬……貴様、俺を化け物扱いに……げほっ、したな……」

「さ、さあ？ほら。薬を飲んで」

訂正。バグキャラは風邪ひいてもバグキャラ。
なんで心が読めるのかわからない。もしかして勘？

私はベッドの上で死んでいる父さんに薬を飲ませると頭に冷えピ

夕を新しく張った。

あゝと気持ち良さそうな声を出す父さんは普段の堂々とした態度とは真反対なので少し新鮮だ。

「ちふゆねえ、おとうさんだいじょうぶ？」

「・・・微妙だな。まさか父さんが風邪ひくとは思わなかったからどうなるかわからないな。今日は出掛けるのは無理そうだ」

「えー！ひさしぶりにキャッチボールしたかったのに！」

「あゝ、すまん一夏。埋め合わせはするから部屋かりビングで大人しく・・・げほっ、しとけ。風邪移したら大変、げほっだからな」

そう言うと父さんはポストと布団にくるまると目を閉じた。

・・・なんか少しだけ出てる顔が赤くて色っpげふんげふん！

「ちふゆねえ、かおがきもちわるいよ」

「・・・い ち か？」

「ごめんなさいちふゆねえ！！」

にこっと笑いかけると一夏はなぜか頭を下げ謝る。なぜ？

「（・・・無意識だとしたら姐さん以上の恐怖になりそうだな・・・頭痛い）」

「じゃあ父さん、私と一夏はリビングにいるから何かあったら呼んでね？」

「んー」

父さんはのろろと布団から手を出すと力無く手を振った。

本当に珍しい。父さんはほとんど風邪や病気にかかったことないって言ってたのに。

・・・ならない方があり得ないけどね。

それに、たぶんだけど風邪をひいたのは前の季節外れの台風の時かな？びしょ濡れで帰ってきて上半身裸でうろついていたから風邪になるのは仕方ない気がする。

シャワー浴びても意味ないよ父さん。

油断してたせいで風邪になるとか・・・。

「ちふゆねえ、いまからなににする？おとうさんはつごけないみたいだしね」

「二人で出掛けるのは駄目って言われてるし・・・私は父さんの看病するつもりだ」

「ならおれも！おれもかんびょうするー！」

・・・迷うな。父さんをノックアウトした風邪だ。

一夏に移ったらとんでもないことになりそうな気がするな・・・
うーん・・・。

もしかしたら未知の病原菌かもしれないし・・・うむむ・・・。

取り敢えず一夏には雑炊か何かを作るのを手伝ってもらおう。

私はまだご飯を炊くこととお湯を沸かすしかできないし。

・・・今情けないとか言っただやっ・・・斬り殺すぞ。

なぜかは知らんが失敗するんだよ！

「ちふゆねえ？」

「む。なら一夏には雑炊を作ってもらおうかな？私は作れない・・・
し・・・」

自分で言っただけなんだが地味に落ち込む。

男である父さんは料理が得意で女である私は苦手で一夏は上達している途中・・・なぜか腹が立ってきた。

これが世の理不尽というやつか・・・。

なぜ神は残酷なのだ！料理もだがなぜ私はむ、胸の成長が遅い！？

東は私達の中では巨乳と崇められるほどでかいのになぜっ！！

答える神ッ！！貴様は私が嫌いかあああああつ！！

嫌いじゃないなら胸を大きくしてください！（必死）

・・・こほん。失礼、取り乱しました。

毎日朝に牛乳は飲むのだが束のようにたわわにはならん。なぜだ。束は胸がでかくなる魔法でも使っているのか？

千冬は同年代では大きい部類に入ります。

束が異常にでかすぎるだけです。

「わかったー！・・・でもちふゆねえ、りょうりできないんじゃ・・・？」

「ぐはっ！」

一夏の何気ない一言により、私は胸を押さえて蹲った。

・・・父さんが言っていた無垢な子供のきつい、かつ何気ない一言こそ一番胸に突き刺さる。これ、本当のようだ。

だって一夏・・・首を捻ってなんで？みたいな顔してるもん。

もし狙ってやってるのならアイアンクローで沈めてやる。

「と、とにかく！一夏は雑炊を作ってくれ！いいな！？」

「いえっさー！」

わーい！と言わんばかりに一夏は走りながら台所に行き、手を洗う。
それから鍋やら冷蔵庫から冷やご飯、卵、ネギを取り出すとまな板の上に置いた。

・・・はっ！？しまった！一夏はまだ一人で火は使ってはいけないだった！

私は慌てて台所に行くと一夏と卵雑炊を作ることにした。
私はまだギリギリで火を使うことは許されているからな。

・・・だけど父さんがクイズミリ ネアの一千万の問題みたいに私に火を使わせるのを悩んでいたのを思い出すと不安がある。
火を使わせるかってだけで二時間も考え込んでたし。

「（・・・以前に使って火事になりかけたのに気付けよ。どんだけ慌てたと思ってんだバカヤロー）」

「あれ？おとうさんのこえがきこえたよ？」

「・・・父さんは寝ているんだぞ？声が聞こえるはずがないだろう」

一夏の将来が心配になってきた。

何はともあれ、雑炊ができたので一夏と父さんの部屋に雑炊を持っていく。

父さんの部屋はマンションの一室の中で一番大きく、そこにはキングサイズのベッドがあったりする。

「・・・最初に聞いたなら」寝やすいだろ」「って言ったが・・・でかいぞ父さん。

逆に寝られるのか？私は普通に畳の上の布団がいいんだけど。

「おとうさんおとうさんぞうすいつくったけどたべれるっ？」

「んー、もらっしょー」

のそのそと起き上がる父さんは何度も言っつが普段とは違う様子なので新鮮すぎる。

なんかこう・・・弱々しい場面を見ると守りたくなるような・・・。

「まむまむ・・・」

「おいしい？」

「まずくはないぞ」

「・・・そこは美味しいって言いなよ父さん・・・」

一夏が雑炊を父さんに食べさせる（あーん）とまた布団にくるまり、爆睡し始めた。

「・・・あれ？私がやるはずだったあーんは？」

「……めずらしいねちふゆねえ。おとうさんがここまでよわってるのってはじめてじゃないかな？」

「確かに……だが今日はどこで寝ようか？」

一応、私達の部屋にもベッドはあるが、たいていは父さんのベッドに潜り込んで寝ている。

一夏はまだ小さいから父さんと一緒に寝てるけど。

……なんか、いい匂いがするんだよね。父さんは。

……この発言、私に変態みたいにならないか？

いい匂いがするのもそうだが、父さんと寝ていると安心感があるし、朝起きたらストレスとかゼロって素晴らしいオプション付きなのだ。

だから私は父さんと寝ている！ファザコンとか言われても構わん！
というか今のうちに父さんと寝ときたい！

「ねえねえちふゆねえ、いまからなにかしない？おとうさんねちや
つたし」

「なら人生ゲームしよう！東さんが持ってきたやつ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・待て。今なんかいたぞ」

声が出た方を見ると束と妹の筭がいつの間にか部屋に侵入していた。

「・・・鍵は？確かマンションのオートロック機能、なかったか？

「束さんが破った！オートロックなんざ束さんの前では無意味無意味！」

「・・・・・・・・あ。もしもし？警察ですか？不法侵入者が・・・」

「わー！待つて待つて！束さんと筭ちゃんは呼ばれて来たんだよ！
・・・そこに寝ているやつから！」

「・・・・は？父さんが二人を呼んだのか？」

「遊ばないか？？みたいに言われたから来たんだぜ！ぶいぶい」

「いえーい！とピースをする束、おどおどしながら束を止めようとする筭・・・。」

どっちが姉かわからん。

それは兎も角。不法侵入した束を父さんが昔、使っていた竹刀で頭を叩いておいた。

痛みに悶える束を放置して父さんの脇にある体温計を抜いて見て

みる。

「……37,8?え?早くない?まだ二時間くらいしか経ってないのに下がるの早くない?

「……まさか、回復力もバグキャラ並?

「医者泣かせだな。父さん。」

「ちーちゃんちーちゃん!東さん達とゲームしよう!」

「だがな……私は父さんを看病しなければならないし……」

「ならこれ。東さん特製の風邪薬だよ。これなら少しは治りが良くなるよ」

「……にしても。あれだけ父さんを毛嫌いしてたのに東は最近はよく関わるな。」

「最初は私が東の悩みを聞いたりしていたが、ちよくちよく家に来ては何かを話してたりする。」

「そして、たまに夕食を食べて帰ったりと家によく遊びに来る。」

「瓶の中にある透明な液体を父さんに飲ませた東はポンポンと布団に入る父さんのお腹を叩いた。」

「……本当に、何があつたのだろうか……?」

「おお……東、これ。また読んでいいから。ただし、あまり荒らすな」

「そして、借りてもいいけどちゃんと返すように、でしょ?」

「・・・わかっていたらいいよ。本だけなら大量にあるしな」

「うん。ありがと・・・行こ、ちーちゃん」

束に手を引かれて父さんの部屋から出ると、父さんが使っているけど入れてくれたことがない部屋の前に来た。

そして、束は鍵を差し込んで鍵を開ける。

中にはまず、大量の本が入っている本棚が目に入った。

その本棚はその部屋の壁を埋め尽くすような、それだけの量が部屋にあった。

「こ、これ・・・？」

「あ、ちーちゃん知らないの？ここ、あの人の趣味部屋って言うんだよ。たまに借りて本を読ませてもらってるんだ」

本の背表紙を見ると、あらゆるジャンルの本があることがわかった。

医療関係、遺伝子工学、機械系の専門の本やら、父さんの趣味なのか、ガンダムやらアニメ関係の本もあるのもわかった。

・・・えー。父さんって本を読むのか？

「あ。それはね、なんかあの人の親父ってやつが生前に集めていた本を全部もらったらしいよ？形見だけど俺には理解できないものが

多いから、つてね？」

「……なんかわかる気がする……父さん、勉強苦手って言ってたし……」

「え？でもあの人は高校じゃトップレベルの学力があるって言うだけ……？」

「待て待て待て。なぜお前が知ってるんだ？私は聞かされてないぞ？」

「……んー。まず人に知ってもらうなら自分を知ってもらわないとって言うてから色々、教えてもらったんだよ」

……なんか束を殺したくなってきた。

仕方がないのはわかる。父さんが束と向き合うためにやってるのはわかるけど、なんか嫉妬してしまう。

私も知らないことを私の親友が知ってるのは……なんか辛い。たぶん、一夏も束ほど、父さんの事は知らないだろう。

一夏は箒とリビングのテレビでゲームをしてるらしいが……。たしか、マ オカートをやったはず……。

「えっと……今日はどれにしようかな？」

「……遺伝子工学ってわかるのか？」

「うん。なんかわかつちやうんだよね……でもあの人は気持ち悪
がったりせずに接してくれるんだよね……」

本を読む東はどこか、嬉しそうに見えた。

だからかな？父さんになついて（？）いるのは……。

……父さんの食事をたかりによく家に来るのは……まさか、
ね……？

だとしたら東、お前は私の最大のライバルになりそうだな。

恋の……戦いの。私は負ける気はせんがな……。

「……今はそんな感情はないよ。まだ理解できないから……」

「そうか？……といふかななぜ育児雑誌があるんだ？」

まさにカオスとしか言えないような部屋だな。ここは。

見たことがない本や持ち出し禁止とか書かれたモノまであるんだ
が……。

東は鼻唄を歌いながら本を何冊か抜き取ると重ねて部屋から出よ
うとしていた。

「おい？」

「ん？借りてもいいけどちゃんと返すようにって言われたからね。
暇潰しに借りるんだ。学校で読めるし」

あの六法全書ってまさか父さんのか？

前に束が学校で読んでたタウンページよりも分厚い本は。

束は部屋に鍵をかけると、本をヨロヨロしながら持ち歩き、鍵を父さんの部屋の机に置いていた。

それから篝ちゃんに会う〜と言う束とリビングに行くことにした。

しばらく、というか夕食を食べるまで家にいた二人は風邪が治った父さんに車で送られていた。

・・・新しい父さんをいくつも見れた日だった。

第十話、親父（前書き）

八十万アクセス突破。

すげー。ハロウィンの日のアクセスなんか十三万アクセス行ってたし。

最近は春樹のISをどうするか迷ってますね。

・・・いらんかWWW

第十話、親父

本日は晴天なり。

夏が近付いているのに今日は過ごしやすい環境である。
そんな中、俺は……。

「わーい！ゆうえんちー！」

「おおきい……」

「……人が多いな……」

「ちーちゃん！ちーちゃん！あれに乗ろうあれ！」

「少しは静かにしやがれ」

遊園地に来ている。

千冬&束の卒業&中学入学祝いに無理矢理休みをもらって来ているわけである。

いやー、早いものだね。千冬と一夏を引き取ってから三年近くか・
・長いようで短かったな。

……あ。ちなみに時期が飛んだというツツコミはなしだぜ？別に報告する事はないからな。

あえて言うならば千冬を鍛え（いじめ）たり、千冬を鍛え（いじめ）たり、一夏が料理の準鉄人になったり、篝ちゃんの師匠になったり、千冬を鍛え（いじめ）たりしたくらいだな。

「（・・・ああ・・・私は生きてるんだな・・・）」

「・・・ちーちゃん、ドンマイだよ。後で束さんが慰めてあげるから」

「・・・あー、いや、すまん。つい・・・」

今まで弟子を持ったことも自分の子供に教えたりする事がなかったから嬉しくてつい・・・すまん千冬。

後は束との関係くらいかな？

以前に束と篝ちゃんを家に呼んだ時にお宝部屋を見たら？なんか気になるものがあったって好感度が少しだけ上がったのだ。

呼び方は“それ”から“お前”に変わり、ちよくちよく遊びに来ては荒らしまくってる。

ちなみにお前って言うたんびに拳骨で指導をしているが。

「おとうさん！あれにのりたい！」

「・・・私は待つてるから行ってらっしゃい」

「まあまあ、楽しもつぜ」

ガシッ、ズルズル・・・

「い、嫌！あれだけは嫌なんだ父さん！」

「~~~~」

「まあまあちーちゃん・・・諦めるのも肝心だよ？」

「い、嫌だあああああつ！！！」

嫌がる千冬の手を引いて引き摺りながら遊園地の定番・・・ジエツトコースターに乗ることにした。

むっふっふっふ・・・いい声で鳴けよ？

しがみつくと箒ちゃんの中を擦り、マジ泣きする千冬の頭を撫でた。

「すまんすまん。次はあれな？あれなら怖くないだろ？」

「……父さんのいじわる……」

「悪い悪い」

まったく悪びれずに千冬の頭を乱暴に撫でた。

千冬はムスツとしていたが仕方がないなみたいに笑うと座っていたベンチから立ち上がった。

「……なんか見られてるな……そんなに気になるかバカヤロ！」

「なあ、あの子可愛くね？」

「むしろ俺は紫の子の方がいいな」

「ねえねえ！あの人カッコよくない！？モデルさんみたいだよ！」

みたいな会話は春樹達には聞こえなかった。

というか聞いていたら間違はなくその遊園地は血でまみれた地獄と
なってしまうだろう。

だって……親バカだもの。みつを。

「ねえ」

「ん？なんだ？」

「また本、貸してよ」

「いいぞ……ってかもう読んだのか？タウンページ並みに分厚いはずだが？」

「……学校、面白くないもん」

そう言った東は少し拗ねた様な顔をしてそっぽを向いた。
うーん……まだ心を完全に開いてくれないな……。

千冬も東と同じ中学校に行かせたがやはり馴染めない様子。
あそこまで早熟してる上に世界が羨むような頭脳を持つから普通の人間では付き合えないだろう。

……心配だ。

「やつほー！」

「い、いちか！まってよー！」

「走ると転けるぞー！……で？中学校はどうだ二人共。馴染んだか？」

「まあ、私は・・・うん。慣れた・・・よ?」

「なんで疑問形なんだよ」

「ちーちゃん、皆に気に入られてちやほやされてるもんねー」

「た、束!」

「なぬ・・・?まさか千冬、彼氏か?彼氏ができたのか?ん?言え。早く吐け。そいつをコンクリート漬けにして東京湾に沈めてやるから」

「ち、違う!違うよ父さん!(私が好きなのは父さんだし・・・何を言ってるんだ私はあああああつ!!)」

「むしろ鮫の餌にしたら?ちーちゃんに手を出す奴は見敵サーチアンドデストロイ必殺でいいんじゃない?」

「・・・束」

ガシッ!

俺と束は同時にガシリと握手をした。

ここに千冬を守る会の設立した!

「これ、ちーちゃんに好意を寄せてるやつ、厭らしい目で見るとのリストだよ」

「ぶっ血killer」

「いや、でも私達は親子だし・・・」

中学生にはありえない大きさの胸から紙の束を出す束、その紙の束をイイ笑顔で読む春樹、なんか自分の世界に入った千冬・・・。遊園地の一角がかなりのカオスになっていた。

そこに新たな火種が・・・。

「ねえ坊や達、おじさん達とイイコトしないかい？」

「なあああに息子に手を出してんじゃゴラアアアアアッ!!」

「けっぶ!?!」

いかにも誘拐するぜ!と言わんばかりに一夏と篝ちゃんに声をかける変態をドロップキックで蹴り飛ばした。

・・・さて。現在、春樹達のいる場所はメリーゴーランドの上である。

そこに春樹の脚力で蹴り飛ばされた変態はどうなるでしょう?

「ぶるああああああ・・・っ」

模擬回答。地平線の彼方まで飛ぶ。
遠心力も僅かに加わり、変態は星となった……。

参考。春樹のキック力はダンプカーが時速65?でぶつかる時に生じる力と同じである。

無論、手加減はしてあるが……。

南無。

「この如月ってあのクソガキか？」

「うん。入学した時に馴れ馴れしく声をかけられたよ……目が氣持ち悪かった」

「……うむ。慰めてやろう。我輩に抱きつきたまえ」

「断る。ちーちゃんの胸に埋まる方が……ちーちゃんの愛が痛い
いゝゝ!!」

ギリギリと頭を掴まれる束はバタバタと暴れるがアイアンクローをする千冬は真っ赤になりながら極めていた。

……なんだかんだでいいコンビだよな。二人は。

ちーちゃん痛いゝゝ!とか黙れ!お前の胸に自分で埋まってる!つてやりとりは聞かないフリしてメリーゴーランドの馬に乗る一夏と篝ちゃんを下ろした。

「あの二人は無視して何か行こう。他人のフリを・・・無駄か。俺
顔は千冬に似てるからな・・・」

グルツと周りを見ると目、目、目。すげー見られてるな。

取り敢えず千冬と束の首根っこを掴んでズルズルと引き摺り、一夏
と篝ちゃんとその場から離れた。

・・・え？ナンパ？丁重にお帰り願ったら急に手の骨が砕けていな
くなりましたがなにか？

「うっ……気持ち悪い……」

「……まさか絶叫系のオンパレードとは予想だにしなかったな……
ほら千冬。水飲んどけ」

「……ありがとう、父さん」

……はあ。俺は絶叫系のアトラクションは好きだがまさか千冬がここまで苦手とは思わなかったな。
グロッキーになってベンチで死んでる千冬にペットボトルのミネラルウォーターを渡す。

うーん、一夏と束はピンピンしてるが箒ちゃんはギリでアウトか。
なんか疲れてるし。

「……大丈夫？なんか悪いな箒ちゃん」

「だ、だいひょうぶでふ……」

「駄目だこりゃ」

ふらふらとする箸ちゃんに呆れた感じに目を向ける。
うむむ……！これから昼食にしようとしたんだが……どうしよ？

「たべるー！」

「食らうー！」

「お前らに聞いた俺が馬鹿だったな。千冬と箸ちゃんはどつする？」

「……お腹も空いたから食べる」

「わ、わたしも」

「一夏と束は即決。バイキングを希望。」

千冬と箸ちゃんはグロッキーになりながらも空腹を抗議。

「……よって飯を食らおう。」

「……バイキングに行きたいか」

「「おー！」」

「お、おー？」

「……いや、箸。真似しなくていいからな」

ノリがよくておじさんは嬉しいよ。

こゝこの味はあああああつー!!

「・・・今のは宇宙からの交信か？カレー好きな料理人の顔が浮かんだんだが・・・」

「・・・頭、大丈夫？」

「んだとゴラア」

バイキング終了のお知らせ。

案の定、食いまくったのは一夏だけ（・・・）だった。

束も暴飲暴食するかと思っただが俺が貸した“遺伝子工学の全て”を読むのに夢中だったからほとんど食べてない。

あんだだけテンション高くせにそれはないわー。と思っただ俺はおかしくないはず。

千冬と箒ちゃんは和風コーナーの料理を手当たり次第食らい尽くしていた。

・・・千冬は兎も角、箒ちゃんは小さい体に入らないような量を食べていたのは気のせいか・・・？

・・・え？俺？珈琲とサンドイッチしか食べてませんが？
だって腹減ってないもん。

なのに我が子達の陰謀により、かなりの料理を食わされた。

おのれ。俺を太らせたのかてめーら。

「絶叫系逝く？今なら胃の中をぶちまけられるぞ」

「い・や・だ！」

「さすがにそれはないよ」

断固拒否ッ！と言わんばかりに首を振る千冬、呆れた目で見る束。ちよつとした冗談だろうがよ……。

絶叫系のアトラクションはパスしてジョズに似たツアー式のアトラクションに搭乗。

……これがまた恐ろしい。本物のライオンとか使って説明してくれるんだが。

どこのサファリパークだコノヤロー！

バンバンとバスを叩くライオンに一同は怯えていたが、俺が一睨みするとあら不思議。全速で逃げた。ふふん。ライオンとバトった事がある俺を嘗めんなよ。実家にもライオン飼ってるんだよ！

……取り敢えず千冬と一夏には黙つとこつ。

あそこは動物の魔窟に加えて変態どもの城だからね。うんうん。

「おとうさんアイスクリーム！アイスクリームたべたい！」

「東さんも〜！」

「勝手に走り回るな！って待てやゴラアアアアツ！！！」

「きゃー！」

「キヤー」

「……東、父さんが嫌いじゃなかったのか……？ 篤、私達も行くのか」

「あ、はい」

いくつかアトラクションを回ると一夏と東のテンションがランナーズハイみたいになっていた。

俺はそれを追い掛ける。その後ろを千冬と篤ちゃんが手を繋いで歩く。

……そのせいで周りから微笑ましい、生暖かい視線を向けられるはめになった。

「ぜえ……ぜえ……勘弁しろよ。今の俺はおっさんなんだぞ……」

「……それ、全国のおっさんに喧嘩を売るようなセリフだよね？ 父さんほどおっさんは似合わない気がするぞ」

「経験は取り戻しても体力は無いに等しいんだよ。知ってるだろ？」

千冬を鍛え（いじめ）る際に自分も鍛えてはいるが全盛期にはまだまだ程遠い。

・・・だが一般人よりかは遥かに上だが。

リハビリがてらにジジイと柳韻とバトルをしているが引き分けが多い。

前までは瞬殺できたんだけどね。

「あ、一夏！待て！」

「あ、いいよ父さん。私が捕まえるから休んでて」

「千冬？おい！」

また一夏が走り回り始めたので捕まえようとしたが千冬が手で制して千冬自身が一夏を追い掛ける。

・・・気を使わせちゃったか・・・。

ため息をつくときポスンと隣に誰かが座った。

そちらを見てみると束がアイスクリームを舐めながら座っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・なんか喋れよ。ただ単に黙ってるだけじゃわかんねーぞ」

「・・・なんで私まで呼んだの？」

「・・・悪い。あんなにはしゃいで今更それか？」

「う、うるさいよ！いいから答えてよ」

束は少し顔を赤くして叫ぶが今更感があるから怖くもないな。

「なんでと聞かれてもなあ・・・ただ単にお前を楽しませたいだけだけど？」

「え？」

「お前、たまにだけど“自分は何のために生まれたか？”って考えてるだろ」

「・・・」

「答えのひとつとして今日の遊園地だ。今日の一日を通してどうだった？楽しかっただろ？一夏とはしゃいで楽しかっただろ？ん？」

「それは・・・」

「それでいいんだよ。“自分は何のために生まれたか？”なんて誰だって思う。人生を通してそれを見つけるのが普通なんだよ・・・」

今の子供であるお前が難しく考えなくてもいいんだよ。今はただ楽しめ。お前はまだまだこれからなんだぜ？」

「……………東さんは……………私は……………」

「迷え。悩め。探せ。お前にも俺のように“答え”を見つけれは
ずだよ」

最後にガシガシと頭を撫でると持っていたアイスクリームのコーンを食べ尽くした。

そして丁度、逃げ出した一夏を千冬と篝ちゃんが連れてきた。

……………一夏の頭にタンコブがある……………千冬に殴られたのか。

「待った？」

「いや。お疲れ、一夏は速かっただろ？」

「……………まあね」

一夏を肩に担ぐと千冬と篝ちゃん、そして東と観覧車に乗ることにした。

その途中、東は俺に近付くと少し迷った感じに話しかけてきた。

「……………東さんも見つけれられるかな？」

「望めばな……で。改めてはじめまして“篠ノ之束”。俺の名前は織斑春樹だ」

「……まだ完全に心を許した訳じゃないけど……よろしくね。私は篠ノ之束。あなたに興味が沸いてきたよ」

「はは。いいぜ？簡単に心を許すのは本当に信頼してる相手だけにしな」

一夏を肩車し直すと束と握手する。

観覧車に乗る俺達。束の顔は少し晴れやかになっていた。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

少しずつ束と近づき始めた。まる。

第十話、親父（後書き）

無理矢理すぎる気がするな。

ここにて束の研究者フラグ&IS作成フラグ。遺伝子工学っぽい感じがするもん。

束は少しデレましたがまだまだ先ですよ。ヤンデレ化がゴールです。

次回は時間が飛ぶかも。

第十一話、親父（前書き）

あとちよっとで百万アクセス。

IS専用機はマジで悩む。いるかいらんか読者はどちらか……！

というかIS史上初のネタを使いそうなんだが……。

今回は日常編みたいな。ISには欠かせないあの方が出ます。

第十一話、親父

本日は晴天・・・なり？

まだ暗いからわからないが天気はいいと思う。

現在の時刻は午前五時半。よい子の皆、サラリー戦士の方々は夢の中だろう。

「ふあああゝ・・・ねみい・・・」

「ほら父さん、早く行くよ」

「ういいい・・・」

「おれもねむい・・・」

我らが織斑家は午前五時半に起床、支度をして朝のランニングに出掛ける前である。

千冬が剣道部に入ると鍛えるとスタイル維持の両立で規則正しい生活を強要された。

クソ眠い中、千冬に一夏と一緒に叩き起こされ、ジャージに着替えるのは嫌にイライラする。

実際に一夏はこっくりこっくり船を漕ぎながら隣をゆったりとしたペースで走ってるし。

「あ、おはようございます」

「どうも」

「おはようございます」

「うー、おはようございませぬ」

すれ違うランニングをする人に挨拶をしながら定番の川原を走る。微笑ましそうにおっさんは一夏を見ながら反対側に走っていった。

しばらく走ると後ろから誰かに頭を叩かれた。

「おはよう春樹。相変わらず眠そうだな」

「……俺は夜行性なんだバカヤロー。てめーみたいな鶏じやねーんだよバカヤロー……バカヤロー」

「なぜ三回も言う!? お前、昔は朝型だっただろっが!」

「人は時間が過ぎれば変わるぞ柳韻。実際に煙草を吸わなくなったし、テロリスト相手に暴れることもなくなったし」

「……テロリスト相手に暴れるのはお前くらいだぞ」

「お前も昔はヤクザ相手に無双してたろっが……ふあああ……あぶっ」

欠伸をしながら隣に並んで走る柳韻を見る。
こいつ、毎朝ランニングしてるらしいがよくやるもんだな。俺なん
か親父が死んでからはまったくしてないぞ。

その隣に篝ちゃんがジャージを着て走っているけど。

「で、お前さんはまたやったのか？」

ゴスッ

「は？何の事だ柳韻。俺が何かしたと？」

ゴスッゴスッ

「したたる！また墮としゃがって！お前の体質は底無しか！」
フラグメーカー

ゴスッゴスッゴスッ

「はあ？体質フラグメーカーだあ？親父みたいなリア充じゃねーよバカヤロー！」

ゴスッゴスッゴスッゴスッ

「こいつ……！昔から鈍感は治らないのか!？」

ゴスッゴスッゴスッゴスッゴスッ

「むしろ鋭いぞ俺は。半径4？以内ならスナイパーを見つけれられる

ぜ？それに俺はモテないんだよクソヤロー！」

ゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツ

「「・・・やんのか？」」

ゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツガスツ！！

「表出るや！ぬっ殺してやんよ！！！」

「上等だ春樹！今度こそ俺が勝つ！！！」

「「篠ノ之流・無手奥義“居抜き”！！」」

ズガアアアアーン！！

「・・・なんでこうなるんだ・・・」

千冬の咳きが静かな朝に響く爆撃音に打ち消されるのだった・・・。

ちなみに一夏と篝ちゃんは川原で石を集めてたり、竹刀を千冬と振ってたりしたそうだった。

時間は飛んで午前六時四十五分。帰宅すると朝飯の用意をする。

今日はスクランブルエッグにウィンナー、ベーコンにサラダに食パンにした。

・・・え？柳韻？俺の完封勝ちですが？

「「「いただきます」「」」

「いただきますーす！」

「・・・またお前か束・・・」

「おお！美味そうだね。さすがはちーちゃんの父親！やるやるー！」

「・・・作ってやるから座ってる」

「わーい！」

遊園地の時から朝飯時に束が乱入してきたりするのはデフォになっていた。

柳韻達の家では食べないらしいがなぜか織斑^{つむぎ}家では食べるのでよく来たりする。

鼻歌を歌う束にも同じメニューを渡すと自分も食事再開。

「あ！やばい！時間が・・・束、早く行くぞ！」

「ああ！待ってよちーちゃんー！」

「車に気を付けるよ」

「行ってきます！」

「じゃあねいつくん！また夜に来るから（……………）！」

「来んな」

現在の時刻、午前七時半。千冬、束、登校時間。

千冬に弁当を渡すと千冬は食パンを口に加えながらバタバタとベタな朝の風景を見せながら束と学校に向かった。

……待て。ナチュラルに束に俺の弁当を取られたんだが……。

俺、飯抜き？

「おとうさんはやくはやく！」

「それよりもお前は大丈夫か？ハンカチは？ティッシュは？弁当は？」

「だいじょうぶだよ！」

束に貸していた“ロボットとは”と“宇宙とはなんたるか”を本棚に仕舞いながら歯を磨き、準備をする。
んー、後十五分か・・・少し急ごう。

・・・ふむふむ。束はまた何冊か本を持っていったみたいだな。
何の本かはわからないが束はよくあんなの読めるな。親父の親友からもらったものを保管しているだけだから俺は読んでないし。

「おーし。行こうか」

「れっつじー！」

午前八時。俺、一夏、登園&出勤。

ママチャリに乗って一夏の幼稚園にGO。一夏は後ろの席にこじんまりと座っている。

これが朝の日常。

一夏を幼稚園の先生に渡すと俺はさっさと仕事に向かう。
たとえ、美弥先生（名前で呼べと言われた）がなんか熱っぽい視線を向けてたとしても。

「はよーじざいます」

「おや。今日は早かったね春樹君」

「はは。一夏が準備が早かったからですよ十蔵さん」

「はっはっは！父親してるね春樹君、私も子供が欲しくなったよ」

「いやいや、子育ても辛いですよ。一夏なんか最初は夜に泣いては疲れましたからね……」

清掃員として働く会社に来ると先輩に当たる轡木十蔵くわぎじゅうぞうさんに挨拶する。

十蔵さんは笑いながら緑色の制服に着替えているが本当に寝不足になるぞ。俺は働いてなかったからよかったものを。

「今日も頑張りましょうか春樹君」

「うす」

午前九時、仕事開始。

今日もいつもと変わらぬビル内部を清掃することになった。

普段も変わらず、ビル内部を清掃したり、備品の補充したりするのが俺達の仕事。

たまにキャリアウーマンのお姉様方に食事に誘われたりするが全て断る。

千冬と一夏と食べるのが一番いいから。

「……春樹君、相変わらずモテるね」

「はい？十蔵さんまでそれを言いますか。俺はモテないですよ」

「（・・・ルックスも性格もいいのに勿体無いね。彼、自分に寄せられる好意にまったく気付いてないようだ）」

「・・・なんすか。俺、なんかしました？」

「春樹君。それを直さないと結婚はできないよ？」

「結婚はしませんから。二人の子供が一人立ちできるようにって、なおかつ余裕があったらしますよ・・・たぶん」

トイレにてトイレトペーパーを投げながら補充すると十蔵さんがため息をついていた。

・・・本当になんかしたか俺？

「（うむ。頑張りたまえよ諸君。おそらくはこの会社の未婚のベテランも新人の女性はみな春樹君を狙っているだろうしね。私は恋が実るのを祈るよ）」

「えー、次は十七階の資料室の清掃すね。十蔵さん、本業の方は（・・・）いいんですか？」

「妻に任せているから大丈夫だよ。さ、早く行こうか」

「うい」

実は十蔵さん、会社の清掃員なんてやってるが実はこの会社の親会社の社長なのだ。

視察の名目で十蔵さんの経営する会社の子会社で清掃をしながら横領やら賄賂、セクハラについて調べてるのだ。

・・・最初に聞かされたのは昼休憩だったな。

十蔵さん、奥さんの愛妻弁当を食べながら

「実は私は社長なのだよ春樹君」

って言われた時は飲んでいた珈琲を吐き出した。

しかも親会社の社長と聞いてビビって腰が抜けたりはしなかったが逆に納得がいった。

だって十蔵さん・・・清掃員なんて生温いオーラを纏ってるもん。

それも人の上に立つ親父に似たオーラを。

それから十蔵さんとはたまに酒を飲み交わす仲になった。

奥さんとも会ったが若い。 歳（奥さんのために伏せるよ！）らしいが二十代にしか見えねーよ・・・。

「あ！また隠れて煙草を吸ってやがるな！ゴラアアアアッ！てめーらあああああっ！！」

「あ、やべ！春樹さんだ！」

「ヒイイイ！許してください春樹さん！」

十蔵さんからの頼みでたまに会社の規則を破るものを制裁したりしている。

そのせいか会社の老若男女問わずに“春樹君”とか“春樹さん”とか“アニキ”とか“親分”って呼ばれるハメになってしまったわけだ。

「煙草を吸うなら喫煙所で吸え！こんなところで吸ったらヤニ臭くなるだろうが！！」

「すんませんでした！」

「許してほしいければ食堂の日替わり丼を奢れ。あ。後はコロッケパシな」

「・・・春樹君、それは中学校のパシリとなんら変わらないよ」

これが会社で働く俺の仕事模様。

午前九時に始まり、正午に昼休憩、午後一時半に仕事再開。それから午後五時半まで仕事をするのである。

「じゃあお疲れ春樹君。また明日もお願いするよ」

「十蔵さんも。また暇になりましたら行きましょつよ」

私服に着替えながら飲むジェスチャーをすると十蔵さんは満足気に頷いた。

十蔵さんと飲む約束をすると外に出てママチャリで一夏を迎えに行く。

その途中に働いていた全員に声を掛けながら幼稚園に一直線。

「あ、おとうさん〜!」

「悪い。待たせたか?先生、いつもありがとございます」

「あ、いえいえ!」

「ほら美弥先生、アタックアタック!」ヒソヒソ

「え、でもでも・・・私は・・・」

「じゃあ俺はこれで。一夏、乗った乗った」

「あ、ちょ、あの!」

聞こえない聞こえないーい!美弥先生の熱っぽい視線と慌てた感じの声は知らない!

・・・最近は何の先生方の目も肉食獣のそれだからマジ怖い。

というわけで退散。あんな空気の中にいたら死ぬる。

ママチャリを漕ぎながらチャリンチャリン家に向かう。

「今日の飯、餃子アルヨー」

「えー、おれはとんかつがいいな」

「つべこべ言つと飯抜き、アルヨー」

「ごめんなさい！・・・というかおとうさん、そのしゃべりかたなに？」

「似非中国人アルヨー・・・やめよう。なんかイライラする」

「ふーん・・・」

ママチャリを走らせながら一夏と恒例の幼稚園で何があつたかを話す。

前までは先生方の目が怖いとか言っていたが今は篝ちゃんや同年代の友達の事を話している。

取り敢えず先生方の話はスルー。俺も怖いもんよ。

「あ。おとうさん、ちふゆねえがいる」

「はい？千冬・・・いたわ。何してんのあいつら？」

「ちーちゃんちーちゃん、あの人の写真いらない？前に盗みど・・・げふんげふん！撮ったものがあるよ」

「全部寄越せ。ネガもメモリーもだ」

「毎度！報酬はちーちゃんのお愛……いだだだだだっ！」

「……ほお……シャワーの最中の写真があるのか……」

千冬がなんかデジカメや一眼レフの写真を見ながら束にアイアンクローしてるんだが……。

周りからかなり浮いているが話しかけるとしようか。

「おい千冬」

「……なんだ父さんか……何をしてるの？」ダラダラ

「……一夏を迎えに来て帰る途中なだけだが……千冬、鼻血出てるぞ」

「おっと。私としたことが……」

「ちーちゃん痛い……！！天才の束さんの頭が割れる……！！」

「むしろ天災だな」

「……妙にしっくりくるなそれ。ほらほら、さっさと帰るぞ」

学校帰りの千冬と束を加えて家に帰宅。

束は違和感なく我が物顔してソファーにふんぞり返っていた。

「いつくんいつくん！ゲームやろうゲーム！東さんと勝負しよう！」

「いいよー！」

「帰ってきたら手洗いうがいだバカども。さっさと洗面所に行け」

「ぶー。いいじゃんそんな」絞め殺すぞ」「いつくん行こうか！」

うむ。素直なのはいい事だな。

ちよつと右手をバキバキ鳴らしながら笑いかけたら顔を真っ青にして洗面所に行ったよ。

え？酷い？そんなのは俺の辞書にはない。

「とつかおい。篝ちゃんとかと一緒にいなくていいのか？」

「東さんはあんなのよりちーちゃんやいつくん、貴方と一緒にいる方がいいよ。篝ちゃんはあれに気に入られてるし・・・」

PS3でアーマードコアやりながら東は寂しそうに呟いた。
取り敢えず柳韻、ジジイ。てめーら死刑。

東となるべく話したり付き合おうように言ったのにあの馬鹿二人は・・・
・頭が痛い。

「……今日は泊まってけ。お前の事だから着替えとかあるんだろ」
「……いいの?」

「普段から遠慮なんかしてないから今更だな。千冬、お前の部屋・
・喰われないように気を付ける」

「……ちーちゃんの……部屋……でへへへ……」

「父さん、部屋の変更を提案する。ベランダだ、ベランダにするんだ父さん！私はまだ乙女を散らしたくない!!」

「……難題にぶち当たったな」

この変態をどこに寝かせようか。

一夏は俺と寝るのが当たり前だから却下。千冬は一人で寝ているからそっちにしたら……千冬、泣くな。

「なら皆で寝るのは?……死ぬっ！このポンコツが！束さんの道を阻むでねえ！」

「それだ！束、たまにはいいこと言うじゃないか！」

「えへへへ、ちーちゃんに褒められたよ」

「……俺、確かお前が俺の布団に潜り込むの禁止にしたよな？千冬、貴様は約束を破るのか？」

「父さん成分が足りなくなっただから補充するだけだ」

「……なんだその未知なる元素は」

「というわけで今日は久しぶりに、本当に久しぶりに父さんのベッドで寝かせてもらおう」

「東さんはちーちゃんに抱きつく〜!」

「おれはおとうさんとねる〜!」

脳内会議……会議……会議……終了。

結論。諦めよう。

「もうやだ……どこで育て方を間違えたんだ……」

「大丈夫だ父さん。父さんの愛が強かったから今の私がいるんだ」

……今日の千冬、なんか壊れてる気がするな……。

なぜだ。俺は育て方を間違えたのか? いやいや、ちゃんと愛情を適度、過剰に注いでそれはもう、親バカレベルに育てたんだが間違えたのか?

ふと目を向ければ東と一夏はゲームに夢中。千冬はそれを見ながら自分も参加しているがイマイチの様子。

「ふははははは〜！東さんのミサイルを食らえい！！」

「なっ！くそっ！近接武器はないのかっ！」

「ちふゆねえがんばれ〜！」

・・・まあいいか。不自由なく、不便なく暮らせるなら何も言う事はないな。

台所に向かう途中にリビングにあるテーブルに乗るパソコンが目についた。

「・・・ロボット？」

東のパソコンらしく、そこには何かの設計図が書かれていた。

・・・インファイニットストラトス“IS”？

駄目だ。わからん。アーマードコアの設計図やガンダムとかならまだしも、こんなのわかるわけがない。

昔は頭はよかつたんだがなあ・・・老いは敵だな。うん。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

寝るときに抱きつく千冬と東の母性の象徴に成長したなあと感じた。まる。

第十一話、親父（後書き）

轡木十蔵登場。IS学園フラグが建ちました。

その他諸々ですけど。

ちなみに、原作一夏ラヴァーズにフラグは建たないことにしました。

誤解されてる方もいますが春樹は義理の父親です。近親相姦？見た目だけだろって思いますね。

実際に世界の富豪は30年下と結婚なんてあり得るし。

愚痴るのはこれだけにして。次回からちよくちよく時間が飛びます。

第十二話、親父（前書き）

これ、たぶんISの二次作初のネタじゃね？

ちょっと長いよ！

今回は二年くらい時間が飛びます。

だって・・・書くことないもん。

第十二話、親父

本日、晴天なり。

時間が流れるのは早いもので一夏は小学生になり、千冬は受験生、生徒会長になっていた。

束や篝ちゃんもすすくすく成長し、篝ちゃんは僅かながら一夏に恋をしているようだ。

「……………他人の色恋沙汰は気付くのになぜ自分のは気付かないのか……………」

「なんか言ったか？」

「いや、なんでもない。父さん、早く束の所に行こう」

「あいよ」

千冬は生徒会長になったせい、かなりクールになり、口調もピシッとした感じになっている。

髪型も昔はセミロングだったが、今では俺の真似をして長く伸ばしてポニーテールにしている。

なのに千冬は髪とか手入れしないから俺が櫛を使ったりしている。

…………さらに悪いことに千冬、かなり俺に依存して前に俺のシャツを盗んだことがあったりする。

最初は間違えたのかと思ったがサイズも違っし、洗濯物は分けてるからおかしいと思ったわけである。

「・・・悪いですか？私は父さんの匂いに包まれて眠りにつくのが一番いいんですよ。最近はまっつつつつつたくベッドに入れてもらえないから我慢してるんだ」

「うん。やめて。そのセリフは勘違いされるから、な？」

十蔵さんに相談したらなんか暖かい目で頑張りなさいって言われた。いわゆるファザコンらしく、かなりの重度だと十蔵さんが言ってた。

・・・第二の姐さんになりそうだな。貞操、無くなるんかな・・・。

親父との約束？で貞操を捧げる相手は婚約も考えろって言われてるから簡単にヤったりできませんよ俺。
なのに姐さんや姐さんや姐さんが昔、毎晩毎晩毎晩毎晩夜這いをしてくるからな・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・鬱だ」

「何がだ？父さん」

「なんでもない・・・なんでもないよ。うん」

中学三年生になった千冬はもう大人の女性の体つきになり、ナイス

バディーなスタイルになっている。

・・・つまり、千冬はそれを惜しみ無くぐいぐいと俺に押し付けてるわけだ。特に胸。

頼むからやめよう千冬。周りも怪訝そうな目で見てるから。

「発情したのなら私にぶつけると・・・ぎゃぴっ!？」

ガツン!パタン・・・。

「・・・・・・何見てんだゴリア・・・」

ササササッ!

「・・・はぁ・・・なんでこんなになったのだろうか・・・」

変態発言をする千冬にヘットバットをかますと千冬は気絶し、周り
にいる野次馬?の連中を睨んで黙らせた。

それからため息をついて千冬をおんぶして篠ノ之神社、篠ノ之家へ
と向かう。

千冬、今こそ剣道部は引退しているが中二で全国大会に出場、優勝
して日本一になった経歴がある。

新聞にも取り上げられ、類い稀なる剣の才に目を付けられて剣道部

が強い高校にスカウトされている。

だが千冬はスカウトを断り、家に近い高校を受験する事になっている。

本人曰く、父さんと一緒にいたいから。剣道部が強い高校に行くと寮に入るかもしれないから嫌だ。だそうだ。

「おーい来たぞ〜」

「ふはははは！ようこそいらっしやいました東さんの秘密基地へ！さあ入って入って！」

「・・・相変わらずでかい上に散らかってるな。掃除くらいはしたらどうだ？」

「めんどくさいからやだよ。はーくんが掃除してくれたら東さんは嬉しいな！」

「却下、だ。千冬や一夏の世話に忙しいんでな・・・で？何の用で俺達を呼び出した？」

篠ノ之家・・・正確には篠ノ之家の庭にあるプレハブの中にある本棚をずらして中に入ると束が高笑いしながら待っていた。

テンション高すぎてうぜえ・・・と思っただ俺は悪くないはず。

背負う千冬を下ろして（篠ノ之家に着く前に起きてた）束の後を追いかける。

ちなみに現在地はプレハブの地下、束曰く、秘密基地の通路を歩い

ている。

以前に物置小屋として使っていたプレハブを改造して秘密基地を造ったと聞いた時は啞然としたぞ。

「いやー、まさかちーちゃんだけでなくはーくんも来てくれるとは思わなかったよ」

「暇だからな。今日は仕事はないし」

「父さんいるところに我はあり、だ」

「もうお前黙れ千冬」

アホな発言をする千冬を呆れた目で見るとなぜか威張る千冬。拳骨を食らわせた。

踞る千冬から束に目を移すと束は視線に気付き、ニコニコ笑いながら新しい目印、機械仕掛けのウサ耳をピコピコ動かしていた。

実はこれ、俺がプレゼントしたものだ。

前に家で部屋を片付けていたら昔にマッド科学者サイエンスがプレゼントしてくれた超高性能多機能のカチューシャが出てきたのだ。

せっかくだからそれを弄くってドックタグにしようかと思ったら束に強奪され、ウサ耳に進化を遂げたのだ。

それから束はそのウサ耳を気に入り、防水加工、新機能追加などをして入浴、寝る時も外さなくなったのである。

ちなみにはーくんとは東が勝手に付けた俺のあだ名？である。
毎回毎回東に飯を作ってやっていたらなんか呼び始めたのである。

・・・これって餌付けか？

「さあさあご覧あれ！これが東さんの史上初、最高傑作となる“インフィニッ
トストラトスI
S”なのだー！」

「・・・おいおいマジかよ・・・」

「ついに完成したのか・・・」

「ん？千冬は知っていたのか？」

「うむ！ちーちゃんにはこの子（IS）の試作運転の手伝いをして
もらったことがあるから知っているのだよはーくん！」

「・・・あー、へー、つまりは勉強もせずにサボってこんな事をし
てたと・・・？千冬・・・今なら言い訳聞かせ？」

「・・・あー、いや、そのー、なんというか・・・」

東に案内されたのは秘密基地でも広い空間、東の研究室のような場
所。

そこには白い甲冑のような物体がスポットライトに当てられて輝い

ていた。

駄菓子菓子。

千冬が最近帰るのが遅い理由が束の言うインフュニットストラトスISだとしたら話は別。勉強サボって遊んでいたのは許さん。

・・・成績は優秀だからあまりキツイ事は言わないつもりだが。

「はーくん、ちーちゃんは束さんの手伝いをしてくれただけ。ちーちゃんは悪くない、悪いのは束さんだよ」

「ほほほう・・・ならば千冬の代わりに“オハナシ”してもいいってことだよな？」

「・・・・・・・・・・さーて束さんはこの子の最終調整をしないと」

「束、貴様裏切ったな!!」

「だってだって!はーくんの“オハナシ”は束さんでも耐えられないんだよ!?ならちーちゃんを生け贄に出すしかないじゃん!」

「貴様ああ~~~~・・・手伝ってやったのにそれはないだろう!庇うか何かをしる!!」

・・・え?二人はなんで慌ててるかって?

簡単な話が“オハナシ”の内容だな。

正座をさせてから膝に重しを乗せて延々と説教するだけだ。

まあ、最短で七時間だから完全にトラウマにはなるだろうよ。

「……………親父にやられたことあるし。その時は剣山の上に正座させられて重しを百キロ分乗せてニヤニヤ笑いながら親父はそれを見てた。」

「気で足を強化してなきゃ今頃あの世逝きか足が穴だらけになっていただろうよ。」

「やらされたのは一回だけ、俺が親父の身長を抜いた時だな……………」

「取り敢えずそのインフィニットストラトク？を説明しろよ」

「インフィニットストラトス。インフィニットストラトスだよはいくん！」

「……………“Infinite Stratos”ねえ……………」

「東によれば前に俺が貸した“宇宙とはなんたるか”シリーズ三作品を読んだ時にビビッときてISを造ることにしたらしい。」

「宇宙空間での活動を想定して作った（造った）マルチフォームスーツ。」

「東にスペックの説明を受けたがかなり半端ない。」

「宇宙空間での活動を可能にする皮膚装甲^{スキンバリアー}。」

「無重力の宇宙空間での移動に使われる推進機^{スラスター}。」

「広い宇宙空間を見渡すためのハイパーセンサー……………」

どれも画期的な発明であり、おそらくは世紀の発明となりうるISシロモノである。

だが。

これだけのスペックを見て不安要素がある。

スキンパリアー
皮膜装甲はあらゆる攻撃を防ぎ、推進機スラスターは現存する戦闘機を遙かに凌ぐ高速機動を可能にし、ハイパーセンサーは隠れる敵を探し出すことができる……。

間違いなくそいつら(……)はISを軍用兵器として使うだろうな……だとしたら発明した束は世界から狙われるだろう。

「……は？欠陥があるのか？」

「うん。ちーちゃんは問題なく使えたんだけどね、なぜか実験してみたら女性にしか反応しない(……)……)んだよ」

「……まいったな。こりゃ世界は変わる)……)ぞ」

男性や女性など性別が問われないならばいい方に世界が変わる可能性はあるが、女性にしか反応しないならば間違いなく男尊女卑の“ことわり理”は崩壊する。

ISはあらゆる兵器の頂点に立つ。ならば使える女性が優遇されるのは目に見えている。

新たな世界あらしそい・・・“女尊男卑”の世界が出来上がる。

「・・・東、絶対に世界には知らせるな。これはもう世界の新たな火種になる」

「・・・あの、はーくん？」

「まずは情報規制をしてからあそこでやらせるか？いや、まずは情報が漏れないように・・・ブツブツ」

「ごめん。東さん、もう世界に知らせちゃったんだ・・・」

瞬間、時間が凍る。

ダイブしていた思考から抜け出して東を見ると申し訳なさそうに俺を見ていた。

まずい・・・どちらにせよ東は狙われる可能性が・・・。

「NASAとか世界各国に見せたんだけど一蹴されちゃったよ」

「セーフ!!」

たははと笑う東を見て俺は両手を広げてセーフの形を取った。助かった・・・馬鹿ばっかで助かった。

そもそも東は宇宙の謎ほど興味が惹かれるものがなかったからISを作った。

ならばうちの会社で好きにISを作らせる方が最善の方法かもな。

「……いやだ。あの魔物の巣窟に帰らなきゃならんのか……」

「いいか？俺の実家が経営する会社でISを好きに作っていいから世界には余計に情報を流すなよ？頭のいいお前ならわかるはずだ」

「……うん。この子達は宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーツだけどあらゆる兵器の代用になるからね……覚悟はしてたけど」

「……というか父さん、実家が経営する会社ってなんだ？」

まあ、またそれは話すとして。

東はISの調整をしながらもうひとつの灰色の甲冑を見せてきた。個人的にはガンダムとかマクロスとかACとかがよかったな。

「さあさあはーくん、これに触ってみてよー！」

「……俺、ISよりもアーマードコアとかのがいいんだけど。コジマミサイルとか撃ちたいんだけど？」

「贅沢言わない。東さんでもまだコジマ粒子作るのが難しいんだか

らね！GN粒子とかミノフスキー粒子とかもだよ？ミノフスキー粒子は時間をかければまだわからないけどね」

「えー・・・ならマクロスは？バルキリーとかは？ミサイル撃ちたいんだけど？」

「・・・父さん、ミサイル好きだな・・・」

とくにVF-25のスーパーパックでミサイル無双したい。宇宙だと青い光が出て綺麗じゃん。

東曰く、バルキリーは作れるが変形機能が難しいんだと。変形機能がないバルキリーはバルキリーではないと断言できるからね！だそ
うだ。

他にもガンダムとかは設計図が無いらしいから無理。とか言われた。

・・・お前、俺の部屋に“モビルスーツ大集巻裏・設計図”があるのに気付かなかったのか？他にもアーマードコアの攻略本と一緒にあっただろ。

「なぬ！東さん、気付かなかったよ！」

「作るならまずはザクかグフをお願いします。最終的にはガデラーザがいい」

「任せたまえはーくん！東さんの腕を信じるがよい！ー！」

「なんかワクワクしてきた！東、触ればいいのか？」

「女性にしか動かせないけどはーくんのバグっぷりなら使えるかもしれないね!」

「うむ。父さんの理不尽のスキルならISが使えるかもしれないな」

「普段なら許さないが特別に許す。取り敢えず触るぞ」

ピタッと白い甲冑のよこにある灰色の甲冑、試作型のISに触れると何かが頭に流れてきた。

これは・・・来たのか!?

灰色の甲冑と俺を光が包むと研究室が一瞬だけ真っ白に染まる。そして・・・。

「「「・・・え?」」」

一同、啞然。

俺、千冬、束は目を見開いてそれを見る。

普段はそんな顔をしないはずなのにそれを見ると絶対にアホみたいな顔をするだろう。

だって・・・

灰色の甲冑、ISが土下座してるもん。

・・・うん。なんで？

「・・・あー、たぶんはーくんの生体情報がISの処理領域を大きくオーバーしたんだろっね」

「・・・つまりなんだ？父さんが強すぎるからISが拒絶したという事か？」

「だろっね・・・ププツ、はーくんはISにもバグ扱いされるんだね！」

「・・・俺は徐に研究室にあったIS用であろうハンマーを手にとった。

「え？ちよつとはーくん？なんでハンマーを持ってるのかな？」

「ふっ、ふふふふふ・・・ぶっ壊す」

「うあああああっ！やめて！やめてよはーくん！束さんのISを壊さないでー！！」

「ええい！離せ！H A N A S E！！」

「ちーちゃんもはーくんを止めてー！！」

「・・・・・・・・父さん・・・・・・・・」

ハンマーを掲げてISの前に立つ俺、俺の腰に涙目ですがみつく束、

頭を押さえながら俺達を見る千冬とかなりカオスになっていた。

取り敢えず、これ、ぶっ壊そう。
塵すら残さん。

三十分後

「ああ・・・よかった、よかったよお・・・」

「ちっ」

「ほら束、無事だったんだからさっさと説明の続きをしる。父さんがまた暴れる前に」

結局、ISは破壊しなかった。

カンベンシテクダサイ。

つてIS側の通信が入った時は気を込めたゴルディンハンマーで研究室ごと破壊しようとしたのは余談である。というわけで俺は絶賛不機嫌中。

「・・・でね。もう少ししたらISは宇宙空間での活動が完全にできようになるんだよ!」

「・・・ふーん。前から木星には行ってみたかったが少し聞いていいか?」

「なんでも聞きたまえ!」

さっきからずっと気になってたんだが・・・。

このISのスペックと材料とか見るとど〜〜しても気になるんだが。

「このヒロイカネ？みたいな鉱石とかISのコアのパーツとかどうやって調達したんだ？」

「注文したんだよ！」

「へー・・・なら・・・」

「その金、どっから出したんだ？篠ノ之家は銀行に金を預けてないから使うのは無理だろ？」

すると束は……。

「な、なな、なんのことかな？束さん、よく聞こえなかったな！」

ものっそい冷や汗ダラダラで口笛吹きながら明後日の方向を向いていた。

……確定だな。

「……束……貴様ハッキングでやりやがったな？」

「ビクッ！」

「ああ……そうだそうだ……最近、妙に俺の銀行口座から金が無くなってるんだが……」

「・・・ダラダラ」

「最初は詐欺辺りで銀行側に相談したら戻ったんだが・・・言え。いつたいいくら使った（・・・）？」

「・・・すみませんでしたあ！！！」

ちょうど千冬の帰りが遅くなった時期から銀行にある金が少しだけ減って戻った事がある。

最初はハッキングでやられたのかと思っただが違和感があったから気にも止めなかったのだが・・・。

「こんの馬鹿野郎があああああああつ！！！」

「にゃああああああああああつ！！はーくん、頭が割れる！束さんの天才の頭が割れちゃうよ～～！！！」

束に問い詰めたところ・・・IS開発費用、百億円也。

つまり、俺の銀行口座全額。銀行の数字はただの数字になり果てたのである・・・。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

親父の遺産である金が全部なくなった。まる。

第十二話、親父（後書き）

IS土下座事件。

・ ・ ・ W W W W W W W

実はこれを書きたくてこの二次作を始めたりしたり W W W

前にガンネクのアツガイ見てたらふと思いついた。
体操座りするなら ・ ・ ・ みたいな感じで浮かんだ。

そして織斑家の全財産、消失。妙にバカ高い親父の遺産はこのため
の布石でした。

なんかIS作る模様は書かれても材料を調達する模様は書かれてな
かったからね。

世界各国もかなり金をかけてやってたから莫大な金があるんじゃない
？みたいと思った。

次回はIS歴史初の事件です。というかIS土下座事件が初の気が
W W W

第十三話、親父（前書き）

今回から四季組帰還編。

かなりネタだらけの場面になりますがよく・・・。

たぶん四話くらいで終わるんじゃない？

第十三話、親父

本日は・・・微妙。

天気はすげー晴れだが俺の心情は曇り。

IS土下座事件（黒歴史）から二週間、俺はあらゆる場所に走ったりする。

「・・・ってわけなんすよ。だから一時的にやめさせてくれないっすか？」

「それまた・・・君も苦労しますね、春樹君」

「ははは・・・しかも織斑家の全財産とはいかないまでも、俺の銀行口座、ゼロになりましたし・・・」

「うん、わかったよ。もし君の言うISが世に出たら私からも何とかしよう。春樹君はどうするんだい？」

「実家に戻ろうと思います。もう・・・来るべき時が来たと腹をくくるしかありませんよ」

「・・・日本最大の任侠、四季組か・・・“霸王”と呼ばれた前組長の息子である君が戻れば波乱が起きるかもしれないね」

「覚悟しています。俺は千冬に一夏、東、篝ちゃん達を守るならばなんでもしますよ」

「うんうん。じゃあ君が四季組のトップに立つならば私と同盟を結ぼうか。私の会社は少なくともイギリス、フランスにも置いてあるからね」

「はい。その時はお願いします十蔵さん」

「怪我や病気はないようにね。今まで楽しかったよ春樹君」

「俺もです。今までありがとうございました」

そう締めくくると俺は十蔵さんが経営する企業の本社の社長室から退室する。

現在地は十蔵さんの会社の社長室。東がISを生み出してからこうして働いていた場所や世話になった場所を回っている。

だがISを話したのは十蔵さんだけ。他はかなりまずいので話していない。

銀行口座はギリギリで二百十七万あったため、生活はできるが東の身の安全のために実家に戻ろうと決意した。

某都道府県某所、四季組管轄の土地

「……………うわぁ……………」

「で、でかい……………」

「はーくん、ここがはーくんの実家なの？」

「ああ。柳韻、悪いな。車を出してもらってよ。前に使ってたのは敵対するヤクザに壊されたからな」

「取り敢えず束と箒を頼むぞ。俺は今から神社に戻って父上と話すから」

「任せろ」

そう言つと柳韻は車を走らせて去っていった。

というわけで十蔵さんと話してから三日、準備をしてから千冬と一夏、篠ノ之家から束と箒ちゃんがついてきて実家、四季組の総本山

にやってきた。

・・・昔とは変わらんがさらにカオスになってる気がするぞ・・・。

昔は確か東京ドーム二個並みの広さを持つ武家屋敷を中心に周りには山があり、山を越えた先には動物園擬きと四季組が経営する会社があつたりしたんだが・・・。

「・・・お城？」

「あいつら・・・またこりもせずに大阪城みたいなのを作りやがったな・・・!」

城が建つてた。

202

四季組管轄の土地の入り口に入るとまずは大阪城並みの城が建ち、千冬達は啞然として見ていた。束ははしゃいでいたが。

しばらく歩くこと二十分。懐かしの実家の武家屋敷の門の前に来た。懐かしい・・・四季組の看板もあの頃のままだ・・・。

「ここが父さんの実家・・・」

「お父さん、なんでこんなにでかいの？」

「俺のじいさん、初代四季組組長が昔からあつた武家屋敷を改装して建て直したらしいんだよ。だからどっかの名のある武家の住んで

た屋敷かもしれないぞ」

「すごい・・・私の家より大きい・・・」

「まあ、日本最大の任侠の総本山だからな。それより入ろうか」

ビックリする篤ちゃんに言いながらその門に手をかけて押す。
ギィィ・・・と鳴りながら門が開くと・・・。

『お帰りなさい春樹さん!!』

「うわぁ!!?」

「きゃっ!!?」

「おお〜!ちーちゃんちーちゃん、時代劇みたいだよ!」

「これはまた・・・」

「おう帰ったぜ。組長はいるか?」

門を開けると見えたのは人、人、人、人。

四季組の舎弟達がズラツと並んで出迎えてくれたのである。

合わせて声をかけてきたもんだから一夏と篝ちゃんはかなりビックリしていた。

・・・というか出迎えはいらないう言ってるのにな・・・。

「奥でお待ちです春樹さん。いやー、久しぶりですね！」

「親父が死んでからだから・・・十三年か。長かったな」

親父が老衰で亡くなる前に少しだけだが、親父と小さな一軒家で暮らした時間も含めたら十三年になる。

最後の時間・・・親父は嬉しそうに、楽しそうに過ごしていたのは今でもはっきりと覚えている。

・・・俺は親父が亡くなると辛くなって引きこもったから実家からは顔も出していなかった。

だからか、四季組総本山の組員達は本当に懐かしそうに笑っていた。

「・・・もういいんですかい春樹さん。まだ親父の死から立ち直れてないんじゃないか・・・」

「吹っ切れたよ。いつまでもよくよくしてたら親父に殴られるし、あいつらにも情けない顔を見せるからな」

「・・・一夏、でしたか？本当に親父に似てますね」

「ああ。だろ？瓜二つだ」

ふと武家屋敷の中を歩きながら後ろを見てみると若い組員達が一夏や千冬と話していたりしていた。

一夏は少し怯えていたが千冬に庇われながら何かを話しながら広い廊下を歩いていた。

・・・まああの顔を見たら怯えるのは仕方ないだろうな。

後でシバく。一夏を怖がらせた罰だ。

「おや。春樹さん、“緋桜”も持ってきたんですかい？」

「親父からもらったプレゼントはこれだけだから。後は親父とおふくろの形見の結婚指輪しかないし」

「そのネックレスですかい？確かに親父はあんまり形のあるプレゼントはしなかったですよ？“緋桜”とそれ、シルバーのペンダントくらいですよ？」

先代四季組組長の親父は四季組組員達に“親父”と呼ばれていた。

組長、と呼ぶものはいたがほとんど親父と呼んでいたな。

四季組組員のほとんどは世から外れたもの、ゴロツキや不良、親に捨てられたものである。

親父はそんな奴等を助けて四季組の孤児院や総本山に迎え入れて育てたりしていたのである。

そのため、組員達は親父は第二の父親、尊敬できる偉大な父親と見ている。

だからか、俺も昔はよく可愛がってくれた。

親父からの恩を親父と若（春樹さん）に返したいという一心で。

「さ、着きましたよ。ここにお待ちです」

「……親父の部屋、か……」

案内された場所は生前、親父が使っていた部屋だった。

そこに立つと自然と首に掛けられた親父とおふくろの形見である結婚指輪を触る。

二つあり、ただ単にチェーンで通しているだけである。

「（……親父……おふくろ……あんたらの息子は……いまここに帰ってきたぜ）失礼す……」

「は~~~~る~~~~く~~~~う~~~~ん~~~~!」

「ぴぎゃあああああああああああああつ!」

ススス……と開けると目の前が黒に染まり、聞き覚えのある声がすると叫んだ。

つい、殴りかかった。それも本気で。

だが、受け流されるように床の畳に叩きつけられる。
そして倒れた俺の上に誰かが乗るとぐいっとな顔を掴まれる。

「や 久しぶりだね春君？」

「あ、あ……姐さんんんんんんんんんんんんんんんんんん！？」

「やだなあ……昔みたいにお姉ちゃんとかなじみさんとかママとかお前とか呼んでくれてもいいんだよ？」

「後半の二つは嘘だろ！お姉ちゃんは言った気はするがママとか言
った覚えはないわ！！！」

「それじゃあ、再会のちゅーを……」

「イイイイヤアアアアアアアア！喰われるうううううううう
うっ！！！」

がっちりと顔を固定されると、姐さん……安心院なじみは少しだ
け顔を赤くしてゆっくりと俺の唇を狙って……。

ガッキイイイン！！

「・・・おやおや。いきなり斬りかかるとは物騒だね・・・」

「父さんから離れる。父さんにキスをしていいのは私だけだ」

「後は東さんもだね・・・お前、はーくんに手を出すから嫌い。死ねば?」

「・・・あれま。春君、この二人は君の子供かい?」

「千冬は俺の子で東は柳韻の娘だ」

「ほほお・・・篠ノ之家の・・・あのヘタレ君からこんな子が生まれるとはね」

「というか姐さん姐さん、重いからどいて」

「女性に重いは言うてはいけないぞ春君」

ふふふと笑いながら姐さんは千冬の日本刀を扇子で防ぎながら俺の上からどいた。

・・・この人の化け物チートっぷりは健在か・・・。

「あー、紹介するな。この人は安心院なじみさん。昔に世話になった母親代わりみたいな人だ」

「よろしく〜 親しみを込めてなじみさんと呼びなさい」

「・・・母親代わり?」

「前にも話したがおふくろが死んでから塞ぎこんでた俺の面倒を見てくれた人なんだよ千冬。それに・・・覚えてるか？ロシアで湖の上を走る女性のニユース」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ！」

「あー、あの時は麻薬密売グループを叩き潰した時のだね。懐かしいなあ・・・・・・・・」

「いやいや姐さん。あんま見られないようにって親父に言われてたろ？」

うんうんと頭を振る姐さんを呆れた目で見る。

千冬は何かを思い出したかのようにポンと手を片方の手に軽く当てる。

東はジトーツと姐さんを見てるし、一夏と篝ちゃんは・・・おい。その虎の巻物をむやみやたらに触らないで。親父の気に入ってたやつだから。

取り敢えず軽く手を叩いて場を納めると改めて姐さんと向き合う。

「本当に久しぶりだね春君。お姉さんは君が心配でたまらなかったよ」

「それは・・・すみません。親父が死んでからはどうも・・・ね」

「いいよいいよ。君は冬君を尊敬して、愛していたから当たり前だ

よその感情は。それで？春君はなぜまたここ（四季組）に戻ったんだい？」

「・・・実はそれについて話したい事があるですよなじみさん」

「・・・聞こう。ボクが力になるならいくらでも貸そう。大事な弟分の頼みだからね。あ、旦那様がいい？」

「・・・それで束なんですけど・・・」

姐さんの言葉を華麗にスルーするとウサ耳をつけた束を引っ張って隣に座らせるとISについて話す。

最初は姐さんもニコニコしていたが次第に真剣な表情になり、何かを考えながら頷いていた。

千冬と束は姐さんのそんな変化に驚きながらも俺と姐さんの会話を横で聞いていた。

「・・・それはまずいね・・・それだけの性能があれば世界の兵器は変わり、使える女性が優遇される世界になる」

「はい。ですからISは秘匿しようかと思えます。さらにカモフラージュに束を四季組が経営する会社の社員として保護し、あくまでもバレたら会社の研究部門が開発したという風にしようかと」

「それもいいけどこの子の頭脳は世界に狙われるよ。もしかしたらアメリカ辺りが束ちゃんを寄越せと言ってきそうだし、それは最善とは言えないな」

「・・・むう・・・やはり俺が四季組組長として戻っても意味はありませんか？」

頭を捻りながら姐さんを見ると真剣な表情から一転、笑顔になる。

「むふふ。簡単な話だよ春君・・・ISが現存する兵器の中で最強だと思わないようにすればいいんだよ」

「・・・つまりあれか。姐さん、あんたは俺に暴れると？」

「うんうん。冬君の血を継ぐ春君ならISだろうと隕石だろうと破壊できるでしょ？かつて、君のお父さんはアメリカが保有する軍艦を行動不能にした上に戦闘機を全て生身で叩き落としたんだから」

「・・・」

千冬、束、絶句。

まあ、そうなるわな。生身で軍艦を落としたりするのは現実味がな
いからな。

漫画の世界だと魔法とかで潰すが親父はほとんど自分が持つ“気”
でたたか・・・ある意味あれ、魔法だな。ビームとか普通に出てた
し。

「じゃあ春君。まずはうちの研究部門に行こうか・・・どうしたんだい？そんな嫌そうな顔をして？」

「・・・わかって言ってるでしょ」

姐さんはニタニタと笑いながら扇子を開くと口を隠した。

・・・あんた俺が苦勞したり苦しむ姿を見るの、好きだろ・・・。

「むしろボクを虐めたらどうだい？新しい自分が見つかるよ」

「心を読まないでくれます？プライバシーなんか関係ねえ！みたいな顔もやめて」

「ふふふ・・・」

「変わらないですね。貴女も・・・その性格の悪さが」

「よせよ。照れるじゃないか春君」

褒めてねえ！と叫びたかったが、これ以上付き合つとさらに收拾がつかなくなるからやめておこつ。

痛くなる頭を押さえながら親父の部屋から出ると姐さんが千冬、東、箒ちゃんを留めて俺と一夏だけをあの魔窟に行くことになった。

「え？ちよ、姐さん！？俺一人であそこに行かなきゃなんないの！？」

「うん。皆、君を待ってるからね。特に女性陣は楽しみにしてるぜ」

「？」

「？父さん、なんでそんなに嫌そうな顔をするんだ？」

「ほらほら行きなさい。この子達はボクが見ておくから。話したいこともあるからね」

「姐さああああああんっ！！！」

ドゲシッ、シュー、ボタン！！

むっふっふっふ……さてさて。春君の事を聞くと同時に少し春君の事を話そう。

「……さて。少し話そうか」

「えっと……なじみさんでいいんですか？」

「いいぜ千冬ちゃん。春君はもう呼んでくれないけどね……」

はぁ……春君が中学生になるとあのボケが春君にいらん知識を与えたせいで姐さんだなんて……。

冬君の部屋に千冬ちゃん、東ちゃん、箒ちゃんと向き合つと扇子で口を隠しながら静かに笑う。

「……まずは千冬ちゃん、君が小学生の時に春君の養子になったんだよね？」

「……はい」

「春君から聞いたよ。秋ちゃんの子供を引き取って可愛がってるぜ！みたいにないつも聞いていたよ」

延々と一夏ちゃんや千冬ちゃんの自慢話をしていたしね。

あんなに楽しそうに話すのは冬君が死ぬ前以来かな？明るくなったのはよくわかったよ。

・・・だからね。ボクは君達二人の姉弟には感謝してるんだ。

「え？ちーちゃんってはいくんの実の子じゃないの？」

「・・・まだ話してなかったか？私がまだ小学生の頃に捨てられて父さんの家に行ったらすぐに受け入れてくれたよ。一夏はまだこの事は知らない、知ってはいけないんだ・・・」

それはボクも春君から聞いたな。あんな身も心も幼い子に実の親に捨てられた事を知られてしまうと下手したら人間不信になるかもだからね。

だからか。春君は実家に来るのを拒み、四季組との通信手段を断っていたのだ。

一夏ちゃんがまだ赤ん坊の頃はまだ意識はなかったから大丈夫だが幼稚園に入る頃にはまぶくなっていた。

幸い、春君の美貌に夢中で母親の事は触れられなかったが、そろそろ小学生になるといじめもあるかもしれないね・・・。

「ところで君達、春君は好きかい？あ、ライクではなくラブだぜ？」

「もちろん。私は父さんを異性として愛している」

「東さんも！・・・貴女にははいくんは渡さない・・・」

取り敢えず束ちゃんにはこれを渡しておこう。

死にやがれこんのマツドがああああああつ……！

ドツゴオオオオン！！

ウボオアアアアアアアアア……！

ギャー！春樹さんがご乱心だー！止める止めるー……！

父さんやめてー……！

「「「………いっくん「夏？」「「「

「またやってるね。このやりとりも懐かしいもんだ」

春君が高校生になるとこのやりとりは日常茶飯事だったからね。
たぶんあの子がまた春君にちょっかいを出したんだろう。

「……あの、なじみさん……」

「あ。あれはいつものことだから気にしないでいいよ。昔は冬君も
加わってかなりカオスだったから」

「冬君ってなに？」

「春君の父親、つまりは千冬ちゃんと一夏ちゃんの祖父だぜ。言っ
ておくけど春君よりも強いよ。冬君が死ぬまで全盛期の春君をボコ

ボコにしてたからね」

あー、なんか聞いたことがあるーみたいな顔をする千冬ちゃんあまり飲み込めてない束ちゃんと篝ちゃん。

いまだに研究部門がある研究所から爆撃音や怒鳴り声が響く中、ボクは千冬ちゃん、束ちゃん、篝ちゃんと話すことにした。

うーん・・・束ちゃん、どうしようかな・・・春君が返り咲くのは嬉しいけどあんまり苦労はしてほしくないんだけどな・・・。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

次回に続くよ。まる。

第十三話、親父（後書き）

束、買収。

そついや、年の差結婚してんじゃねーよ！って書いてくれやがった（送った？）方がいますが最近では芸能界でも年の差結婚、ありまっせ？

はつきりしておきますが、修正とかしないのは時間がなくなってきたからです。

なのにメッセージでわざわざ教えてやったのになんでやらねーんだバカヤロー！って送る奴もいますがやめてください。

更新停滞するから。

最近はやる気が出ない。メッセージで中傷コメントばっか送られるし。

今回は春樹視点で爆撃音の正体と叫んだ奴等を書きます。

あー、鬱だ。

第十四話、親父（前書き）

いやー、みなさんの感想に勇気付けられて立ち直りました。

感想を返すので待ってください。

あ、ちなみにリクエストがあつて・・・

“春樹が原作のIS世界に入るとどうなるの？”

・・・知りません。間違いなくカオスになりますWWW

今回はかなりオリキャラ出ます。嫌な方はリターンリターン！

第十四話、親父

あー、嫌だ。あんなところには行きたくないよ親父。

「・・・はあ~~~~~」

「父さんどうしたの？疲れたの？」

「一夏あ~~~~俺を癒してくれ~~~~」

「わきゃ~~~~！」

憂鬱な気分を少しでも晴らすために一夏に抱きついてグリグリと頬擦りをした。

あー、たぶん姐さんの言う事を信じればまだあのマッド変態痴女チーフがいるんだよな。

会いたくない。めっさ会いたくない。

「父さん、今からどこに行くの？」

「四季組管轄研究施設“春夏秋冬”しゆなかくしゆんとつだ。もしかしたらガンダムとかありそうだな、マゼラトップとかタンクとか」

「え~~~~！俺はズゴックとかがいい~~~~！」

「グフだろ。もしくはシャア専用ザク？だ。それ以外は認めん」

「ダブルオー！ダブルオークアンタ！」

「バカを言え。ダブルオーならスサノオかソルブレイヴ隊かガデラ
ーザだろ」

「むしろ俺はサバーニヤですね。乱れ撃つぜ！みたいに言いたいっ
す」

「む！ならストフリ！ストフリはどうだ！」

「種ならフリーダム原型でおk。グファイグナイトッドも捨てがたい」

「何を言うんですか春樹さん！種ならシグーでしょ！地球連合なら
レイダー、カラミティ、フォビドゥンですよ！」

「・・・ほほう・・・貴様は死にたいようだな・・・」

「・・・勝ち目はない。ですが春樹さん！これだけは俺も譲れませ
ん！たとえ・・・たとえ死んでばらぶしっ！？」

一発KO。

一夏を肩車したまま黄金の右ストレートで気絶した。

ふん。ガンダムならザクが最強だろ。全シリーズでもザクの原型が
多いんだぜ？

今ぶん殴ったのはここ（四季組総本山屋敷）に来てから案内役をしていた強面のおにいさんである（妻子持ち。四十二歳）。

「さすがにMSモビルスーツはないと思うがVFバルキリーファイター擬きはありそうだな・・・戦闘機を改造してそうだ」

「え？本当？」

「マジマジ。あそこ、世界最高峰の技術を持つてるし」

四季組管轄研究施設“春夏秋冬”しゅんかきゅうとう、それは親父が生前にザクを作りたいとアホな事を言い出したのがきっかけでできたものである。さすがにいきなりザクは作れないため、まず親父は戦車を完膚なきまで破壊してから解体させたりしたりと最初は何をしてるかわからない団体だった。

が。

先程話したマッド変態痴女チーフが“春夏秋冬”しゅんかきゅうとうに入ったことにより研究施設は急加速。

表向きはWTモビルスーツバルキリーファイターって車の会社みたいなもんだが裏じゃあ親父の欲望とも言えるMSやVFを作るために日々暴走している。

何がしたいんだてめーら。と当時は思ったが親父と最後に過ごした時の影響か、ロボットオタクになってしまい、なんか見たくなくなった。

親父と暮らす前には時速250？/hを叩き出す化け物戦車を造り出してたしな。

なんで戦車、そんなに出るわけ？とか思ったけど下手に探ると取り

返しのつかないことになりそうだから諦めた。

・・・M u v L u vの戦術機造ってそーだな・・・。

「・・・でかい・・・父さん、ここが？」

「“春夏秋冬”^{しゅんかじゆんとつ}、別名・・・“変態施設”・・・うあああ・・・嫌だ！入りたくない！」

「諦めましょうや春樹さん。ドタキャンしたら姉御にやられますぜ？」 おにいさん復活。

「リアルにあるからやめろ！それは死と言つ名のフラグだ！」

復活したおにいさん、本名は安室怜^{あむろ れい}。

ちなみにだが、別にニュータイプさんに似てる訳じゃないよ？親が付けたらこうなっただって言ってた。

他にも四季組には斜阿安須南部流^{しやあ あすなぶのりゅう}とか乱場羅瑠^{らんばら ろ}とかいるよ？

全員、親父がつけた名前だけど。

個人的にはジーンとか頑張っつけてもらいたかった。

小さい頃にいじめられたらしいが親父が（いじめた側を）ぶん殴っ

たりしたようだ。

お前のせいだろクソ親父が。

「で？暗証番号は？」

「知らないっす」

「・・・お前、なんで来たんだ？」

「姉御から見張ってるって言われただけなんで。自分にそんな事言われても困るっす」

若干どや顔がムカついたからまたもや黄金の右ストレートで沈めた。

暗証番号知らないなら・・・またあれか。適当に入れたらできるとかってパターンか？

ピッピッピッ、カチャッ、ウイイーン

「・・・マジか。セキュリティ問題ありすぎだろ」

「むしろ春樹さんが規格外すぎるんすよ」 再びおにいさん復活。

「おー！なんかスパイ映画みたい！」

俺、呆れる。

安室怜、けろっとした顔で入ろうとする。

一夏、自動ドアに大はしゃぎ。

・・・よし。十三年ぶりだがあの変態痴女も治ってるだろ。
いきなり飛びついて襲おうとはしない・・・はず・・・なのに不安
になってきた。

「チーフ？まったく変わってませんよ。むしろ悪化して発情期に突
入してます」

「・・・アムロ、生け贄になれ」

「無理です。俺、嫁さんと子供がいるんで」

ちっ、冷たい奴め。昔は何かあれば助けしてくれたのにな。

屋敷から少し離れたシヨツカーとか悪の科学者がいそうな研究施設
の中を歩きながら目的地、マッド変態痴女チーフの部屋に向かう。
まあ、所長室なんだけどね。

一夏は研究施設を見て目をキラキラさせながら走っていたが二秒で
捕獲、手を繋いで歩く。

トラップがある可能性があるからね。たぶんR指定されそうなトラ
ップが。

「ところでアムロ、組長はどうしたんだ？代理だが」

「ああ、姉御が追い出したんすよ。あの組長、親父の遺言を無視して四季組を牛耳ろうとしましたからね、春樹さんに連絡したのは秋枝さんの子である二人を手に入れようとしたからでしょう。たぶん、なんか才能があるんでしようし」

「・・・千冬はわかったが一夏はまだわからん。たぶん禁断の“H”と“R”の片鱗は見えるが・・・」

「・・・バ、バカな・・・！すぐに恒例会を開かないと・・・！春樹さん、少し外しますね！」

「あ、おいアムロ！」

なんなんだあいつ？姐さんが禁断の“H”と“R”って言ったから伝えただけなんだがな？

というかなんだこれ？親父とか幹部達が皆知ってるようだが俺は知らされてないんだが？

俺も“H”と“R”があるみたいだが・・・。
才能チートの略称みたいなんだがよくわからん。

聞いたのは“M（無双体質）”“K（王の素質）”くらいだな。

「・・・ついに来たか。シヨツカーの首領がいる部屋・・・」

「わあ！なんかフリーダム復活のあれみたい！ほらほら鍵穴もあるし！鍵はどこ！？」

「お前黙れ」

『おお！珍しいお客さんだな！』

「……その声……スーパー死神博士か！？」

『……いやいや春樹。私はメスだぞ？むしろシヨツカーなら蜂女とかだろ』

「帰っていい？」

『ところがギツチョン！捕獲アーム射出！』

「だが甘い！！！」

でかい扉、研究施設“春夏しゅんか秋冬”しゅんとつ最大の部屋の前である。

一夏の言うように種死のフリーダム復活みたいなイメージがある。

はしゃぐ一夏を宥めると扉から声が響き、扉の両側から赤いロボットのアームが飛び出してきた。

それを壊そうと構えるとアームが俺ではなく、一夏を掴む。

「……え？うわあああああつ！？」

「い、一夏あああああああつ!?!」

『はっはっはっは〜! シヨタっ子一名ご案内〜!』

ギューイーンと引つ張られる一夏を追い掛けて扉の中に飛び込んだ。

しまった・・・! あのマッド変態痴女チーフはシヨタの属性もあつたのを忘れてた!

引つ張られる一夏をさらに追い掛けて奥に進むとこの施設の格納庫に向かつてる事に気が付いた。

「・・・?」

「父さん助けてー(棒読み)」

「待ってる一夏あああああああつ!?!」

ちなみに一夏は完全に棒読みであったが、親バカである春樹にはまったく気付かなかつた。

廊下を爆走、爆走。

「ウイイイハア!?!」

『ふははは! 引つ掛かつたな春樹!』

してねーな」

赤いロボットアームを叩き壊すと一夏とその部屋の扉を開ける。中には白衣を着た不健康そうな美女がモニターを見ながら爆笑し、むせていた。

・・・うーん。ずぼらな部分もまた変化なし・・・。
周りを見てみるとビーカーやら書類やらなんやらと散らかりまくっていた。

定型的な片付けられない女だな。うん。

「おいなにしてんだ」

「ゲホゴホ！・・・おお、春樹！相変わらずイケメンだな！どうだ？私と一発やらないか？」

「死ね」

「チーフ！小さい子もいるんですからアダルトな発言はやめてくださいよ！」

「気にするな。気にしてたら禿げるぞ坊や」

そう言うと美女はモニターを消して煙草を口にくわえる。だが俺はそれを止めるために口にくわえられた煙草を取る。

「やめる。一夏の健康に悪い」

「おや？春樹、煙草をやめたのか？」

「親父と暮らす前からやめてるぜ？それより見ない顔がいるな？」

「ああ、そいつらは冬樹が拾ってきた奴等だ。もしかしたらお前が知る奴もいるんじゃないか？」

「……………いた。ちよつとこつち来いや」

言われて周りをぐるつと見渡すと見慣れた、懐かしい顔がこそこそと逃げようとしていた。

問答無用で首を掴んで目の前に正座させた。

「……………や、やあ？久しぶりだな春樹？」

「天誅うううううううつ！！」

ズバシイイン！！

「へぶつ！？」

「てんめえ……………よくも俺の仕事を増やしてくれたな？」

「な、なんのことだ？」

「しらばつくれるか・・・篠ノ之束。この名前を言えばわかんדר」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（冷や汗ダラダラ）」

「まず第一。束が俺を嫌つてる時に不良やらヤクザを仕向けてきた
が中にみよ〜な奴等がいたんだよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（顔面蒼白）」

「四季組に対抗する組織の名前がちらほら出たり、潰した中には四
季組に少なからず関係がある組織だったり・・・さあ、何か、言う
ことは？」

「すみませんでしたあああああああつ！！」

「最初から謝れヴォケが」

以前に束に刺客を向けられた時に妙な違和感があったのに気になり、
束本人から聞いたら手紙か何かでこういう奴等がいいよ。みたいな
事を言われてたらしい。

パソコンのメールならば束がハッキングして見つけられたが紙の手
紙相手ではそれは無意味。

気になって俺も調べてみたらあら不思議。四季組に因縁があるもの
ばかり並んでいるではないか。

こんな事をする奴はあいつしかいない・・・つまりは目の前に正座
させた馬鹿である。

「後はあれだ。東のレアメタル輸入の際に手を回したろ」

「……あ、はは……全部バレてるか」

「ファントム“幻影”……お前のコードだろ？東のメールにそれが残されてるのを見たからな」

「……はあ……最後の最後に油断したな……お前の勘も衰え知らずだな」

正座をしながらため息をつくヴオケをペシペシと叩く。

こいつは親父が一番気に入っていた元孤児である。昔に扮装地帯で一人にいるところを親父が助けて養子として育てられたのだ。

年も近いため、俺とこいつ……大和は兄弟当然に育った。

名前は織斑大和。おりむら やまと

詳しい話を聞いた時、大和は両親が医者のため日本から来たらしい。本名は高山大和たかやま やまとと言い、高山は日本でも有名な医者だったらしい。

「にしてもお前が姿を見せなかったのに珍しいな」

「……まあ、あんたが帰ってくるのを聞いてな……久しぶりに会いたかったんだよ」

「キモい」

「にはは こうして私ら三人が揃うのは冬樹が死んでからだな？」

「・・・あんたも組長を呼び捨てにするなんて命知らずだよな」

このずぼらな格好をした白衣の美女の名前は織斑響。おりむらひびき

こいつは生まれながらにして天才とも言える頭脳を持っていたため、両親が殺され、誘拐されていた。

それを助けたのが親父である。こうして振り返ってみると親父って世界中を飛び回ってたんだな・・・。

大和は日本人離れた赤い髪のショートカット、目の色も赤である。日本人の両親を持つ。

扮装地帯にて争いに巻き込まれた時に大量の血を浴びて変色したらしいがよくわからん。

響は茶髪のロングストレートで目は青っぽい色であり、日本とフランスのハーフらしい。

ある意味束と境遇が似ており、天災と呼ばれる頭脳を持つ。

春樹、オレ大和、響・・・当時に“四季組デルタ”とか呼ばれてた。

戦闘面で最強の俺、情報収集のエキスパートの大和、世紀の頭脳を持つ響。

「んで、響。お前はまたなんか作ったのか？」

「おうよ。今度はザク？ができたぜ」

「・・・あのね。間違いなく戦争の火種になるからやめろって言わなかったっけ？」

「にしちゃあ、春樹もノリノリだったよな？」

「うぐっ」

それを言われたらおしまいだ。

俺も実際に楽しみだったから強くは言えない。

「あー、で？私と同じような子がいるって聞いたんだが？」

「姐さんという。たぶんお前と同じくらい頭がいいんじゃないのか？」

カクカクシカジカアイエスコナノー。

「・・・ほほお・・・それは面白い」

「あ、バカ春樹！んなことを話したら響が暴走して・・・」

「ふは、ふはははははは！インフィニットストラトスか！まさか私が考えたものより優秀なものを作るとは！」

「いいんじゃない？どうせバレるし・・・一夏、見てみる。伸びるぞ

これ」

「おおー！」

「話を聞け春樹イイイイイっ！」

そんな冗談は置いて・・・響に束が作ったインフィニットストラトスISを話すと過剰に反応した。

目をキラキラさせて涎をたらしながら手をワキワキさせる姿は誰が見ても変態にしか見えないだろう。

というか大和もそうだがなぜ親父に関わった奴等はなんでみんな変態化してんだ？

「「春樹、お前が一番おかしいから」」

「んだとゴラア！変態痴女にストッキングを被る馬鹿には言われたくないわヴォケが！！」

「おらあっ！ストッキングの何が悪いんじゃ！？」

「ぎゃー！また暴れだしたぞー！」

「お、落ち着いて〜〜！」

大和と殴り合うと古株の研究者達はなんとか止めようとし、新入りは事態についていけなくておろおろしていた。

ちなみにこれ、よくあることだぜ・・・？

閑話休題（T A K E 2）

「・・・へー、そんな事があつたんか」

「死ぬかと思つたがな。特にドイツ軍に追い掛けられた時は死ぬかと・・・」

「大和、お前は何がしたいんだ？」

「いやー！ドイツ軍の国家機密を調べたら追いかけてさー！」

「アホか」

大和のキャッチフレーズは“気になるあの子のプロフィールから国家機密まで全て教えます”ってヤバイ匂いがビンビンするものである。

前にイギリスの国家機密をメールで送られた時は焦った。なんか特殊部隊なんが襲ってきたし。

まあ、ボコボコにしてイギリスのお偉いさん方を脅したけどね！

「えー、大和は高山、響は兵藤を名乗ってんのか？」

「ああ。組長には世話になったが父さんと母さんの名前を引き継ぎたいからな」

「私は織斑を名乗るぞ？お前とけっこないから」「ぶー！相変わらずつれないなお前は！」

口を膨らませる響の頬をつつきながら一夏を探してみる。

少し離れた場所で他の研究者とゲームしてる……。しかもガンダムかよ。

「まあ、うちはガンダムとマクロスにアーマードコア、マジンガーZとかロボットはなんでもござれだからな」

「組長の影響だな」

「死ねこんのマッドがああああああつー!!」

ドツゴオオオオン!!

わりと本気でそいつを蹴り飛ばした。

普通なら肉片すら残らないほどの威力になるのだが、親父の言う“ギャグ補正”のせいで形は保ったままだった。

「ウボオアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ギャー!春樹さんがご乱心だー!止める止めるー!」

「父さんやめてー!」

暴れ始めると周りの科学者が止めようとするがあのにシヨタコンを殴り飛ばしたので止められない。

というかうちの一夏に色目を使うなん座許さん!一夏も千冬も結婚なんかさせねーぞ!!

追伸。四季組管轄研究施設“春夏秋冬”には総勢百五十人の優秀な科学者がおり、全員が全員・・・シヨタコン予備軍である。理由は後々にわかるだろう。

まだまだ次回に続く。まる。

第十四話、親父（後書き）

次回に続く。

春樹の親父、冬樹はガンダム好きでジオン派です。

高山大和、兵藤響は適当なオリキャラではなく、前々から考えていたキャラクターです。

原作前に簡単なプロフィールを書くんで。

今回はマッド変態痴女と天災ウサ耳が邂逅・・・間違いなくヤバくなるな。

第十五話、娘（前書き）

かなりカオスになってしまった・・・。

タグにて追加したものはまた変えるかもです。

それとさ。メッセージでこんなの送ってきた方がいるんだが？

“春樹をFate/ZEROに紹介させて”

・・・俺に死ねと申すか？百万アクセス記念にとかも書かれてるし。原作はまだアニメしか見てないからワカンナイヨ。

今は・・・百五十万アクセスだから二百万アクセスの記念にリクエスト受けるべきなのか？

ないと思うけどwww

ちなみに作者、ダブルオーのフラッグとスサノオが好きです。

第十五話、娘

「ほー、なら春君はまた暴れたと？」

「そうなんすよなじみさん。なんか男のシヨタコンなんざ需要はねえ！って叫びながら第一兵器部門を半壊させてました」

「そーそー。私のデスクまで破壊されたからザクとかガンダムの一タは消えたよ」

・・・なじみさんに案内されて研究施設“春夏秋冬”しゅんかじゅうとうという場所に着いた。

そこで見たのは半壊した研究室とボロボロになった研究者の男女、鎖で縛られた父さんとそれを棒でつつく一夏だった。

それを見た時に我を忘れそうになったがなじみさんに扇子で頭を叩かれて正気に戻った。

「え？春樹さんかい？対象用の麻酔銃で眠らせてから鎖で縛ったんだ。ああでもしないと鎮圧できないからね・・・親父がいなくなつてからはかなり苦労したよ・・・」

「そ、そうですね・・・父が迷惑をかけました」

「いやいやいいよ。僕も春樹さんが帰ってきたからそんなに嫌じゃないから。おっと、僕は修理をしないと」

いそいそと残骸が散らばる研究室を片付けに行く男性の研究者（名前は知らん）を見送る。

というか父さん、昔に何やってたんだ？他の人達にも聞いたが暴れた話しか聞いてないぞ？

やれ屋敷を破壊しただの、やれ試作型の戦車をスクラップにしただの、やれヤクザの事務所をビルごと破壊しただの・・・碌なもんじやない。

でもここにいる皆さんは誰もが父さんを信頼し、家族のような印象が持てた。

昔から父さんは人には優しくかったがまさかここまでとは・・・。

「すごいねちーちゃん。はーくん、皆から愛されてるよ」

「・・・少し妬けるがな」

ここに来てから父さんは普段は見せないような表情を見せている。私がそんな表情をさせたことがないのに・・・と思うと嫉妬してしまふ。

ああ・・・やっぱり私は父さんがいないと駄目だな・・・。

「ほれほれ春樹さん。肉だよ肉〜」

「てめえらぶつ殺すぞ！俺は犬じゃねえんだよバカヤロー！」

「……………目を覚ますの早くないか？」

「すごいねー。普通ならあんな麻酔銃撃たれたら死んでるよ？なに一時間も経たない内に目を覚ますとは……………さすがはーくん！束さんの旦那様！」

束が嫁発言をすると研究室が固まるような音がした。

な、なんだ？急に肌寒くなってきたぞ……………？

ぐるりんと女性の研究者だけ（…………）がこちらを見ると後ろにいた篤が小さく悲鳴をあげた。

…………軽くホラーだな。一斉にタイミングもバッチリで振り向くん
だもの。

「貴女…………お名前は？」

「お前に名乗るような名前は「束、いいから自己紹介くらいはしろ。もう料理作ってやんないぞ」篠ノ之束です！よろしく！」

「束。キャラが違う」

押忍！！と言わんばかりに自己紹介した束は束じゃなかった…………。うん。よくわかるぞ束。父さんの料理が食べられないなら首を吊るぞ私は。

束が自己紹介すると研究者のおねーさま方は篠ノ之……？とか考
えているようだ。

父さんは……肉を差し出した研究者の頭に噛みついている……。
声にならない悲鳴が聞こえてきそうだが敢えてスルー。だって他の
人達も気にしてないもん。

「……………ああ！あのヘタレ君の！」

「……………あ！篠ノ之のヘタレ柳韻か！」「……………」

「……………師範代、貴方は何をしてたんですか……………」

「今こそ結婚してるが柳韻は昔はヘタレでな。好意を寄せる女性を
捌けなくてなおかつ、俺にボコボコにされてたから付けられた不名
誉な称号だ。それにジジイも似たようなもんだけどな」

貴方がそれを言いますか父さん。似たようなものじゃないか？

貴方も複数の女性に好意を寄せられてる上に気付いてないなんて師
範代（柳韻）より酷いんじゃないか？
それに歩く度に女性にフラグを建てまくるのもあれだぞ。

「？どうした千冬、そんな目をして」

……………うん。なんかイラつくな。

父さんは何を言ってるんだ？という顔をして縛られていた鎖を玩ん

でいた。

「はーくん？それ、どうやって抜け出したの？あ、これはこうしたら・・・」

「力付くでぶち破ったんだよ。こんなのは障害にはならないぜ？」

「相変わらずバグだな春樹。少しは自重したらどうだ？」

「だが断る」

うーん・・・父さんって何で縛れるんだろうか？あの鎖、かなりでかいから大型の動物の動きをかなり制限できるはず・・・。
あんなので制限できないなら何でできるんだ？既成事実ができないじゃないげふんげふん！

父さんにそれを聞いた東はかなりナイススタイルな茶髪の女性とパソコンを見ながら何かを話して意気投合していた。

「ほおほお？中々面白いシステムだな。このコアのエネルギーであらゆる事を可能にするのか・・・ハイパーセンサーもかなり優れている」

「でしょ？東さんにかかれば楽勝なのだ！」

「これはすごい・・・！世紀の発明じゃないか！」

「だけど女性にしか反応しないのはまずいんじゃないか？こんなじゃあ私達のMSモビルスーツよりもかなり危険だぞ？」

「んー、だから俺はここに帰ってきたんだ。お前らにも何かアイデアはないかな？つてな」

いつの間にか束とナイススタイルな茶髪おねーさま、何人かの科学者と父さんが束のISの設計図とスペックを見ながら何かを話していた。

これが今回の目的だと父さんは言っていたがうまくいくかな？

しばらく話す父さん達を置いて、私と一夏と箒は待つてる間にまた色々な事を聞いた。

「え？春樹さんかい？なんだろう・・・昔は兄貴肌でよく面倒とか見てくれたよ」

二十代の男性研究員の証言。

「春樹さん？んー・・・組長とよく喧嘩をしては本殿や研究室を破壊してたわね・・・」

見た目三十路のおばさまの証言。

「父さん？・・・あ、春樹さんのことね？一言で言えば天真爛漫かな？昔も今も変わらないと思うよ」

三十代の顔に傷がある強面の男性の証言。

「いい意味では人に好かれる、悪い意味ではリア充かつハーレム野郎」

四季組幹部を名乗る五十代のダンディーなおじさまの証言。
言った後にどこからか鉄の塊が飛んできて気絶した。

「・・・え？誰のこと？」

「あの茶髪の女性です。父と親しいようですがあの人は？」

「ああ、はいはいチーフね！あの人は春樹さんの義理の妹みたいなもんだよ」

「と、言いますと？」

話を聞くと彼女の名前は兵藤響。だけど昔は私達と同じ織斑を名乗っていたらしい。

響さんは父さんの父さん・・・私の祖父が父さんが中学生の時に拾われてからずっと父さんと暮らしてきたらしい。

「……くっ！見れば見るほど出るところは出て引っ込むところは引っ込んでるからなぜか負けた気になる……！」

「……ちなみにだけどチーフは春樹さんの嫁候補だからね？組長が決めてたらしいんだがよくわからないんだ」

「なん……だと……？」

「あ、一番の候補は姉御だね。組長もやれば？みたいに言ってたし……しかも重婚おkみたいな感じで決めてたな。いやー、なつかしくほお！？」

「……クワシク、キカセロ」

「ひい！？（は、春樹さんだ！後ろのスタンドが春樹さんまんまだ！！）」

ガシツと首を掴むと少しずつ力を入れてきょうは……げふんげふん！聞き出すことにした。

「……ふむふむ。なじみさんは昔は父さんを弟のように見ていたがだんだんと恋をして……みたいな感じなのか。」

どこのギャルゲーだ。

「違う！まずはザクからだ！ガンダムなんざ後だ！初代もザクが先だっただろうが！」

「まずはガンダムでしょう！それからガンキャノンにガンタンクからホワイトベースですよ春樹さん！ザクなんざ後でできるでしょうが！」

「僕はマゼラトップとかタンク、ビルドゥブとかがいいです！ビバ戦車です！」

「私はザクはザクでも種死のザクがいいです！あわよくばキラ様のフリーダムを！」

「東さんははーくんとおんなじ〜！」

「どう思う？私はまずアーマードコアのネクストがいいんだが？」

「いいね。でも俺はWのデスサイズヘルのジャマーが欲しいな。あれなら見つからずに済むし」

・・・かなりカオスになってるな。

ISをどうするか話し合ってたはずなのになんか話題がMSをISに転換しよう。みたいになってるんだが？

秘匿は？父さん、秘匿は？

駄目だ。かなりヒートアップして聞いてないな・・・。

ギヤーギヤー叫ぶ父さんと東に研究員数名、それを傍観する響さん

に赤い髪をした男性。

あ。父さんが我慢できなくて誰かを殴り飛ばした。

「昔からあだからね。春君は」

「あ……なじみさん……」

「や。千冬ちゃん」

後ろを見ると安心院なじみさんが扇子で口を隠しながら父さん達の乱闘を眺めていた。

いやいや。止めないんですかあれ。

「めんどくさいからね。時間が経てば収まるよ。たぶん」

「曖昧ですね」

「それがボクだよ？」

少しだけだがなじみさんの事がわかった気がする。

基本的には中立なのだが父さんにはデレデレ？みたいな印象なのだろう（四季組の皆様からの提供）。

父さんを見ればさらに暴れてなんかクリアファイルみたいなので他の研究員の方々を叩きまくってる。

……なぜだ。あれが黒く輝く伝説の武器“SHUSSEKI BO

”に見えるのは？

なんか、いいかも。

「だらあああつー！ザク？の黒い三連星仕様が第一だろうがー！」

「ガンダムですよ！黒いプロトタイプが第一だ春樹さん！」

「よろしい・・・ならばジハード聖戦だ！かかってきやがれクソどもがあああああああつー！」

「うんうん。千冬ちゃん、一夏ちゃん、篝ちゃん、ここから離れてボクの部屋に行こうか？よかったら春君の昔の写真を見せてあげよう」

「できたらください」

私はギヤーギヤー騒ぐ外野を傍目に土下座する勢いでなじみさんに頭を下げた。

ブライド？父さんのシヨタ時代の写真を手に入れられるならば安いものだ！

屋敷：安心院なじみの部屋

「ほら。ここが昔にボクが住んでいた場所だよ。春君の部屋はあそこだぜ?」

「ここが父さんの・・・ねえねえなじみさん。父さん、昔はヒーロ―特撮とか見てたらしいけど何か残ってる?」

「それらは冬君にブックオフに売り飛ばされたよ。代わりに春君の中学生、高校生に着ていた制服とか私服があるよ・・・ああ、千冬ちゃん。鍵が閉まつてるから入れないよ?君、見た目が変質者だから気を付けなさい?」

「ちっ」

私は舌打ちしながら父さんの部屋の扉から手を離れた。

あわよくば父さんの制服を着てみようだなんて思ってないからな?勘違いはしないように。

なじみさんの部屋に入るとまず目についたのが白。白い和服のよう
なものが飾るようにかけてあった。

「ん？これかい？これは春君が特注で注文してくれたものだよ。嬉
しくて襲いかかりそうになったのはあれだけど」

「なん・・・だと・・・？馬鹿な！私は父さんからは日本刀とか木
刀とかアクセサリーとか服とかプレゼントしてもらったがそんな和
服は貰ったことがないッ！！」

「・・・いやいや千冬ちゃん。それ、十分だぜ？ボクなんか
これと髪飾りしかプレゼント貰ってないよ」

「千冬姉・・・なんか怖い」

「お、落ち着いてください千冬さん！」

父さんも人が悪い！昔と比べるとプレゼントの数は少なくなっ
たし、ベッドで一緒に添い寝してくれないし、抱き締めてくれない！

実際は千冬にあげるプレゼントが思いつかないだけです。
ベッドで添い寝は道徳的に駄目だとなじみに言われたから（なじみ
の計画的犯行）。

抱き締めないのは千冬が体を押し付けてくるからである。
これだけ聞けば自業自得だろう。

「さて。それは置いて・・・」

「?なじみさん?」

悶々としているとなじみさんが筆笥を開けて何かをゴソゴソと探していた。

たまに飛び出すものの中にはクナイとかいわゆるドスみたいなものがあつたが。さすがは極道一家の一員。

「いやいや、これは昔に冬君からもらつたものだよ。それに仕事で使うから仕舞つてあるんだ」

「へー」

「お。あつたあつた・・・だけど高校生以上しかないか・・・」

そう言うなじみさんが出したのは赤いアルバム。かなり大きめで三冊ほど出てきた。

「あー、ごめんね?本当は冬君から幼少期、小学生、中学生、高校生、大人とあつただけど春君に取られたみたい・・・たぶん母親が忘れられないんだろうね。羨ましいなあ」

なじみさんからアルバムを受け取ると中を開いて見てみた。

するとまず高校生になったばかりなのか、入学式と書かれたページが出てきた。

この頃の父さんはまだ幼さが残る顔立ちで横になじみさんと小さな少年が立っていて少年と父さんはいがみ合うように睨み合っていた。なじみさんは苦笑いしながら二人を見ていたけど。

次のページも入学式で色々な場所で撮られたであろう写真が大量にあった。

「……父さん、昔と変わらないな。なじみさんも」

「代々織斑家は不老じゃね？って言われてるくらい変わらないからね。ボクはある事をしてるけど春君は素だよ」

「えっと……文化祭、体育祭、修学旅行、部活の助っ人……色々あるね。父さんって昔からすごかったの？」

「インターハイに出るくらいオールラウンドな子でね、助っ人として様々な大会に出てはタイトルを総なめにしてるよ。前にも剣道で日本一三連覇したことあるし」

だからか。私が剣道で日本一になると神童織斑の再来だなんて言われたのか。

うーん。父さんと同じような日本一になれたのは嬉しいが三連覇はしたかったな……。

生憎、師範代に言われて大会には出ては駄目と言われたからな。二連覇しかしてない。

「あ、正確には中学生からだから六連覇かな？剣道だけは柳韻ちゃんと一緒に出てたからね」

「どんだけチートなんだ・・・」

「当時は暁学園からオファーが来てたほどだからね」

暁学園って確か・・・スポーツの特待生を受け入れる全国でも屈指のスポーツ進学校だったか？

スポーツで言えばあらゆる面で秀でている場所だったな。

私も特待生としてオファーはもらったが蹴った。

だって・・・父さんと離れたくないから！！

「春君は暁学園のオファーを蹴り飛ばして別の高校に進学、暁学園とあらゆるスポーツで戦って全部勝ってね？暁学園から“悪魔の織斑”だなんて言われてたんだよ」

「あ、それは父上から聞いたことがあります。なんか父上と春樹さんが「暁学園の鼻をへし折ったぜヒヤッハー！」みたいなことを言っていました」

・・・それは父さん？それとも師範代？どちらにせよ篤。その言い方はやめた方がいいぞ。

それからなじみさんが持っていたアルバムを一夏と篤と眺めた。

所々になじみさんと入学式に出た少年が出てるが誰なのだろう？父さんに弟なんかいたのか？

「ああ、義理の弟はいるよ。ほら、赤い髪をした子がいたでしょ？」

「あ。あの人が・・・でも赤くないですよね？むしろ父さんと似たような色だし・・・」

「ふふふつ、実はね。その子は君達のs「ナニイイイイ！？」騒がしいね」

お、おま！大和貴様、結婚するのか！？

ま、まあ・・・ただただ結婚を前提にお付き合いはしてるが・・・。

ぐあああああああつ！！顔か！顔がいいのかよ！死ねりア充め！！

くそう！春樹さんといい、組長といい、なんでイケメソはモテるんだ！潤いが欲しい！！

「・・・・・・・・負け犬の遠吠えだね」

「あ、はは、ははは・・・・」

無論、生きたことを後悔させながらじわじわとなぶり殺す。

ひえええ・・・黒い。彼氏ができただけでそれじゃあ千冬ちゃん
んが結婚をしたらどうなギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！

ああああ！！また春樹さんが暴れ始めたー！止める止めるー！

な、何が起きてるんだ・・・ここじゃあこれは日常茶飯事なのか？

というか父さんはなぜ暴れてるのだ？彼氏だの結婚だの・・・はっ
！まさか浮気！？

「・・・親が親なら子も子だね」

「はい？」

「なんでもないよ。さ、春君を迎えに行こうか？そろそろ終わる頃
だしね」

「え、でもなじみさん。まだ春樹さん暴れてるんじゃない・・・」

「大丈夫」

なじみさんは誰もが見惚れるような笑顔をしながら私達を見るが・・・
・なんか黒い気配がチラチラ見えるぞ？

ほら！一夏と筭も怯えてるからやめたげてなじみさん！

「ボクが鎮圧するから」

・・・その日、私達は父さん以外で理不尽な存在を知った。

あれはない。父さんが簡単に土下座するなんてなじみさん、何者？

。 とうか・・・高校生の父さんも・・・凛々しい・・・（ダバダバ）

「千冬ちゃん鼻血鼻血」

第十五話、娘（後書き）

次回からはまた日常編で春樹のシヨタ時代を語りたいと思います。
え？聞きたくない？

というか千冬、変態ファザコンの道を爆走してるな。親がいたらこんな感じなのか？

リクエスト、一応受けます。あんま無理なのは勘弁してね？

あんけーと（追記あり）

どうも。最近は寒くなってきましたね。

「とうかてめーは炬燵で猫みたいに寝てんだろ。メタルギアやりながらよ」

こちら、織斑春樹。ご存知、最強親バカ親父です。

「どーも。とうかなにこれ？後書きコーナーみたいになってるんだが？」

・・・まあ、気紛れ？

「何も考えてないだろてめー」

んなことは置いといて。今回はこの小説初のアンケートをしたいと思います。

「は？アンケート？」

うむ。内容はこれだ。

ワン

ツー

スリー

「なんでパクるんだ？」

“一夏の嫁といえは？一夏ラヴァーズの誰？”

ですね。

「ナニイイイイ！？一夏が結婚だとオオオオオ！？」

ああ、黙ってて。皆さんの好みとかでシャルたんは俺の嫁。とかラウラたんは俺の婿。って言う方もいますけどどうかは知らん。

「・・・シャルたん？ラウラたん？なにそれ？」

お前もいずれは関わるよ春樹。ってなわけでアンケートは“一夏の嫁は誰？”です。

候補は原作と同じ、一夏ラヴァーズからです。

一夏嫁候補

・篠ノ之箒（ファース党）

・セシリア・オルコット（オルコツ党）

・鳳鈴音（セカン党）

・シャルロット・デュノア（シャルロット党）

・ラウラ・ボーデヴィッヒ（ブラックラビッツ党）

・更識簪（更識いもっ党）

・その他

ですかね？

「ほ、箒ちゃんが一夏の・・・あれ？よくね？娘当然だし」

・・・箒も可哀想だな。元はお前に恋して・・・おっと。ネタバレだな。うむ。

「？」

そして春樹ハーレムは大体決まっています。

春樹ハーレム（嫁？） 確定

・織斑千冬

・篠ノ之束

・安心院なじみ

・織斑（兵藤）響

・更識楯無

・とあるオリキャラ（まだ秘密だよ）

「おい貴様。なんか嫌な予感がするぞ」

ふはははは！お前の女難はさらに加速する！せいぜい苦しみたまえ！

「よし死ぬ。今から殺してやる」

A フィールド！

「なぜエヴァ？」

他にも大人の女性がいますがそれはまだわからないかな？ブラックラビッツ党とかマヤマヤ党とかミヤミヤ党とかはね〜。

「なんだその妙な派閥は！？というかまだ増えるのか！？」

こっちはアンケートしようか迷うな。あんまり増えると駄文になるし。

クラリッサとかナターシャは仕事上の関係にしようかな？

「誰だよ！？クラリッサとかナターシャとかって！？おい聞いているのか！？」

期限は原作開始の一夏が藍越学園受験時まで。一人一ポイントで一夏ラヴァーズの誰かを選択してください。

いたらだけど。できたら入れてくれると嬉しいですが、メッセージは勘弁してください。

「・・・もうやだこいつ・・・なんで無視するんだ？」

もしその他を選ぶなら名前もお願いします。

ちなみに一夏ラヴァーズは絶対に春樹にはフラグは建ちませんよ。

感想にてお待ちしてまーす！

あ。ちなみに一夏ラヴァーズはハーレムですが最終的に誰と結ばれるかを問うものです。

ですから嫁とはそーゆー意味です。

そこに書かれてる候補しか応募は受けないのであしからず。

筈か鈴か。とかは無効にいたします。必ず一人だけをお願いします。

閑話休題（前書き）

完全なる悪ふざけ W W W

気に入らなければ消します。

アンケート、かなりすげーことになって数えるのがめんどくさげふんげふん！

閑話休題

某年某月某日某曜日某所

「集まったかね？」

カツ！

「ではゼー 恒例会議を始める」

スポットライトだけが照らす部屋・・・そこには仮面を被った男達
が碇ゲ ドウスタイルに組んだ手の上に顎を乗せていた。
数は七。周りには誰かがいるのか、かなりの人の気配がする。

「今回の議題は安室氏からの提供だ・・・安室氏」

「はい」

安室、と呼ばれた男性が前に出るとモニターに何かを映し出した。

「まず、先日に戻ってきた若こと、春樹さんの息子である織斑一夏
をご覧ください」

おお・・・組長にそっくりではないか・・・。

可愛い子ですね。さすがは秋枝お嬢の子。

シヨタっ子ハアハア。

それがどうしたんだ？別におかしいことはないはずだが・・・。

一部、目がヤバイ奴がいるが男達はモニターに映る織斑一夏を見ていた。

それは父親である春樹と手を繋ぎながらアイスクリームを舐めてるところをとっさ、げふんげふん！撮影したものである（写真提供四季組パラッチ）。

「実は・・・一夏君、若は“H”と“R”の素質を持つ可能性が確認されました！」

ザワワツ！

ば、馬鹿な・・・！この子に禁断の要素が・・・！

嘘だ・・・嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だああああああ

ああっ！！

gg t p j a g g m t w p j a a d n t g j a m g a ! !

メデイイイイック!!

さながらトレインマンの毒男並みに錯乱する男達。

彼らがこうなる“H”と“R”とはいったいなんなのだろうか……？

「落ち着け！……安室氏、説明を」

「この情報はケースレッド、H A R U K I自身から聞いたのですが、姉御にも確認したところ、真実である可能性が濃厚です」

「馬鹿な！姉御がもたらした情報ならば疑う余地はない！真実であるというのか！」

だんっ！と机を叩く仮面を被る男性は狼狽えており、前に置かれた“ものりす”と書かれたネームプレートが落ちた。

さらに、他の仮面を被る男性達は仮面に隠れてわからないが、苦い顔をしていた。

そして……。

「よろしい。これよりケースレッド、H A R U K Iに続く織斑一夏をケースイエローと認定、観察をすることにする！」

「『『『『『イエス！イエス！イエス！イエス！』』』』』」

「なお、会員ナンバー2078の密告により、会員ナンバー12の高山大和を追放、ケースレッドと断定する！」

「『『『『『リア充は死ね！リア充は死ね！リア充は死ね！』』』』』」

「ではこれにて第七千三百八十七回目の恒例会議を終わる！我らが目的は……！」

『リア充の撲滅！！』

リア充撲滅の会。

会員は四季組の男性陣のほとんどであり、総本山で三千人、会長は四季組幹部の行き遅れのクソジジイ。

会員になるためには非リア充であること、未婚、モテないなど厳しい選抜があるようだ。

ちなみに、“H”と“R”は“ハーレム体質”と“リア充を送る怨敵”の略らしい。

無論、春樹は二つを装備し、リア充撲滅の会の最大の敵ではあるが開いてるのがバレる度に制裁されるとかされてないとか……。

所変わりました。四季組総本山屋敷内

「さ。久しぶりにボク等も会議をしようか」

「はいお姉さま！」

「まずはこちらをどうぞ！篠ノ之東ちゃんからもらったものです！」

「ほうほう。春君のシャワー姿じゃないか」

途端、キヤーと黄色い声が部屋に響き渡ると中心人物である安心院なじみはその写真を見ながら周りを見る。

ちなみに、所変わりましたと言ったがリア充撲滅の会の二つ隣の部屋で行われてたりする。

「いやー、春君が帰ってきたからボクはまだ戦えるよ」

「H（春樹様）成分を補給したからですか？」

「やっぱりいい匂いがするじゃない春君は。もうドラッグの類いだねあれは」

「きゃー！うらやましー！」

「まあまあ。春君の着ていた服はもらったから後で堪能しなさい」

もはや変態の集まりである。

そこにいるほぼ全員の女性が目を血走らせ、捕喰者の目をし、手をワキワキさせながら涎を垂らしていた。

安心院なじみは少し苦笑いをしながら置いてあつた水を飲むと一息ついた。

「全員！エクカリボルグ聖剣を持って！」

じよせいたちはエクカリボルグをそつびした！

こうげきがカンストした。

めいちゅうが7000あがった。

ぼづぎよが30さがった。

すばやさが99あがった。

きょうぼづどがカンストした！

じょうたいがバーサーカーになった！

「じゃあ、行こうか」

「「「「はい！お姉さま！」「」「」」」」

こうして四季組最大の二つの派閥がぶつかり合う。

被害は四季組総本山屋敷の本殿及び中庭が半壊したようだ。

「春樹様に手を出す不届きものがああああああつ！！」

「くそオオオオオ！あんなリア充のどこがいいんだあああああ

あああつ！！」

同時期某所

「へっくち！・・・風邪か？」

「ほら父さん。豚肉と白菜に豆腐だよ」

「おう。一夏もわかってきたな」

「えっへん」

「くっ！なぜ私には家事スキルがないのだ！スキルがあれば父さんとキャツキャ！ウッフフ！な料理模様を繰り広げられたのに！」

「はーくん。今日は鍋かな？東さんも行っていい？」

「いいぞ。篝ちゃんも呼んどけ」

「やったー！はーくんのごはんー！」

「す、すみません。またお世話になります・・・」

・・・親父とその子供、その親友は今日も平和であった・・・。

“リア充撲滅の会”

会員、三千七百二十一人（男性のみ）。

会長、四季組直系ゼー 組組長及び四季組幹部、コードネーム“も
のりす”

活動内容、リア充撲滅及び織斑春樹に対する敵対行動（笑）

“ 織斑春樹とやりた【運営により削除されました】 ”

会員、千二百二人（女性のみ）。

会長、四季組直系安心院組組長及び四季組副組長、安心院なじみ。

活動内容、織斑春樹を崇拜し、影から見守り、あわよくば貞操をく

【運営により削除されました】。

閑話休題（後書き）

どうでしたか？w w w

ふと浮かんだんで書きました。

第十六話、息子（前書き）

タイトル変えました。

べ、別につけるのがめんどくさくなったわけじゃないんだからね！

活動報告にてアンケート途中経過書いてます。

セカン党、ファース党、シャルロット党の人气がパネエ！

今回からシリアスっぽい感じ。

なんでこうなったかは知らん。

第十六話、息子

今日の天気は晴れ。

父さんの実家、四季組に行ってから二週間が経ちました。その人達はみんな親切で父さんをどれだけ信頼して愛しているかがよくわかった。

そこにいるおねーさん達の目が怖かったけど。

「おーい！それは二階の東側の部屋に頼むわー！」

「」「ういーす」「」

「父さん、これは？」

「それは一階の和室に置いとけ。後は箆笥はどこにするか」

「春樹さーん！この机はどうしますかー！」

「二階の前から二番目の部屋に頼むわ！できたら窓側の横になー！」

「わかりやしたー！」

「うーん。暇だね箆ちゃん」

「私も手伝いたいけどあんまり持てないから……一夏の部屋はど

「ここにあるんだ？」

「二階のあの窓の部屋だよ！本当は父さんと一緒によかったけど俺の部屋を用意してくれたんだ！」

今、俺と父さんと千冬姉は四季組のみんなに協力してもらって引っ越しをしている。

以前にタバ姉（タバ姉に呼べと言われた）がいんふいにとすとらとす？を造った時に父さんの銀行の口座から引き出してしまったため、あのマンションから引っ越した・・・でいいの？

引っ越す先は父さんがじいちゃんと最後に住んだ普通より少し大きめの一軒家で安心院あんしんいんさん（なじみさんに呼べと（ry）が管理していたのを返してもらったみたい。

その時に安心院さんが父さんにキスをねだった時に千冬姉とタバ姉が騒いでいたけどね。

「はーくん！この部屋を束さんがもらっていい！？」

「家賃払え。一日三万な」

「な、なんですと！？一ヶ月ではなく一日・・・！アメリカの銀行をハッキングせねきゃびい！？」

「やめい。さすがにそれは駄目だ。お前の立場がさらに悪くなるから・・・たまに遊びに来るならいいが住み込みはノーだ」

「ぶー。でもツンデレなはーくんもいけ・・・すいません謝ります

のでその握られた拳を下ろしてください」

「東。悪いがここは私と父さんの新たな愛の巣だ。邪魔をするならお前といえども・・・」

「・・・なんでこうなったんだ？俺は育て方を間違えたのか・・・？」

父さんはorz状態（安心院さんから聞いたことがある）になると四季組のみんなに慰められるように肩に手を置かれていた。千冬姉ってなんか間違ってるの？ただ単に父さんが好きだけじゃない？

大人はよくわからないな〜。

「む〜」

「？どうしたの篝ちゃん？」

「あ、いや、なんでもないぞー夏？それよりそのちゃん付けをやめてくれないか？なんか嫌なんだが・・・」

えー、でも父さんもちゃん付けをしてるし、今から変えても違和感があると思うんだけどなー。

たぶんだけど篝ちゃんは父さんに恋をしてるんじゃないかな？たまに父さんを見るとときに熱っぽい視線を送るし。

そういえば前に父さんが授業参観に来たときはすごかったな。すごい目立ってたし、クラスメイトから質問責めをされたし。父さんってカッコいいもんなー。髪も乙女の敵？とか担任の先生（ ）が言ってたもん。

「やつほー春君。調子はどうだい？」

「あ。姐さん。まあ大体は終わりましたね。後は小さな物だけです」

「なるほどなるほど・・・それより昔みたいにおねーちゃんとか言ってくれないのかい？ボク、なんか寂しいよ。よよよ・・・」

「嘘泣きはいいですからね？おーい！そろそろ休憩しようかー！」

「」「」「ういーす！」「」「」

「今日はボクが昼食を作ってきたからね？さあ食べて食べて」

「・・・ねえ父さん・・・安心院さんの飯って・・・大丈夫？」

「・・・おい一夏。なぜ私を見る？なぜそんな目で私を見るんだ？」

残念。千冬姉にバレてしまったようだ。

だって千冬姉・・・家事は壊滅的だし、料理を作れば父さんを殺す最終兵器になあいたたたっ！

千冬姉に頭を脇に挟まれてグリグリされると痛み悶える。

や、やめて！千冬姉のそれはもう凶器なの！対男性用の最終兵器なんだよ！？

「それなら大丈夫だ。俺に料理を覚えてくれた一人が姐さんだからまず死ぬことはない」

「orz」

「あー！お嬢！しっかり気をもつてくだせー！」

「^{メデイック}衛生兵！^{メデイック}衛生兵！^{メデイイイイイック}衛生兵！ー！」

「わー！ちーちゃんしっかりしてー！」

「・・・あ。悪い。言いすぎたわ」

「君の何気ない発言は時に人を傷つける鋭利な刃になるから気を付きなよ春君」

父さんが言った何気ない発言に千冬姉が（物理的にも精神的にも）沈んだ。

仕方がないよ千冬姉。前に父さんが千冬姉の料理を食べたら死にかけたじゃん。

無敵の父さんをああするって千冬姉ってなんなの？

「あ、ねえ父さん。ちょっと遊んできていい？俺と篝ちゃんはやる

「こないから」

「ん？いいぞ。ただし千冬と東と一緒に。俺はまだこれをやらにゃならんし」

父さんは荷物を入れたトラックを指差しながら口に棒状の何かをくわえた。

あれ？あれってチュツパチャップスかな？

それから四季組の手伝いのみんなと安心院さんの弁当を食べると、篝ちゃんと千冬姉、タバ姉と近くの町を歩いて見ることにした。

父さんとの約束であまり遠くへは行かないように、スーパーや本屋とかゲームセンターの場所を確認しておく。

「ば、馬鹿な・・・この本は・・・“禁じられた親子愛”私の好きなお父様”ではないか！発売禁止になったはずなのに・・・！」

「おー！こっちは“愛しのあの人は親友の父親”略奪愛編”だよ篝ちゃん！これは買わないと！！」

・・・うん。まあ、いつもの事だから俺は気にしてない。
父さん、また胃を痛めるんだろうな・・・前に胃薬を飲んでたのを見たことあるし。

色々な場所を歩きながら千冬姉達と探索をする。

この町、風景、匂い、活気は父さんがじいちゃんと最後に暮らしたときに感じたものらしい。

確かにここはいい所だ。さっきの本屋にいた店員やスーパー、八百屋とかにもいたおばちゃんも優しくかった。

聞けば昔に父さんと知り合いだったらしく、じいちゃんによく買い物に来ていた事を楽しそうに話していたのを俺達は何度も聞いた。・・・でもなんか違和感があるんだよね。親子のように見えていたのはいいんだが・・・逆親子ってなんなんだ？

「じゃあ帰ろうか。そろそろ父さんも心配してるだろうからな」

「わかった！」

「おっけーだぜちーちゃん！」

引越し途中の父さんとじいちゃんが住んでいた家から出て四時間が過ぎた頃なので、少しずつ空も暗くなってきた。

夕焼けに染まる空を背景に俺と千冬姉、タバ姉、篝ちゃんと一緒に新しい我が家に帰る。

うーん。今日の父さんの晩御飯はなんだろう？父さんの料理は美味しいからまた楽しみだな！

でも・・・なんか父さんは何かを隠してる気がするな。なんかこう・・・千冬姉と何かを隠してる感じが・・・。

今思えば父さんは俺と千冬姉を可愛がってくれてるけど、母親がいないのはおかしいと薄々感じている。

皆は父さんに夢中で誰も聞かないが母親がいないのは気になる。家でも母親の話題になるとはぐらかされるし。

母親が死んだとか父さんの奥さんの話も四季組に来た時にはまったく聞かない上に、何かを隠してる感じがここでもあった。

「・・・どうした一夏？そんな難しそうな顔をして」

「え？な、なんでもないよ千冬姉！」

「大丈夫いつくん？なんか辛そうな感じがするよ」

「なんでもないってタバ姉！」

千冬姉とタバ姉が心配そうにするがやはり気になる。

父さんは何かを隠してる。それもかなり重要な、俺と千冬姉に関する何かを。

自分でもなぜ気になるかはわからないけどどうしても俺の家だけ母親がいないのかが知りたい。

「（・・・前に四季組に行ってから一夏の様子が変だ）」

「（だね。上辺だけでどこか上の空みたいな感じだよねいつくんは）」

「（何も起こらないといいが・・・父さんとももう一度話した方がいいな）」

でも父さんは俺をよく可愛がってくれている。
欲しいと思ったものは買ってくれるし、忙しくても俺との時間を作
ってくれるし、美味しいご飯も作ってくれる。

・・・本当の・・・親子だといいな・・・。

「むっ？」

「どうしたのちーちゃん」

「誰かが来る」

ネギとかが飛び出している買い物袋を持つ千冬姉が曲がり角の壁を
見ながら少し警戒する。

「き、貴様は・・・！なんで・・・！」

「ようやく見つけたぜクソガキ」

曲がり角から少し柄が悪い男が歪んだような笑いをしながら出てき
た。

千冬姉の様子がおかしいな？あの人と知り合いか何かかな？
なんでそんなどこまでも憎いみたいに見えるような目で見るんだよ？

「なんで貴様がここにいるんだ！」

「かつ、あのクソ女がお前らを逃がしたから今までずっと探してたんだよ千冬」

「お前、なんなの？ちーちゃんの名前を気安く呼ぶなんて」

「束、今からすぐに一夏と篝を連れて早く逃げるんだ！早く！！」

「ち、千冬姉・・・？どうしたの・・・？」

千冬姉は俺と篝ちゃんを後ろに庇いながらタバ姉に押し付けていた。なんでそんなに慌てながらあの人から逃げようとするんだよ！？

「おいおい冷たいな・・・せつかくお前らの親父様が迎えに来てやったのによ」

「黙れ！！」

・・・え・・・？ちち、おや・・・？

「おお、一夏はまだ小さいからわからないか。俺は・・・」

「喋るな！それだけは言わないでくれ！！」

「ちー・・・ちゃん・・・？」

千冬姉は今までに見たことがないくらい慌てながら叫んでいた。

ダメダ・・・コレヲキイテハイケナイ・・・。

キイタラ・・・イママデノスベテガクスレル・・・。

「俺は・・・お前らの父親だよ。遺伝子上でも血もお前らと繋がった真正正銘の父親ってことだ」

「あ……」

「一夏!？」

それを聞くと何かが崩れる音がし始めた。
体に力が入らなくなつて倒れそうになると千冬姉に支えられる。

「ちつ、道具ごときが俺の傍から離れるなんて嘗めた真似をしてくれる。まあ、いい……今まで父親だと思つていた奴は偽物で本当はお前達を疎ましく思つていただろうよ。ハハハッ!」

「黙れええええええええ!!」

「おつと。殴つたら傷害罪で訴えるぜ?そしたらお前らの慕つお父様に迷惑がかかるんじゃないのか?けひひっ」

父さんが……偽物?

じゃあ今まで俺を愛してくれたのは?

本当はただ単に育てただけで愛情がなかつたんじゃない?

わからない。父さんは……誰なの?

「一夏、千冬。お前らはあの組長息子から金をもらうためのただの道具だ。本当の父親は俺だ。あいつは偽物の父親で本当はお前らが嫌いだ。戻れ。俺ならお前らを愛してやるよ、今ならな」

「あの人を虐待してたくせにそれはなんだ！？私達の父親は織斑春樹ただ一人！貴様なんか知らない！」

「ちっ、余計な知恵を持ちやがって……だが一夏はどうだ？混乱してるんじゃないのか千冬？」

「ッ！一夏？」

わからない。何もわからないよ。

母親がいないのは偽物の父親だから？

ならこの人は本当の父親？

父さんは……父さんはいない……誰が父さん……？

「一夏！しっかりしろ！あんなやつと言う事を真に受けるな！」

「けひゃひゃひゃ！まさかあんな生意気なクソガキがお前らの場所を教えてくれるとはな……これでまたあの組長息子から金を貰えるな！」

「お前、ウザいよ。さっさと死んだらどう？」

「あ？なんなんだてめえは？これは俺達家族の問題だ。よそが勝手に口出しするなこの×××が！！」

「貴様！束を貶すな！貴様に束の何がわかる！？」

「おお、怖い怖い！ま。今日はこれくらいにしてやるよ。一夏・・・お前はあの父親から、誰からも愛されない事を覚えておけよ・・・アハッ、アハハハハハ！！」

「殺す！！」

我慢の限界がきた千冬が本気で殴りかかるがひらりと避けるとそのまま男は曲がり角に消える。

千冬が追い掛けるが逃げ足が早いのか、曲がり角を覗いても誰もいなかった。

「くそっ！なんで今ごろになってあいつが！」

「あれがちーちゃんといっくんの父親？あり得ないよ。二人の父親ははーくんしかいないよ」

「おい一夏？大丈夫なのか？」

「・・・千冬姉・・・どういづことなの？」

「・・・すまない。今まで隠してきた。取り敢えず帰ろう。父さんとも話さないと」

「でも偽物の父親なんでしょ千冬姉？」

「違う！あんなやつより父さんがよっぽど父親だ！一夏、騙されるなよ。あいつは父親なんかじゃないんだ！」

千冬姉はそう言うが俺の心はモヤモヤしたまま晴れることはなかった。

「おう。お帰り」

「ただいま父さん。これ、買い物したやつだよ」

「サンキユ。今から飯を……ん？どうした？なんか辛そうな顔をしてるな一夏？」

家に帰ると父さんはいつものように黒いエプロンをつけて出迎えてくれた。

そしていつものように頭を撫でながら笑いかけてくる。

・・・これも・・・偽物、なのか・・・。

「父さん」

「ん？」

「父さんって・・・偽物の父親なの？」

撫で続けられた手がピタリと止まると父さんの表情が固まった。

「・・・な、なにを」

「父親を名乗る変な奴が現れて聞いたんだ・・・どうなの父さん？
母親がいないのも偽物の父親だからなんでしょ!？」

「そ、それは・・・」

「もう俺・・・誰を信じればいいのかわかんないよ!」

「あ、おい一夏!」

頭に乗せられた手を乱暴に払い除けると俺にあてられた部屋に閉じ

籠った。

千冬姉とタバ姉が叫んでいたがもう誰の声も聞きたくなかった。

あの優しい父さんも、なにかもが偽物なんて……。

「一夏……」

部屋にいるはずなのに父さんの呆然としたような眩きが聞こえてきた。

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

来るべき時が来てしまった。まる。

第十六話、息子（後書き）

本当の父親登場。

捨てられた二人と伯父である親父の行方は・・・。

的な感じ。

もちろん、最低下劣な父親にしたいです。

春樹の妹、秋枝と結婚したのもある理由があります。

うまくカケルカナ！。

第十七話、親父（前書き）

もつやだ・・・なんでこんな鬱展開書いたんだろっか？

まあ、春樹の過去を少し書けたからいいけど。

アンケート、まだまだ募集してます。

第十七話、親父

今日の天気は曇り。

まさに俺の心も曇っている。

なぜなら一夏がついに画してきた事、秋枝の息子で俺が本当の父親ではない事を知ってしまったからだ。

「はあああ~~~~~」

思いつきりため息をつくと畳に顔を押し付けてふて寝する。

なんかやる気が出ない。一夏に半分嫌われてしまったから自己嫌悪で意気消沈。

憂さ晴らしに四季組総本山で変態どもをタコ殴りにしたがストレスというかイライラ感は徐々に上がっている。

「ちーちゃん、はーくんは大丈夫なの？」

「駄目だ。二日前のあれからあんな感じた。何をしようともせずにあんな風にただ寝ず食わずの一日だ・・・私も父さん成分が足りなくてやる気が出ない」

「お姉ちゃん。春樹さん、なんとかできないかな？一夏も部屋にいて学校も休んでるもん」

「んー、東さんの頭脳でもいい方法は浮かばないな。師匠も考え
るって言うってたけどね」

「あんな春君、はじめて見たよ。冬君が死んだ時はあんなんじゃないな
かったんだけどな・・・それより千冬ちゃん、間違いなくあのクス
なんだね？一夏ちゃんにあんな事を言ったのは」

「はい。忘れもしません。あの人・・・母さんを虐待してる時から
ずっと忘れません。間違いなくあいつの顔でした」

一夏の本当の父親を名乗るボケは秋枝と駆け落ちしたクソガキで間
違いないと千冬から聞いた。
んで、ブチキレて殺そうとしたが姐さん一同、四季組に抑えられて
止められた。

現在は大和を中心にクソガキの搜索を四季組一同でやってるような
ので俺は完全にノックアウトして家の居間の横の和室で死んでる。

「あー・・・死にたくなってきた」

全員に全力で止められた。

三日経過

「いちかイチカ一夏一夏イチカ一夏一夏いちか一夏イチカ一夏
一夏イチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカイ
チカイチカイチカイチカイチカイチカ」

「父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん
父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん」

「わきゃー！はーくとちーちゃん壊れたああ！！！」

「・・・まさか三日でこうなるなんてどんだけ親バカなんだ春樹・・・」

「ふむ。おそらくICHIKA成分とHARUKI成分の枯渇による拒絶反応だな。千冬は春樹に抱きつかせれば治るぞ」

「おい春君。目を覚ましなよー」

三日後、春樹と千冬はまさに覚醒剤の禁断症状のごとく、和室の畳の上でぶつぶつと虚ろな目で横たわっていた。

春樹は一夏と仲直り、もとい会話ができていないため、千冬は春樹の料理を食べていない、抱きついていないのが原因である。

新しい、古巣の家に来た東、大和、響、なじみは現状に呆然としていた。

東は慌てながら千冬を揺さぶり、大和はパソコンを持ちながら春樹を蹴って殴られ、響は煙草を吸いながら二人の現状を冷静に（？）見極め、なじみは春樹の頭を撫でたり頬を叩いたりつねったりしていた。

「いたたた・・・姉御、これはどうするんだ？話ができないぞ」

「取り敢えず千冬ちゃんは春君に抱きつかせよう。春君は【優しく起こすから】」

「・・・なんか安心できないんですけど」

「大丈夫大丈夫。じゃあ・・・」

ギェアアアアアアアアアア！！

ああ・・・なんか、癒されハアハア

「ぐおおおお・・・腰がバキバキ鳴るううう・・・」

なんか綺麗な花畑と美しい川を見ていたら姐さんにバックブリーカー食らって腰の骨が一部砕けかけた。

姐さんはいつもの扇子で口を隠しながら笑ってはいるが、絶対楽しんでるだろ。

「なんかちーちゃん艶々してない？」

「H A R U K I成分にはリラックス効果、リフレッシュ効果などがあるからな。定期的に採取すれば髪の毛の艶マックス、肌もつるつるでテカテカになれるぞ」

「これでまた戦える！父さんへの愛は止まらない！」

「へー」

「・・・なんか父さんが冷たひ・・・」

二時間くらい抱きついた千冬はテンションマックス！と言わんばかりにノっており、なんか輝いている。

だが。一夏に嫌われた今じゃどーでもよくなってきたよバーニィ・・・。

深く、深いいため息を再びつくと言に顔を押し付けて頂垂れる。

「・・・これは重症だね。一夏ちゃんもだが春君も色々ヤバイぜ」

「取り敢えずビタミン剤打つとこ」

ザスツと首の横に注射器で打たれるとやる気が妙に出る気も・・・しない。

畳に死んだまま寝ていると姐さんと大和、響が何かを取り出して和室にあるパソコンに繋げた。

それはUSBメモリらしく、パソコンの画面に何かの情報が出るが無気力ハイな俺には見る気が出ない。

「ここにはあのクソガキの情報と秋枝さんの居場所が書いてある。探すのに苦労したぞマジでさー」

「いやいやー、成長したね大和ちゃん。ボクより早く見つけれられるなんてね」

「おうおう。さすがだな大和。ファントム幻影だなんて厨二的な名前を持つておくせに」

「やめて！それは俺じゃないんだよ！なんか勝手に付けられただけだからよお！！」

なんか姐さんと大和と響が騒いでるが無気力ハイな俺には（ry

千冬と束がまた抱きついて頬擦りしてるがどうにでもなれ。もうどうでもよくなってきた……。

「夏あ……ごめんよお……俺の事を許してくれよお……。」

「おろろーん」

「うわあ……漫画みたいな涙をはじめて見たな」

「もう病気ってレベルだぜこれ」

「だばーっと涙を流す俺は一夏に嫌われたダメージに耐えられずに悲しみにうちひしがれている。」

「一夏に嫌われたら俺はもう生きる意味もない……。」

「もう死にたい」

「なぜかあったロープで輪を作ると首を吊ろうとする。」

「もちろん、全員に全力で止められる事になるのだが。」

「ぬおおおおっ！？春樹、さすがにそれは駄目だ！！」

「よせ！死んでもいい事はないぞ！！」

「あははは、なんか綺麗な花畑が見えてきた。．．．あ。川の向こうで親父が手を振ってる。」

「三途の川アアアアアアア！それは三途の川だ！渡るな春樹イイイイイ！」

「駄目だよはーくん！死んじゃ束さんは悲しいよ！泣いちゃうよ！」

「そつだぞ父さん！父さんが死んだら私は何に抱きついて生きていけばいいんだ！？」

「え？なんだよ親父？早くこつちに来い？わかったよ」

「取り敢えず寝ていなさい春君」

ズドムツ！！

「ゲフウ！？」

パタン。ちーん。

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「さ。早く本題に入ろうか」

視点チェンジ！ここからはボクの時代だぜ！

「うむ。ではまず、あのクズについて話し合おうか」

「いや、あの。なじみさん、父さんはどうするんですか？」

「しばらくしたら目を覚ますから大丈夫だよ千冬ちゃん」

首吊り自殺をしようとした春君の腹をぶん殴って気絶させると和室で縛ってリビングにある椅子に座らせた。

それからボク、千冬ちゃん、束ちゃん、大和ちゃん、響ちゃんと座ると話し合いをする事にした。

篤ちゃんも来たいみたいだけど学校があるから学校に行っている。

千冬ちゃんと束ちゃんは今日は建立記念日なので休みである。

まあ春君があればだから無理矢理休むだろうけどね。

「束ちゃんはどこまで知ってるかな？ボクや大和ちゃん、響ちゃんに千冬ちゃんは知ってるけど」

「んー。ちーちゃんといっくんがはーくんの所に来たくらいは聞いたよ。詳しくはわからないけどね」

「ん。了解。簡単に説明するから聞いてね？」

「らじやー！」

んー……。と。春君がまだ四季組にいた頃だから……。十六年前、かな？

十六年前、四季組総本山

『駄目だ！あんなクソガキと結婚するんなら俺も親父も認めねえぞ
』！』

『嫌よ！私はあの人と結婚したいのよ兄さん！』

『いい加減に目を覚ませ秋枝！あのクソガキの本性を知らないんだ
！あいつはクズなんだよ！』

当時の四季組総本山でボクと春君は秋ちゃんがあのクズと結婚する
と言い出した。

春君は勿論、大反対。春君の直感が彼がろくでもない奴だと感じた
からだろう。

無論、ボクも反対。妹みたいな秋ちゃんをあんな奴に嫁がせる気は
まったくないからね。

この頃から冬君は体が弱り始めて寝ていたから春君が実質、組長代
理をしていたね。

『なんでよ兄さん！あの人はそんな人じゃないわ！』

『ふざけるな！あいつの過去を知らないからそう思うだけだ！大和
から聞いたら奴は昔に覚醒剤やら拳銃保持で補導されたり、ムシヨ
にいた事があるんだぞ！？』

『でも今は真つ当に生きてるわ！』

『ただのフリだ！いい加減に目を覚ませ馬鹿野郎が！』

春君はあの時、組長が座るべき場所で憤慨しながら秋ちゃんに怒鳴
っていたな。

秋ちゃん、春君と少なからず似たような顔をしてたからね。見たら
同じ顔が怒鳴りあっているように見えなかったな。

秋ちゃんは春君の愛した母親が最後に生み残した春君と血が繋がっ

た冬君以外の唯一の家族。
母親を失った春君は秋ちゃんを溺愛していたからな。あんなにキ
しるのは仕方がないと思うよ。

『もういい！兄さんもお父さんも認めてくれないなら私はここから
出ていく！』

『待て秋枝！お前、絶対に後悔するぞ！頼むから親父に心配はかけ
させないでくれ！』

倒れた冬君を気遣う春君は秋ちゃんが出て行って冬君に心労をかけ
させたくなかったんだろ。自分のためでもあるけど必死に秋ち
やんを止めようとしたんだ。

でも結果は止められなかった。

今まで我儘を言わなかった秋ちゃんがあそこまで反抗したから戸惑
っていたせいでもあったんだろ。ね。

秋ちゃんはそのクズと駆け落ちして四季組、織斑家から出ていった。
実は後から知ったんだけど秋ちゃんのお腹の中には赤ん坊がいたん
だよ。

・・・そう。君だよ千冬ちゃん。

「私が・・・？」

うん。本当は秋ちゃんはそのクズの本性を知っていたんだ。最初は愛し合っていたんだけどあのクズは秋ちゃんじゃなくて後ろにいる四季組を見ていたんだ。

当時、今もだけど四季組は莫大な富を持っていた。あのクズはそれを手に入れるために秋ちゃんに近付いたんだ。

秋ちゃんもそれがわかって離れようとしたけどクズに脅されてお腹の中の子供を守るためにわざと四季組から離れたんだ。

尊敬する冬君、今まで優しくしてくれた春君には迷惑をかけたくはなかつたんだろうね・・・。

後は大体は察しの通りだよ。それから一夏ちゃんが生まれ、春君の元に来たというわけだ。

十六年後、現在。織斑家リビング

「まあ、こんな感じかな？春君に千冬ちゃんと一夏ちゃんを預けたら秋ちゃんはクズから逃げてどこかで暮らしてるみたいだけど」

「そしてあのクズはまた現れた。まさにゴキブリみたいにしつこいな」

だね。前に春君が一回、全力全壊無慈悲魔王破壊砲撃を気でぶっ放したのに生きていたからね。
ギヤグパートだったのかね？

すると千冬ちゃんはやはりどこか戸惑った感じで座っていた。
まあ、捨てられたと思ったら本当は護るために春君に預けたとは思わなかったのだろう。

前に春君から秋ちゃんの手紙を読ませてもらったけどあの仕掛けは気付かなかったんだろっね。千冬ちゃんは。

『・・・はあ。まさか昔と変わらない炙り出しで新しい文字を出す仕掛けとはね・・・』

『懐かしいね。春君が自慢したら秋ちゃんも真似したんだっただね』

実は秋ちゃんからの手紙を火で炙ると本命の手紙が出たため、春君は全ての真実を知った。

レイプまがいで一夏ちゃんを孕んだこと、虐待から二人を護るために春君に預けたこと、本当はずっと春君といたかったと誰にも話せなかったことが書かれていた。

春君はすぐに秋ちゃんを探そうとしたみたいだが、まだ幼い一夏ちゃんも千冬ちゃんを置いていくわけにもいかなかったみたいだ。

「・・・あの人は・・・私を護るために・・・」

「秋ちゃんは昔から春君と同じで誰に対しても優しくかったからね。だからそこにつけこまれたんだろ。でなきゃよっぽど馬鹿な奴しかクズとは付き合わないよ」

それくらい酷かったからね。

今までボクも仕事で色々な人間を見てきたけどあそこまでののは中々見ないよ。

・・・まあ、春君も人間の汚さを知ってしまったから秋ちゃんをあんなに気にかけたんだよね。

母親の件もあるし。

「兎に角。まずは一夏ちゃんと春君をなんとかしないと解決とはいかないでしょ？」

「せっかく束と春樹が喜びそうなISのシステムを開発したのにな」

「それに気が狂う。春樹がああなってみんなもなんかピリピリしてるし」

「その件はボくら、楯無家も動こう。どうも裏がある気がしてならないからね」

今まで知らなかったのに急に現れたのも気になるからね。対暗部用暗部である更識家の力を使えばすぐにわかるだろう。

んー。春君って何かとトラブルに巻き込まれるよね。

昔なんかバカンスに行けば飛行機ハイジャック、現地でテロリスト。ご飯を食べに行けば銀行強盗の人質になったりとか……。

「一夏〜一夏〜」

「ね、寝言まで一夏って言ってるぞ……」

「愛されてるな。できたら私にその愛をぶちこんでほしいんだがな？」

「下ネタ禁止!!」

話は春君に最低限の情報を与え、ボクらはクズの背景を調べながら断罪をすることにした。

春君はキレるからはずしておいて、四季組総力戦と洒落こむことに決めた。

ローラー作戦で見つけたらじつくりと話して近付かないようにさせるか、もしくは地獄を見せて送るか。

どちらにせよ、春君と一夏ちゃんを掻き回した罪は重いよ。

「はあく……父さんの料理が食べたい……」

「……待ちなさい。春君、まさかとは思っけど何も食べてないのかい？」

「は、はい。私は出前とかで食べてますが父さんは食べるどころか寝ていません。一夏にはハンバーガーとかを与えています……」

……また悪い癖か……。

春君、落ち込んだりすると断食、睡眠をしなくなるからな……。

取り敢えず無理矢理何かを食べさせよう。

「はい。口を大きく開けてね」

「はがががつ！」

口を無理矢理開けて大和ちゃんと響ちゃんに固定させてもらつと激辛キムチ雑炊を食べさせた。

春君、嬉しそうに叫ぶから作ったかいはあつたものだ。

そしてその二日後・・・あいつが四季組総本山に姿を現した。

第十七話、親父（後書き）

金曜サスペンスとかにもよくあるよね？母親が護るために捨てる的
なやつ。

次回はあのクズが四季組に現れます。無論、春樹がブチキレます。

あー、早く番外編を投稿したい。原作ISワールドを書きたい！

第十八話、娘（前書き）

駄目だ。我輩にはシリアスは似合わない。

今回からたまにあとがきにておまげやらNGシーンとか書いていきます。

楽しんでね。

第十八話、娘

『……何の用だ。わざわざここまで姿を見せるとは覚悟はできてるのか?』

『へっ、へへへ。そんなに冷たくしないでくださいよお義兄さん』

『虫酸が走る。さつさと死ぬか用件を言えクソガキ』

今日は晴れだが四季組、父さんの実家は父さんの憤怒の感情で息苦しく感じた。

認めたくはないが生みの父親であるあいつがなぜか、実家である四季組に顔を見せに来ていた。

父さんはすぐさま四季組に行き、大広間の畳の上に不機嫌そうに胡座をかき、トントンと膝に指を当てていた。

父さんから留守番してるように言われ、私と一夏は待っていたのだからなじみさんがついてきなさいと半ば、強引に四季組に来た。

「……安心院さん、俺は父さんの子じゃないから……」

「いいから黙って見てなさい。そして春君が君達をどう思ってるかを感じなさい」

「安心院さん……」

なじみさんはまだショックを受けた一夏を優しく撫でながら別室にて用意された監視カメラから映る父さんとあいつの様子を見る。他にも、四季組の舎弟達がズラツと並んで座り、あいつを睨むように見ていた。

大和さんや響さんは私と一夏、なじみさんと同じ部屋で様子を見ている。

曰く、今の父さんは歯止めが効かないから出来るだけ自分達が見えない位置にいて止める時は止めるとのことだ。

『それで？俺の妹を弄んだ上に一夏や千冬にちょっかいを出してまだ何かあるのか？』

『そうピリピリしないでくださいよお義兄さん』

『・・・死にたいのか？俺は貴様を認めてはいないんだ』

父さんはどこまでも冷たい目であいつを見下すように見ていた。

今まで見たことがない父さんを見て私と一夏は驚くがなじみさんだけは懐かしそうに見ているが少しだけ警戒していた。

父さんが発する覇気はビリビリと四季組の屋敷を震わす。

武術をやる私だからわかる。父さんの覇気は・・・長年、積み重ねられた努力を感じた。

そして、他を圧倒し、他を呑み込み、他を受け入れる。そんな覇気だった。

「わかるかい？まさにあれは“王”たる証だよ。昔は四季組を束ね、全てを欲しいままにした“小さき霸王”の息子たる証だよ」

「小さき、霸王・・・？」

「また春君から聞きなよ。ボクは止められてるからね・・・あ。動きがあつたみたいだよ」

画面に目を移すとあいつが父さんに気持ち悪い笑みで何かを頼んでいた。

周りにいた人達も我慢ならない様子で怒りに震えていた。

「いいじゃないですかお義兄さん。たんまり貯めてるんでしょ？少しくらいおこぼれをくださいよ。自分も織斑なんですから」

「貴様が勝手に名乗ってるだけだ。俺も親父も貴様が織斑を名乗るなぞ許してはいない」

「またまたあ。本当は許してくれてんでしょ？」

「テメエ！ふざけんな！春樹さんがテメエなんかを許すわけがないだろうが！」

「うるさい！今はお義兄さんと話してるんだ。関係ないやつは引っ込んでろ！」

『テメエ・・・!』

『落ち着け。今キレてもいいことはない』

『ですが春樹さん!』

『いいから。座ってるんだ』

『へっ、へへへ。わかつたら座れよ』

・・・あんなのが自分の父親だと思いたくないな。
父さんの覇気を受けてもまったく恐れていないし、殺気もまったく感じていないようだ。

こうして父さんを見るだけでも私は冷や汗が止まらないのに・・・。

「一夏ちゃん。よく見ておくんた。あれが君の本当の父親、織斑春樹の本来の姿だよ」

「・・・父さん・・・」

「春君は君を愛している。それもあんなクズなんかよりもね。本当はわかっているんだろ? 君は春君が好きだ。だけどあんなやつの子供である自分が父さんである春君と一緒にいいのか・・・ってね」

「一夏、お前やっぱり・・・」

一夏は少し俯くと何かを耐えるように目を閉じていた。

一夏は年のわりに落ち着いて父さんもなんか・・・

「なんかキモい。普通に子供らしくしゃがれ」

とか言ってたし。

一夏はガーンとショックを受けていたが。

父さんが一夏の好物を作ってあやしていたけど。

「いいかい？血が繋がるだけが親子じゃない。仲の悪い血の繋がった親子もいるし、血の繋がらない仲のいい親子もいる。別に気にする必要はないよ・・・春君は君の全てを受け入れてくれるからね」

『貴様がどう言おうとも、一夏は俺の息子だ。たとえば、本当の親子じゃなくとも。あいつは・・・俺の自慢の息子なんだよ』

なじみさんと父さんのセリフが重なるように流れると、一夏は静かに涙を流す。

画面の父さんはあいつの頭を踏みながらそう告げると蹴り、襖を破って屋敷から追い出した。

「俺・・・父さんとしても、いいの・・・？」

「当たり前だよ」

『俺は一夏を護る。貴様のようなクズには決して渡すつもりはない。そして、織斑の姓を名乗ることもない！』

『な、なんだよ！暴力だぞ！？警察に訴えてもいいのか！？』

なにやら父さん達は先々に進んでるようで、なじみさんは泣いている一夏の涙を拭きながら立たせた。

そして、私達は部屋から出て父さんのいる場所に向かうことにした。

「・・・ふっ。俺達四季組に警察は不可侵だということを忘れたか？それに反省もしない前科持ちの貴様の言うことを警察が信じるんでも？」

「同感だね。秋ちゃんに対してもDVで訴えられるから君はおしまいだよクズ」

「姐さん・・・千冬に一夏も・・・」

父さんがいる場所に来るとあいつは他の人達に拘束されて殴られていた。

自業自得なので助ける気はないがな。

父さんは一夏を見ると少しづつが悪そうな顔をする。

一夏もまた、どう話せばいいかわからないといった様子だった。

「」
「」
「」

「こら春君。いいから君から話しなさい。君は“父親”なんだから」

「だ、だが・・・何を話せばいいか・・・」

「・・・なんか戸惑う父さんも新鮮で・・・イイ・・・」

ごほん。父さんはまだばつが悪そうな顔をしながら頭をガリガリ掻くとあーとかうーとか唸りながら一夏と話そうとしていた。なじみさんははあくつとため息をつくと持っていた扇子で父さんの頭を叩いて一夏の方に軽く突き飛ばした。

「いいから。いつものように話しなさい」

「・・・わかりましたよ・・・」

父さんはふう〜と深呼吸すると一夏と目線を合わせるためにしゃがんだ。

そして一夏の顔を手で挟むと一夏はビクツとしたが逃げようとはしなかった。

「・・・一夏・・・ごめんな。今まで隠してきた」

「い、いや！父さんは俺のために隠してたんでしょ！謝る必要はないよー！」

「いいや。もつと早く話していればこうはならなかったかもしれないから・・・謝らせてくれ。そして辛い思いをさせてすまん。辛かっただろ？悲しかっただろ？母親がいないからっていじめられて・・・ないか。してたらシバき倒すし」

「・・・あ、あははは・・・」

やはり父さんにはシリアスは似合わない。

父さんは一夏の頬を触りながら頭をガシガシ撫でた。乱暴だが昔からよくされていた父さんの撫で方……あれは落ち着く。

「いいか一夏。お前は俺の息子だ」

「……俺、父さんの本当の息子じゃ……」

「いいや。お前は俺の自慢の息子なんだよ一夏……血は繋がってなくても。たとえ義理の親子だとしても。お前は俺の……織斑春樹の息子、織斑一夏なんだよ」

「あっ……」

優しく諭すように、まさに天使のような人懐っこい笑顔をする父さんは一夏の小さな手と父さん自身の手を繋ぐようにすると一夏に見えるようにした。

一夏は少し驚いた顔をするがまた右目から涙を流した。

「な？今まで俺とお前は親子じゃなかったか？今まで過ごしてきた日々は偽物だったか一夏？」

「あ、う、お、おれ……」

ポロポロと涙を流し始める一夏は父さんを真っ直ぐに見ていた。

そして私は今までを振り返ってみた。

『おーい一夏ー。ゲームしようぜゲーム』

『よっしゃー！きょうはまけないぜ！』

『父さん、あんまりやらないようにね』

『勝負に手加減なんざあるわけねーだろ。全力で心まで叩き潰す』

・・・いやいや。これは違った。

『んっ・・・と』

『よしよし。そのままフライパンに油をひいてあるから炒めるように入れるんだ』

『わかった！』

『さて千冬は・・・ンノオオオオ！？なんだその惨状はあああああああ！？』

『い、いや・・・少し失敗しただけだよ父さん・・・』

『ギヤアアアア！？なんで卵がダークマターにいいい！？』

・・・あれ？碌な思い出がないんじゃないか？

どれもこれも私が若干オチキャラになってる気が・・・。

と、とにかく！私、父さん、一夏は今まで親子のように過ごしてきた。

時には笑い、時には喧嘩をし、時には泣いたり短いようで長い付き合いをしてきた。

「ど、どうさん・・・おれ・・・父さんのこともでいいの・・・？」

「当たり前。誰が否定しようとも、世界を敵に回しても俺はお前を自慢の息子だと言ってやるさ・・・だからまた始めよう。俺達、織斑家をな」

「う・・・うわああああああん！！」

一夏は父さんに抱きつくこと泣いた。それはもう盛大に泣いた。父さんもうつすらと涙を浮かべて一夏を抱き締めていた。

・・・これ言ったらKYの称号をもらうかもだが・・・なんか最終回みたいな件じゃないか？

「千冬ちゃん。メタ発言は駄目だよ。そんなんで終わったらボクと春君のイチャラブ新婚生活ができないじゃないか」

「残念ですね。父さんと新婚生活をするのは私です」

むしろお前らの頭が残念だと突っ込みたいところである。

「・・・それより、あれ、どうする?」

「ワシは恒例のコンクリートで固めて東京湾にポイじゃな」

「いやいや。それよりじっくりと骨を砕いたり生爪を剥いたりして生き地獄を味合わせるのがいいかと」

「むしろヘリコプターからノーバージーで突き落とすのは?」

「・・・それ採用」「・・・」

「なら私はヘリコプターを手配します」

「俺はパラシュートとカメラを。最後にこのアホの顔を撮るのもいいかもしれん」

「ひ、ひいい・・・お前ら!お義兄さんの義弟である俺を・・・! キャプ!」

「・・・テメエは死んでろ」「・・・」

音にするならドゲシッ、ドガシッ、バキッ。

蹴ったり踏んだり殴ったり叩いたりと暴力のオンパレードをあいつ

は受けていた。

ザマアミロ。

「父さん！父さん！」

「うんうん。俺はここにいる。もう見捨てたりなんかしないよ」

癒されるわ〜。

「誰が突き落とす？立候補してみ？」

「はいはい！蹴るか殴るかヘリコプターを傾けて落とすに一票！」

「ヘリコプターにワイヤー引っかけてリモートコントロールで落とすに一票」

・・・和むわ（！？）〜。

「千冬ちゃん。キャラが違う」

「いいじゃないですか。父さんと一夏のわだかまりも無くなったんですから」

ようやく父さんと一夏が仲直り？したから父さんも復活するだろう。つまり、いつでも抱きつけるし、匂いをクンカクンカしても大丈夫だということだ。

取り敢えず今日は父さん特製のピザを頼もう。それもマルゲリータを。

あわよくば父さんのどうt r y

「んー。これで心配事はなくなったからボクは一時ロシアに帰ろうかな」

「え？どうしてですか？」

「前に話しただろ？ボクは対暗部用暗部の“裏”の一家を束ねたことがあるって」

確かに・・・父さんもそんなことを言ってたな・・・。

「あっちにね。ボクの可愛い弟子兼妹兼娘がいるんだ。そろそろ顔を見せないとこねるからね」

「・・・つまり、なじみさんは結婚w「してないから。ボクの後任の当主の子供を引き取っただけだから」ちっ」

残念だ。なじみさんが結婚してたら最大のライバルが消えたのに。なじみさんは扇子でスパーンと私の頭を叩くと父さんと一夏に近付いていった。

うう……父さんの拳骨と同じくらい痛いんだが……！

「……で、いいかい？春君」

「ああ……ってかまた急に？今までは四季組にいるって言ってたじゃないっすか」

「うん。春君が心配だったけどもう大丈夫みたいだし、そろそろ顔を見せないと泣いちゃうからね」

「あー、わかったわかった。じゃあ春君、少しだけ留守にするから。じゃあ……来る？」

「やだ。一夏と千冬という方がいいから」

父さんはキツパリと断ったがなじみさんはなにやら怪しすぎる笑いで何かをたくらんでいた。

……あれ、絶対に何か碌な事を考えてないな……。

少し束と相談をするべきだな。なんかこう……父さんが盗られる気がするし。

「千冬、お前も来い。今まで苦労とか心配かけてすまんかったな」

「イヤツフオオオオオオ!!(父さん・・・私は気にしてないよ)」

「お嬢!?本音と建前が逆ですぜ!?!」

私は父さんのセリフを聞くとすぐに飛びつくように抱きついた。
父さんの胸に顔を埋めると父さんの匂いをじっくりと嗅いだ。

・・・ああ・・・なんか足りない欲望が満たされるような・・・。

「千冬ちゃん、顔顔。だらしない顔をしてるよ戻して戻して」

「はふう〜」

「・・・駄目だこりゃ・・・」

なじみさんがなんか言ってるが無視。今は枯渴した父さん成分、
もといH A R U K I成分を補給しているから。

もう悩みもないせいかな、いつもの父さんよりも安らいだ。

隠していたことを話してスッキリしたんだろうな・・・ああ、癒されるう〜。

「・・・なんか腑に落ちないな〜」

「おお、よしよし。迷惑かけてごめんな千冬。」

「千冬姉ズルい！今は俺が抱きついてるのに！」

「・・・そして一夏ちゃんも重度のファザコンに・・・」

うん。これで一件落着。また父さんと一夏と暮らせるな。

なのに・・・

「くそっ！どいつもどいつも馬鹿にしゃがって・・・おい！あいつを殺せ！」

『了解。その代わりに約束は守れよ？』

空気の読めない馬鹿が一匹追加された。

「よお千冬……」

「うわぁ……」

あの気持ち悪い似非イケメソ厨二野郎がなんかISみたいなのを纏って浮いていた。

「……だ、ダブルオー、クアンタ……?」

「真のイノベーターたる俺が千冬を迎えに来てやったぜ……あの変態親父から助けるためによ……」

……空気が白けるとはこの事だな。

第十八話、娘（後書き）

NGシーン

「真のイノベーターたる俺が千冬を迎えに来てやったぜ・・・あの
変態親父から助けるためによ・・・」

「はあああああくううううううん！！」

キイイイイ・・・ン・・・ 空からなんか飛来。

ドクジャツ！ ISを纏うイノベーター（笑）が轢かれる。

ザザザッ！ 飛んできた何かは春樹達の前に急停止。

「のおおおおああああ・・・」

キラーン

「やつほーはーくん！東さんが来たよー！」

「・・・よし。見なかったことにしよう。東、今日は何が食
べたい？作ってやるよ、一夏のもの」

「ホント！？なら私ははーくんが食べたい」

グシャツ！ 千冬が束を握り潰す（誤字にあらず）

「なら俺は鍋がいい！しゃぶしゃぶで千冬姉と父さんと食べたい！」

「よし。買い物に行くか」

イノベーター（笑）は記憶から抹消されました（爆）

おわれ。

第十九話、親父（前書き）

いえーい。二百万アクセスいったぜー。

ユニークも三十五万いきました。ありがとうございます。

今回のイケメソフルボッコは悩んだ。悩んだ末にソロモンネタを使うことにした。

第十九話、親父

「・・・おい誰か医者を呼んでやれ・・・黄色の救急車をな」

「あいやー」

取り敢えずなんか頭がパツパーな金髪イケメソがダブルオークアンタみたいなのに乗って浮いていた。

千冬を俺の嫁発言した上にストーカーをする馬鹿はまさか心を病んでいたのか・・・くっ。気付かなかった俺に虫酸が走る！

千冬は嫌そうに顔を歪めていたがそんな目で見てやるな。

あいつは心を病んでいるからもう少し生暖かい目で見守るように見てやるんだ。

「・・・なんか不愉快な事を思われた気がするぞ・・・」

「そしてまた幻聴もあり・・・重症だな。おい、新しく有名な精神科の医者と頭を見てくれる医者を追加しろ」

「あらほらさっさー」

「おい。今から降りてこい。いい医者を紹介してやるからよー！」

「へー。自分がやられるのをわかってるのか・・・わかってるじゃねーか。今なら半殺しで勘弁してやるよ」

さらに追加！。精神異常、幻聴、被害妄想、頭がパツパーで取り返しがつかないレベルと断定ができるな。

・・・くっ。二度目だがなんと不憫な事か・・・。

世界でも屈指の腕を持つ医者と呼ばう。こいつの未来のために・・・。

「わかる。わかるよ春君・・・でも彼はもう手遅れだ。せめて彼の味方になることがボクらのできることだろう・・・」

「くそっ！また俺は・・・救えないのか！目の前に助けられる馬鹿いのちがあるのに！」

頼むから真面目にやってくれよ姐さん。顔がめっちゃ笑ってるぞ。つてゴリアー！てめーらなに後ろを見て笑いを必死にこらえてるんだ！バレルだろうが！

「ふっ。自分の敗北を戦う前から嘆くとは・・・哀れな」

「ブウッ！」

同時に俺と姐さんは嘔き出した。

だって・・・なんかブワッって髪を掻き分けるようにしながらどや顔するイケメソ（馬鹿）を見てたら耐えられないからね。

密かに爆笑していると千冬は俺の背中に回って身を隠すようにしていた。

うーん。あれはないわな。顔はいいんだが性格とか仕草の時点でOUTだな。

なんだろう。なんかそれを振る舞うに足りる容姿を手に入れた（・・・）
（みたいに感じるんだが・・・）

。

「・・・ま、いつか。黄色の救急車まだ？」

「まだ来てません。というかぶっ飛ばせばいいんじゃない？」

「んー。悪いが俺はガンダムとかと戦ったことねーから。それに戦って爆発とかやだし」

ダブルオークアンタとかあれだろ。劇場版じゃ対話のために造られたガンダムだし、実力はまだ未知数なんだよねー。

エクストリームバーサスでも出たけど本当はどうだか・・・。

それにGNドライブとか積んでたら手の出しようがない。GNフィールドなんか破れねーかもしないし。

「ISが使えればまた別なんだがねー」

「無理でしょ。触るだけで屈服させるなんて春君だけだから」

「うむ。束と実験をして男共に触らせたが全員が無反応、春樹のよ
うに屈服させるという結果は出なかった」

「うぐ……」

なんかズバツと言われるとあれだな。

原因はなんだろうな？束と響に聞いてみたがどちらも

「はーくんがバグだからじゃない？」

「春樹がバグだからだろ」

って即答された。マツハで心にヒビと傷ができました。

「ねえ父さん。あれなに？」

「シッ！指差してはいけません！あれは馬鹿だから見ただけで移り
ますよ！」

「ぶっ、くくくく……！」

「ふふん。俺の魅力にぐうの音も出ないようだな」

ぶっはっ！もう笑うしかないだろこれ！

「この魅力に釣り合うのは千冬しかない。さあ、俺と共に来い千冬」

「断る」

「だとさ。ちなみに俺も結婚は許さん。お前みたいな変態にはなおさらだ」

するとイケメソ君は顔を真っ赤にして叫び始めるが無視して今日の晩飯の献立を考える。

うーん。一夏の好きなしゃぶしゃぶにしようかな？

うんうん考えていると姐さんも欠伸をしながら退屈そうにしていた。

「俺の話聞けよ！無視なんかしてんじゃねえ！！」

バキユウウ・・・ン！

イケメソ君がGNソード？を構えて撃つと近くにあった山に当たり、穴を開けた。

・・・おー。粒子ビームじゃん。

「おい一夏、すげーぞあれ。モノホンみた・・・い・・・？」

「ううゝ・・・なんか当たったあ・・・」

一夏を見ると額を押さえて涙目になっていた。
よくよく見ると額が少し赤くなっており、何かが当たった痕があった。

・・・イケメソ君、ビーム撃つ 山に穴が開く その反動か、山にあった木の破片が一夏の額に命中 ならばやることは？ 一夏を傷つけたやつをぶつ血kill。

いやいや。明鏡止水の心で・・・相手に憎しみは駄目。

・・・・・・・・・・・・・・・・よし、落ち着いた。さてイケメソ君とO

H A N A S H Iしようか・・・。

「ためゴラアアアアアア！！一夏になに傷をつけてんだああああああああっ！！」

明鏡止水どころか悪鬼羅刹の心でキレル親父であった・・・。

いかりのすーぱーモード！うなれ！わがはいのみぎてよ！

「じいじいねやあああああつ！！」

右手・・・ではなく、右足によるソバットでイケメソ君の腹の部分を蹴る。

防がれると思ったがあっけなくヒットし、ダブルオークアンタは地面に沈んだ。

「食らえ！ライダーキイイイイック！！」

「チー！GNソードビット！」

空中で空気を蹴って急降下しながらバツタ仮面の必殺技をえげつないほどの気を込めて繰り出す。

イケメソ君はダブルオークアンタの代名詞であるGNソードビットでフィールドを張り、足と衝突してスパークする。

それを見て右足をフィールドにつけたまま、背中から地面に落下するように体を動かす。
地面に手をつくと足を回転させるように回し、イケメソ君をまたもや蹴り飛ばす。

「響！あれくれあれ！一応用意しといて！」

「あんまりハデなのはやめろよ春樹」

「善処する！うらあああつ！北斗 拳でも食らえや！ほわたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたあ！！」

腕を残像で増やすかのようにイケメソ君のダブルオークアンタのボディを殴り（突き？）まくる。

うむ。親父から習ったがなかなかいいものだな・・・。

殴り（突き？）まくっているとソードビットの一部を破壊してしまい、イケメソ君は焦った顔をする。

「おい春樹イ！それは後で解剖するからむやみにダメージを与えるな！」

「あゝあゝん！？ソードビットなんざ一本残せばいいだろうが！」

「（ま、まずい！ダブルオークアンタのシールドエネルギーが半分もない！このままじゃ・・・！）使いたくはなかったが仕方がない・

・・トランザビエル!？」

「トランザムなんか使わせるかハゲエ!!!GNバスターライフルな
んざ使ったら屋敷が吹っ飛ぶだろうが!!!」

「え、ちょ、ま・・・」

北斗 拳で浮いたダブルオークアンタの足を掴むとビッタンビッ
ンと地面に叩きつけながらイケメソ君をフルボッコにする。
なんかイケメソ君が言ってたがあえて言おう。

んなもん無視だ無視。

むやみやたらにガンダムみたいな兵器の武器を使っつて自分が持つ
ものが凶器だと理解していない証拠。
粒子ビームなんかぶっ放してしまっただんじゃあ、山なんか消し飛ぶ
だろう。

実際にダブルオーライザーの粒子ビームなんかアロウズのアヘッド
とかジnkクスを瞬殺してるしな。

トランザムライザーなんか隕石とか消し飛ばせるから論外だ論外。

「懐かしの・・・ク　パをジャイアントスイング!コントローラ
ー回して回して〜!」

「お、おげええええ……！」

一通り、ダブルオークアンタをボコボコにすると足を持ったまま、その場で回転、ジャイアントスイングをする。イケメソがりバースしてるようだがあえて言おう。

んなもん無視だm(r)y

「離せ！離せよ！」

「ん？いいよ」

パツと離すとジャイアントスイングにより遠心力がついてるため、イケメソ君のダブルオークアンタは空に向かって飛んでいった。イケメソ君は途中で体勢を整えるが、思いつきりバースしてた。

「あー、あー……ごほん」

どこからか取り出したバズーカを肩に置き、喉を触りながら調子を確かめる。

あーあーと声の調子を確かめながらお目当ての声になるとバズーカ

のセーフティを外した。

「我が織斑家、一家安泰のために！」

「この声は……！」

まあ、わかる人にはわかるだろうな。四季組のほぼ全員がガンダム
ネタ知っているし。

だが一夏だけは首を傾げてなんのことやら？状態だが。

「ソロモンよ！私は帰ってきたあああああつー！」

「ガトー！？二号機の核ですか！？え、ちょ、響さん！」

心配無用。核じゃなくてただの催涙弾だから命の危険はな（ズゴオ
オオオオオオンー！）……なんでこうなるし。

「……あ。やべ。弾を間違えたわ」

「おい響イイイイ！？」

大和が叫ぶがどうしよう。催涙弾かと思ったら火薬満載のリトルボ
ーイじゃないか。

核じゃないけどなんか戦艦が爆発したような閃光だぞあれ。

イケメソ君、生きてるかな？

ま、我輩は一夏を傷つけた馬鹿を断罪できたからどうも思わんけど。取り敢えずイケメソ君のダブルオークアンタだけもらって病院に放置しとこう。

「・・・見事なブラザーアフロじゃないか・・・春君、でかした」

「そのままナイトフィーバーとかできそうだな。ミラーボールにしがみついて踊れそうだ」

姐さんとイケメソ君を探してみると見事なアフロヘアになって死んでいた。

まあ、生きてるけどね。ピクピク痙攣してゴキブリみたいだけど。

「んー・・・あ。これじゃない春君」

「・・・おー。ミニチュアGNソード？じゃないか。もらっとこ」

たぶんISであろうダブルオークアンタの待機状態であるGNソード？ミニチュアバージョンを取るとイケメソ君を引き摺りながら戻ることにした。

というかISの情報は流してないのになんでイケメソ君はISを持つてたんだ？

詳しく調べないとわからないが、GNドライブなんか積んでたらI

S以上にヤバイ気もするぞ。

兎に角。イケメソ君をごうも・・・げふん。お話ししてISをどこで手に入れたか聞くとしよう。

場合によつては東京湾に沈んでもらうけどな。

「・・・というか春君。暴れてよかったのかい？」

「一夏を傷つけた罰ですよ姐さん」

「いや・・・あれだけ爆発音がしたら政府とか人工衛星に見つかるんじゃない？」

「あゝ」

「・・・またノリでやったのか春君・・・」

「しまったー！ISがバレたらヤバイことにー！いや、待て。バレてない可能性もまだ捨てきれない・・・うん。大丈夫なはず・・・」

「っと思ってたんだが・・・」

「おい春樹。あのクアンタがネットで流れてるぞ」

「神は死んだー！」

案の定、戻ると響から死の宣告を受けた。

響が持つノートパソコンには、インターネット上にてイケメソ君とダブルオークアンタが空を飛ぶところが映ってた。

・・・って待てや。イケメソ君、ガンダムのステルス使わずに街中を飛んでたのか？

「見られたのはクアンタが街中を飛んでるとこだけだな。衛星はギリギリでお前とアレが戦うところは撮れなかったみたいだ」

「セーフ！俺が戦うのがバレてないならまだ言い訳ができ」「それで他のサイトからクアンタがトランザム使ったり粒子ビームを撃つてるとこがまた撮られてるな」あんのクソイケメソ野郎があああああああつ！！」

引き摺っていたイケメソ君を思いつきり踏んだ俺は悪くない。タマを潰しても悪くない！

というか秘匿しやがれ！ISなんか試し撃ちして見られやがって！

あー、駄目だ。もう詰んだ・・・なんて説明しようか。

間違えて自分だけ利益を得るためとか戦争を起こすために秘匿してたとか言われてしまったら終わりだ。

うーむ。どうするべきか・・・ISを世に出すのはもう避けられない。

束はどこの国にISを見せたようだし、勘のいいやつは気付くだろう。

あー！もつめんどくさい！！

「で。春君」

「・・・なんすか姐さん・・・」

「更識家からなんだけど日本政府及びに在日アメリカ海軍や空軍がこちらに向かってきてるそうだよ」

「はいアウトー！完全に詰んだぜコノヤローがああああああつ
！！！」

何度目になるか、俺の魂からの叫びは四季組総本山の庭にてよく轟くのであった。

ちなみに、日本政府と在日アメリカ軍は後日に世界会議のようなもので発表すると姐さんが言ってくれた。
こういうのは便りになるんだがな・・・。

で。ダブルオークアンタを調べてみたんだが見事にGNドライブを積んできた。

束と響によればGNドライブとISコアが融合したかのようなものだと話し、技術もかなり高度だとも言ってた。

さらに実験でダブルオークアンタを起動させてみたんだが・・・。

世にも珍しいガンダムの土下座姿が拝めた。

・・・落ち込んで一夏と寝たのはいい思い出・・・。
一夏とは仲直りし、今では父さん父さんとちょこちょこくっついて甘えてくる。

なんか嬉しくてわしゃわしゃ頭を撫でながらじゃれたりもした。

「妬ましい・・・一夏、我が弟が妬ましい」

「おい千冬。一夏が怯えてるからやめれ」

それに反して千冬が病み始めた。

完全に逝った目で一夏を見てるし、前よりもスキンシップが激しくなってる気もする。

・・・親父。俺は育て方を間違えたのだろうか・・・？

織斑春樹、三十七歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、六歳。

我が織斑家は一家安泰となってきた。まる。

第十九話、親父（後書き）

if：弾薬が火薬じゃなくて核だったら？

北斗の拳ならぬ親父の拳スタートwww

書かないけど。

NGシーン

「北斗 拳でも食らえや！ほわたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたあ！！」

「……？は、はっ……見かけ倒しかよ！」

「ふっ……お前はもう、死んでいる……」

「ひでぶっ！？」

にしようかと真面目に思った我輩。

NGシーン

「俺の右手が轟き叫ぶ！お前をぬっ殺せと黒く燃える！」

「あ、あれは！禁断の技！親父が直々に禁術扱いにした最強にして最狂の必殺技！」

「ぶああああくねっ！“親父による妬みのごっつぶいんがー”！」

ガシッ！ 頭をわしづかみ。

メシッ！ 指を頭に食い込ませる。

パーンッ！ 脳ミソパーン！

・・・グロいからやめた。ごっつぶいんがー、使う機会が無くなる
とイイナー！。

第二十話、親父（前書き）

今回は

・母親登場。

・春樹、（強制的に）ロシア行き。

・千冬の原作のクールな性格に改変フラグ（ただし、ファザコンは深刻化する）。

の三本立てでお送りします。

第二十話、親父

本日は雪降る天候なり。

少し季節外れな雪が降る中、我等が織斑家はザックザックと雪の上を歩く。

現在地は自宅より少し北に行った場所で、電車やバスを乗り継いでここまでやってきた。

「さむっ」

「そりゃあ、北に来たからね」

「余計に寒い！」

「父さん、寒いから父さんの体温で暖めて」

「俺も俺も！」

メンバーは俺、姐さん、千冬、一夏。

最初は千冬と一夏で来る予定だったんだが今回、会いに行くやつは姐さんにも関係してるから連れていけないわけにはいかなかった。

というか千冬。かなり厚着をしてるくせに寒いとか言うな。

「で。情報は確かなのかい？」

「まあ・・・大和が手に入れた情報ですから大丈夫でしょう。ここ
の病院に名前を変えて入院してるんですけど・・・どこだ？」

駅から出て街の案内板を見てみると病院はなぜか大小合わせて十個
はあった。

入院できる設備があるのは六個。こりゃ、骨が折れるな・・・。

「・・・」

「不安か？」

「う、うん。だってはじめて会うし・・・どんな顔かも知らないか
らちょっと不安かな？」

「あー、秋枝は俺と瓜二つな顔をしてるぞ。今じゃわからんが不老
と名高い織斑家ならそう変わらんだろ」

「身長もあまり伸びてなさそうだしね」

今回、雪が降る地域までわざわざ来たのは大和から秋枝が入院して
ると聞いたからだ。

あのクズは刑務所にぶちこまれて懲役二十五年だそうだ。
恐喝、監禁、虐待、覚醒剤所持、銃刀法違反のオンパレードで借金
も億単位でしてたらしかった。

今頃になって現れたのは借金返済の金をもらうために来たようなので同情すらせん。」

落ち着いてきたからこうして秋枝に会いに来てるわけである。

「よし。探すぞ。顔までは変えてないみたいだから聞き込みあるのみだ」

「おー、なんか刑事みたい！」

「二手に別れる？ボクは一人でもできるけど・・・」

「私は父さんとがいい。できたらデートみたいに」

「・・・おい。秋枝を探すために来たんだぞ？それはしねーよ千冬」

秋枝が千冬を見たら卒倒するんじゃないかね？って思いながら二手に別れて探すことにした。

俺に千冬に一夏、姐さんとかかなり偏ったメンバーで秋枝探しをすることになり、病院を回る。

・・・なんかRPGにしたら誰々を探せ！みたいなクエストがありそうだな・・・。

「あの、すみません。自分とよく似た女性がこちらに入院してませんか？」

「・・・え？あ、はい！少々お待ちを！」

姐さんは更識家の元当主だったから人探しも容易い。

だから一人でも大丈夫みたいに言ってたがなんかたくらんでる気がする・・・。

とうかこのナースさん、大丈夫か？なんか顔が真っ赤で慌ててるんだが・・・？

「・・・駄目だ。なんで父さんはこうも鈍感なんだ・・・」

「なんか言ったか？」

「いや。なんでも・・・ほら父さん。さっきの人が待ってるよ」

千冬になんかありえねーみたいな顔されたがまずはナースさんから話を聞こう。

結果は駄目。いなかったようで、別の病院に行くことにした。

ちなみに千冬は受験はない。推薦で高校入学が確定してるのでこうして休みの日も空いてるわけである。

一夏はまだ小学生で受験に縁はまだ無いからついてきてる。

まあ、一夏は秋枝に合わせるために連れてきたんだけどな。

事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ！

「え？本当ですか？」

「はい。織斑はるか春夏さんという名前で入院されてます・・・家族の方ですか？」

「ええ。兄です」

「・・・若い・・・えっと、部屋は1027です。面会をしますか？」

「お願いします」

そして三件目の病院にて秋枝が偽名で入院してるのを見つけた。

とういか秋枝。春夏ちなつって千夏にしてやれよ。千冬ちふゆがかわいそうだろうが。

ナースさんに病室に案内されて来るとなぜかドアの前に姐さんがどや顔で立ってた。

「……………なんているん？」

「ふっふっふっふ……………すでに大和ちゃんから場所は聞いていたからだぜ」
「」

「あの野郎……………殺す……………！」

あのクソ大和……………俺に情報を隠して姐さんだけには教えやがりやがったな？

取り敢えずぶん殴ろう。俺の苦労と見られる苦しみを味合わせてやるうじゃないか……………。

ここに来るまでにやたらと逆ナンされるし、写真を撮ってくれと言われてた。

俺は拒否をしたんだが妙にアイドル扱いされて逃げられないもんだからストレスが地味に増えたのである。

「じゃあ……………いいかい春君？」

「いや、俺が先に入ります……………あの、いますか？」

『はい。どなたですか？』

ノックをして中に入ろうとすると中から凜とした、懐かしい声が聞こえてきた。

ああ・・・懐かしいな・・・間違いなく、あいつの声だ。

横にドアをスライドさせて入ると病室のベッドに上半身だけ起こした女がいた。

「・・・に、兄さん・・・？」

「・・・ああ。久しぶり、だな。秋枝・・・」

「え、え？なんでなじみさんまで・・・」

「元気そうだよ・・・久しぶり、だな」

少し、やつれてはいるが昔と変わらない容姿で秋枝はベッドにいた。秋枝は目を見開いて驚いているが俺は真っ先に秋枝の体を抱き締めた。

「にい、さん？」

「無事でよかった。お前が生きていてよかったよ秋枝」

今まで会えずに俺は心配で堪らなかったため、我慢できずにやつれた秋枝の体を感じを確かめるように強く抱き締めた。秋枝は戸惑いながらも、背中に手を回して抱き返す。

「……ごめんなさい兄さん。私は……」

「いい。お前が無事でよかったよ秋枝……」

「元気そうでよかった秋ちゃん。ボクも心配してたんだぜ？」

「なじみさん……」

ごめんなさいと謝る秋枝をあやすように背中を擦りながら秋枝としばらく抱きあった。

「……我が母ながら妬ましい……!」

「……千冬姉、少しは空気を読もうよ」

残念ながら二人の子供である千冬と一夏、いや、千冬は父と抱き合
う母に嫉妬していた。

君に会えてよかった……ってシリアスっぽくしてみよう！

「え！？この子が千冬と一夏！？」

「おう。大きくなっただろ？」

「……さすがは兄さん……子育てエキスパートの異名は伊達じ
やないわね……」

しばらく経つと秋枝に千冬と一夏を紹介して二人は秋枝と戸惑いな

がらも話し始めた。

特に一夏ははじめて見る母親にどう接したらいいかまだわかってないみたいだ。

秋枝は俺と瓜二つな容姿をして少し俺より背が低い感じた。

というか秋枝は親父の負の遺伝子を受け継いでしまったため、普通より背が低いのだが。

「えっと・・・織斑秋枝といいます。君達は？」

「・・・織斑千冬。織斑春樹の娘で嫁です」

「織斑一夏です」

「・・・色々ツツコミどころがあるがためーらは親子なのになんで他人行儀なんだ。で、千冬は嫁じゃねーよ」

雑誌で三人の頭をバシバシと叩くと俺は病院恒例のリンゴ剥きを遂行。

というか上に投げて落ちてくるのをスパンと切ったからリンゴ剥きじゃなくてリンゴ斬りだけだな。

「ん」

「・・・相変わらず無駄に才能使ってるわね兄さん・・・ありがと」

切ったリンゴをシャリシャリ食いながら秋枝に渡すと改めて話をする。

今まで何をしていたか、なぜ一言でも相談してくれなかったのかなどと今まで会えなかった分まで語り尽くした。

「……そうだったの……兄さん、また迷惑かけて……あたっ」

「いちいちネガティブになって謝るのはお前の悪いとこだぞ。千冬と一夏のことには気にするな、俺がやりたかったからやっただけだよ」

「そう、ね……ありがとう兄さん。今まで千冬だけじゃなくて一夏まで育ててくれて」

「んや。俺も親父が死んでから塞ぎこんでたから俺も助かってたよ。この二人のおかげでだいたい立ち直った」

ガシガシと千冬と一夏の頭を撫でると二人ははにかむように笑う。

……千冬はなんか息を荒くしていたが。

秋枝もまた、大きくなった二人を見て笑いながら頷いていた。

まあ、千冬はまだ小学生だったし、一夏は赤ん坊だったからここまですべて成長して嬉しいんだろうがね。

「というか秋枝。お前はどやって親父の死を知ったんだ？あんなに情報は漏れないように規制はしたんだが？」

「あ、それはボク。一度だけ秋ちゃんに会えたから教えたんだ」

「……って場所知ってたのかよ!？」

「ためこらああみたいに叫ぶと姐さんにはっこり笑って腹を思いっきり殴りやがった。」

「ぐはっ……なんで……?」

「いいから黙ってなさい春君……次、口を開いたら潰すよ」

「これは本気だ。冗談などではない。と言わんばかりの姐さんに、久々に恐怖した。というか俺、悪くないよな？」

「でね、秋ちゃん」

「はい」

「悪いんだけど千冬ちゃんと一夏ちゃんを預かってくれるかな?」

「え?」

「なっ!?!?」

「ええ?」

「・・・腹がああ・・・」

上から秋枝、千冬、一夏の順に答えると姐さんはリンゴを口に入れてまたもや喋り始めた。

「ちょろろつとめんどくさいことが起きてね、春君がある新型の宇宙探索マルチフォームスーツについて発表しなければならないんだ」

「は、はあ・・・」

「で。ついでだから春君もロシアに連れて行ってそこで勉強してもらおうかと思ってるんだ」

「やだ！俺はロシアになんか行きたくない！俺は二人とげぶおっ！？」

姐さん、必殺技である理不尽腹パンにより、俺、悶絶。
というかなんで殴られるんだ俺は？

「嫌だ！私は父さんといるのがいい！駄目なら私もロシアに・・・」

「はい千冬ちゃん」

「行ってらっしゃい父さん。お土産、なんかよろしくね」

姐さんが千冬を買収しやがった……。
なんか自分が得するような状況なら問答無用で買収するか脅迫を選
択するからな姐さんは。

何を渡したんだ姐さんは？前なんか千冬に写真を渡したりとかして
たがなんなのだろうか？

「（ふふふふ……父さんのシャワー姿は貴重だ。もう一緒に入っ
てくれないから見れなかつたがいいものを手に入れた！）」

「千冬姉……」

なんか一夏が千冬を見てしまった！みたいな顔をしてるがなんなん
だ？千冬は後ろを向いてるから顔が見えん。

「まあ、ともかく。春君は預かるから。ボクの大事な子達にも会わ
せたいし……。それに秋ちゃん、君とあの子達と一緒にいるために
してるんだ。春君もそれに賛成してるから」

「なじみさん……。でも長い間会ってなかったのに仲良くでき
るか……」

「大丈夫。二人は君を嫌ったりなんかしないよ。むしろ春君の過去
を聞きたがるだろうから意外と気が合うかもよ？」

秋枝と姐さんが話し合うなか、俺はどうするか考えていた。

姐さんとロシアに行くならば間違いない、厄介な事になるのは目に見えてる。

それに、会わせたい子達ってまたなんかトラブルの匂いがプンプン匂うんだが？

それに英語もあまり喋れないし、ロシア語なんかも論外。

「うつふつふつふつふつ……じゃあ春君は借りるから。いいね？」

「……わかりました。千冬と一夏は私が預かります」

「っておいしい！？俺、いつの間にかロシア行きが決定してるんですけどお！？」

何をしたんだ姐さん！？何をしたら秋枝を買収できるんだよ！

「（うーん。なんかうまく乗せられた気もするけど……二人といられるならいいかな？兄さんには悪いけど）」

「じゃあ春君。秋ちゃんはおと四日もすれば退院できるそうだから退院するまで待とうか。それまではロシア行きはしないから」

「というか俺がロシア行きなのは確定なんすか！？」

「うん。今、更識家の本家はロシアにある支部で帝王学を学びながら鍛えているからね。その学んでいるのがボクの大事な子達なんだ

「よ」

「俺、関係無くね！？姐さんだけ行けばいいやん！」

渾身のツッコミをするが姐さんは胡散臭い笑いをしながら扇子を取り出し、聞こうともしなかった。

ああ・・・秋枝と姐さんが絡むとどうしてこうも俺にトラブルが振りかかるのだろうか。

どちらにせよ、もう俺はロシア行きは避けられそうにない。ならばもう腹を括るしかないな。

「えー！じゃあ父さんとはしばらく会えないのー！？」

「ああ。ごめんな？姐さんと行かなきゃいけなくなつてな・・・まあ、秋枝と話しな。お前の母親でもあるんだから甘えな」

取り敢えず一夏にそれを話し、二人を預けることにした。護衛もつけるから心配はないが・・・不安すぎる。

「やつぱり行かないっていうのh」駄目「・・・はあ・・・やる気が出ない・・・」

綺麗さっぱりバツサリと断った姐さんはナースの女性となんか話してた。

入院費やら治療費は全てこちらで払います？さらには自宅療治をするから退院させる？

・・・ってか姐さん。あんた、退院するまで待とうかって言わなかったか？相変わらずフリーダムな人だな。

「ロシア名物ってなんかあったかな？」

「さあ？私は知らないが・・・」

「てめーら覚えてる。お土産は生きた白熊とリアルバトルマッチにしてやるう。嬉しいだろ？」

「すみませんでしたお父様！できたら無事に帰ってきていただけると嬉しいです！」

うむ。ではお土産は生きた白熊じゃなくて狼にしてやるう。前に親父に連れられて行ったときに見かけたから大丈夫だろ。

「秋枝、退院したら俺と親父が最後に暮らした家に行け。俺達は今、そこに住んでるからな」

「わかったわ兄さん。何から何までありがとうね」

「気にするな。さつきも言ったがお前の苦しみに気づいてやれなかった償いだ。あとはないか・・・取り敢えず大和と響には顔を出しとけ。心配してたからな」

「大和君にひーちゃんが？」

・・・といふかなんで秋枝は響をひーちゃんって呼ぶかわからん。
束みたいだな。

「親父の部屋にお前宛の手紙があるからそれも読んどけよ」

「お父さんが？」

俺宛にもあつたけど延々とガキ扱いするし、孫の顔を見てから死に
たかつたとか書いてるから寂しさも紛れるわな。

後は大和、響、秋枝、なんでか姐さん、四季組全員宛に手紙があつ
たな。全部が全部、内容があれだから皆、顔をひきつらせていたな。
大和なんか親父が楽しみにしてたモンブラン食ったのバレて化けて
出てやるゝとか書かれてたしな・・・あれは地味に怖い。親父なら
できそうだから。

「春君、秋ちゃんの退院手続き終わったよ。帰ろうか」

「ウオイ！？またはっちゃけやがったな！」

なんか秋枝の退院許可が出たから秋枝も連れて家に帰ることにした。

・・・ってかなんで？

織斑春樹、三十八歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、七歳。

姐さんが理不尽だということを変更して思いs・・・え？ちよ、姐さん・・・アツ

!!

第二十話、親父（後書き）

禁断のおまけ

病院から出て……。

「……兄さん、私達って夫婦に見えるのかしら？」

「知らん」

ついさつき、駅から電車に乗る際にいたジジイに仲のいい夫婦ですなほっほっほ。みたいに言われた。

「えー。じゃあ父さんとこの母さん？は夫婦ってこと？ならいいじゃん！」

「い、一夏！」

「一夏あ！父さんの嫁は私だ！そこを間違えるんじゃない！」

「電車に乗ってんだから暴れんなポケエ！」

ギャーギャー騒ぐ三人に制裁を加えると、周りの乗客に謝る。あらあら仲がいいわねー。みたいな目をやめろ。ぬっ殺すぞ。

「というか兄妹なのに夫婦はないだろ。認めたくはないが俺と二人の血は繋がってないし」

「……………秋ちゃん、言っちゃえば？本当は春君の童貞は昔に喰われてることをさ」

「な、な、な、なんですとオオオオオオオオオオオオ！！」

「いやいや。姐さんの冗談だから乗せられるな千冬。なあ？あき・・・秋枝？」

なんか秋枝の様子がおかしい。

「あ、あ、あの、兄さん……………」

「なんだ？」

秋枝は意を決したように言う。
ある意味、最大の禁忌のワードを…………。

第二十一話、親父（前書き）

今回は

・春樹、ロシアの大地に立つ。なぜか天災も。

・未来の生徒会長一同との邂逅。

・春樹は実は頭が悪かった？

の三本立てでお送りします。

とつかか前回のおまけがすげー反響だなあ、おい！

近親相姦駄目だと思ってやったがまさかの肯定派が！！

マジ、迷う。

第二十一話、親父

・・・取り敢えずキラ君。君の台詞を使わせていただく。

「どうして俺は・・・こんなところに来てしまったんだろう・・・」

「はじめまして。更識家次期当主第一候補、更識櫛魯くしろうといいます
！」

「さ、更識簪かんざし・・・」

「更識家直系、更識家をサポートする布仏家、布仏虚うつつほと申します。
お嬢様、櫛魯の従者をしてます」

「同じく布仏本音ほんね！よろしく〜！」

「どうだい？この子達がボクの自慢の子達だよ・・・春君？」

「帰っていい？寒いもん。俺が寒いのが苦手なの姐さんは知ってるで
しょ」

「は、はははは、はーくん！さ、寒いよー！」

姐さんの死の宣告により、俺はロシアに来ている。

更識家支部で姐さんの自慢の子達と自己紹介したんだが・・・。

寒い。雪が吹き荒れてブリザードになってるもん。

取り敢えず中に入れて。なんか体が暖まるもんくれ。

できたらシチューかなんかがいい・・・え？晩飯まで待て？鬼畜め！

「あー、はーくん・・・なんかお花畑が見えてきた〜」

「戻ってこい東エエエエエエエエ！！」

そしてなぜか自称天才（天災）の篠ノ之東までついてきた。

姐さんがISの開発者だから俺にISの基礎理論、構造に使い方を覚えさせるために無理矢理（東は狂喜乱舞してたが）連れてきたよ
うだ。

寒さにやられ、虚ろな目をする束をビンタしまくって生還させると
姐さんの案内により更識家支部に入る。

「へー。お兄さんってお姉様と知り合いなんですか〜」

「昔からの付き合いでな。俺が小さい頃からなにかと世話を焼いて
くれた俺の恩人みたいなもんだな」

「・・・それよりなじみさんっていくつなの？はーくんが小さい頃

から交流があるなら四十は越えて・・・ヒイ!？」

シユシユシユ、ドガガガガッ!!

束の顔の横をなんかクナイが通り過ぎて後ろの壁にザツクリ刺さってる・・・。

全員がそちらを見るとないすなえがおをした姐さん（ただし、目は絶対零度）が手にクナイを構えてた。

「・・・束ちゃん？女性に年齢の話は・・・ダメダゼ？」

「!!（コクコクコクコク!）」

「じゃあ行くうか。春君はその子達としばらく暮らしてもらって、束ちゃんからISについて学びながら四人を鍛えてもらえると嬉しいな」

「え？姐さんはどうするんすか？」

「ボクは久々に本家に戻ってきたから挨拶をしなきゃいけないの。後はサミットの手配だね、春君はISについて発表しなきゃならぬんだから。ね？」

「・・・なんかやだなー」

絶対に自分の利益しか考えない馬鹿しかいないだろうし、腹の探り

合いは得意じゃないんだけどなあ……。

「大丈夫。そこもボクが教えるから」

「ナチュラルに心を読むのをやめてください姐さん」

「顔に出やすいんだよ君は」

「……そうか？俺はポーカークフェイスだと思っただが？」

「家族といるときは感情は露にするんだが……姐さんだからということにしよう。」

「それで姐さん。なんで俺はこの子達と一緒に暮らさなきゃなんないの？」

「言ったでしょ？君と暮らしながら鍛えてほしいって。男性と触れ合う機会もなかったからいいかな？って」

「………あんた楽しんでるだろ……」

「嫌だなあ。ボクはロリなこの子達と暮らす君を見て楽しもうだなって思っただけだよ？」

「本音を漏らしやがった！しかもなんて悪質な！」

「呼んだ？」

「いや、お前じゃないから本音」

ダボダボの服を着ている本音をペシッと叩くとポケットの中になぜかあったキャンディーをプレゼントした。
ちなみにレアのクリームパフェ味。前に大和からの土産でうばっ・げぶん！もらったものだ。

「わーい！ありがとはっきー！」

「・・・なんだそれ？なんかの呪文か？」

「はっきーははっきーだよー。春樹から取ってはっきーだよー」

「なんと・・・！束もそうだがなぜ年上に敬意を払わないんだ!？」

「あ、それはお兄さんが親しみやすいからじゃない？なんかはじめて会ったのにずっといたような感覚があるからね」

「う、うん。私も、そう思う・・・」

「・・・なんか出てんのか俺は？癒しマイナスイオンみたいなのが
出てんのか？」

話しかけられたため、なぜか背中ではソメソ泣きながらしがみつくと束をあやしなから四人と会話をする。
さつきから櫛魯と本音は積極的なんだが虚と簪は来ないな。

虚はなんだ？櫛魯を先に喋らせて自分は後でいいみたいなの？
簪は言わずもがな、怯えてやがる。俺、怖いのか？

「（本当は春君と会わせてリラックスさせつつ、春君の生き様を知ってほしいからなんだけどね。彼の空気は万人問わずに影響を与える。だからこそ、ボクは惚れたんだよ春君・・・）」

「え？次期更識楯無は君に決まったのか？」

「ええ。まあ・・・他の候補者が全員暗殺されたり、除外されたりしたから自動的に私になったみたいですよ」

「・・・まだ若いのにな・・・なんか力を借りたいときは言いなよ。できることならなんでもやるよ」

「本当？なんか嬉しいな。ほら、かんちゃんも話さないよ」

「え、あ、あう・・・」

「慣れてないなら慣らせばいいから。無理して話さなくていいから。な？」

簪はまだ怯えてるがしゃがんで目線を合わせると手を握って安心させる。

昔から子供相手にやってたから効果は期待できる。一夏もこれをされるポカポカする！みたいに言ってたし。

「あ……（暖かい……なんか安心するな……）」

「むー！はーくん、束さんを見視しないでよー！」

「いだだだだだ！髪を引っ張るな！」

簪とポワポワ？してると背中にセミよろしく、へばりつく束が嫉妬（なのか？）してポニーテールにした髪を後ろに引っ張った。

というか懐かしいなこの感覚！一夏が小さい頃にやられてたの思い出したわ！

「じゃあ、かんちゃん（簪）にのんちゃん（本音）、うーちゃん（虚）は部屋に戻りなさい。くー……もう楯無でいいか。たっちゃん（櫛魯）は春君と束ちゃんと一緒に用意した部屋に行っってね？」

「はーい！」 本音

「かしこまりました前当主」 虚

「は、はい」 簪

「了解です！さ、お兄さん、こっちこっち！」 櫛魯こと楯無

……なんて纏まりの良さ……幼稚園みたいなノリでよく纏まるな姐さん。

それとはかく。櫛魯、楯無に案内され、真新しい部屋に入れられ

ると軽く説明を受けた。

「今日からここがお兄さん達が暮らしてもらう部屋になります。一応、トイレとか風呂とかキッチンとか冷蔵庫はありますが、何か足りないものがあれば私に言ってください」

「カンペ見なければ完璧なのにな」

「い、いいじゃないですか！お姉様がこう言えって……！」

「はいはいよく頑張りまぢゅたね」

子供扱いやめてくださいー！と叫ぶくし……もう楯無でいいや。楯無の頭を撫でると顔を真っ赤にしながら俯いた。

「……ちっ、はーくんのフラグ製造器は衰え知らずか……」

「ん？どうしたよ束？」

「ううん。なんでもないよー！それより束さんも撫でて撫でてー！」

「はいはい。お前も千冬と同じで甘えん坊だな」

いつでも元気な束の紫の長髪を撫でるように頭を触ると嬉しそうに頭を押し付けてきた。

・・・なんか猫みたい。取り敢えず撫でとこうか。

束は頭が元々いいため、学校は行かなくても大丈夫なのだが、千冬と同じ学校なら行くー！と言う束は推薦をすっ飛ばして脅迫により、入学が確定されてたりする。

柳韻と頭を下げに行ったのは苦すぎる思い出である。

まあ、束は普通に推薦試験を満点（理系のみ。文系は普通）で突破し、晴れて千冬と同じ学校に堂々と行くのだ。

ま。それでロシア行きが許可され・・・あれ？柳韻から何も聞いてないけど大丈夫なのか？

「じゃあさっそく束さんによる、束さんのための、はーくんに教えようIS理論を始めるね！」

「わー」パチパチ

楯無は退室し、部屋には俺と束しかいないため、IS理論について学ぶことにした。

俺は棒読みでやる気のない拍手を送ると束はプクーツと頬を膨らませて私、怒ってますみたいいなポーズをしていた。

「むっ！はーくん、しっかり聞いてよっ！」

「はいはい」

「むう・・・まあ、いつかはーくと二人きりなら・・・ぐふへ

へへ・・・」

「親父直伝教育的指導、愛が溢れる鉄拳制裁」!

ガッソン!

「きゃぴ!?!」

「いいから早くするぞ。IS発表世界会議まで二週間もないんだ、時間が惜しい」

涎をたらしながら目を血走らせる束に拳骨を落とすと先を促すように言う。

姐さんによれば世界会議まで二週間、場所はジュネーブらしく、発表するのはなぜか俺。

最初は響か姐さんがやる予定なんだが、響はめんどくさいとパス、姐さんは知るかボケみたいに言っつて拒否した。

「じゃあまず・・・」

つてなわけで束の束による束のためのIS理論講座開始。

まずはISの核となるISコアの説明から入り、それを基盤としたIS装甲やフレームなど、さらには反重力ユニットも説明を受けた。

「……改めて思うんだがISって物理的インフィニットストラトス法則？なにそれ食えんの？
ってノリで常識をぶち壊してるよな。」

「ふむふむ……じゃあISコア同士には独自のネットワークがあるんだな？」

「うん。盗聴も妨害もされないような特別製なんだよ！後はね、コアにはISの設計図のデータも入ってるんだ。七重のセキュリティにパスワードでロックを掛けて普通のやつじゃわからないようにしたんだよ！」

「……それはラッキーだな。ISコアを複製されなければ戦争が起きてても被害は食い止められそうだ……ところでISコアはいくつある？」

「コアとして完成した（……）のなら全部で467個だね。基礎フレームはまだないけど」

「意外と多いな……後はなぜISは女性にしか反応しない？それならばなぜ俺には反応を示した？」

「んー……わかんない！師匠と一緒に調べてるんだけどわかんないことだらけだよ（……実は半分だけ……はーくんはーくんに反応を示した理由はわかってるんだけどね……たぶんいっくんも反応を示すかもしれないかもね（）」

んー、ISコアの特性とコアネットワーク、ISにあるハイパーセンサーやら絶対防御、武装粒子化についてだけ話すか……。

さすがにISコアの設計図は教えられないな。間違いなく完成させた国が戦争を起こすかもだからな。

そして女性にしか反応しない事が一番の問題だな。

信じられない奴がISコアの設計図を開示しろと迫るかもしれんし、下手すればそれだけで戦争の火種になる。

「ま。女性にしか反応しないといっても適正がなければ満足にISを動かせないけどね。ちーちゃんは私が調べた中では最高のSランクだったし」

「ふーん。だからあんなに動けたのか・・・納得したわ」

「（・・・そして父親であるはーくんのIS適正ランクはEX（測定不能）・・・はーくんはISの“鍵”となる人物。それだけでISの価値観は正反対のように変わる・・・見方によっては世界に狙われるISよりも貴重な存在・・・なんとしても守らないと）私が守られたように、今度は私がはーくんを守る・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「ううん、なんでもないよー！ほらほら、東さんのIS理論講座を続けるよー！」

「ヨロシクタバネセンサー」

「棒読みだよはーくん！しっかり聞いてよね！」

それからIS理論について延々と聞かされ、しばらく(だいぶ?)
学業から離れていた俺の頭はオーバーヒートを起こした。

ぐあー。頭が痛いー。

元々、学生だった頃も記憶力も並辺りだったため、覚えるのにな
り苦労はした。

なのにIS理論?理系の応用みたいなので、できるわけねーだろ。俺
は文系だぞ?

「シノノセンサー、シンデイイデスカー」

「だからISは宇宙活動が・・・え?わきゃー!?はーくんの頭か
ら煙がー!はーくー!ーん!」

結果、頭がパーンみたいになり、プスプスと煙が頭から出てるわけ
である。

苦労感がパネエ。世界会議サミット終わったら脳ミソ溶けてんじや
ねーのか俺は?

というかなんでISコアの設計図が日本語?英語にしなきゃ他の方
々がわかんねーだろ。

前に親父に連れられて行ったアメリカの経験を生かしてISコアの
整備やら構造やらの文字を英語に直そうとしたんだが・・・。

「あっはっはっはー!東さん特製ISコアだから英語には直せない

のだー！うわっはっはひい！？」

「脳ミソブチマケロ」

「ニヤアアアアアアアアアアアア！？はーくんの力が限界突破して
るニエアアアアアア！？」

久しぶりに使うパソコンに苦勞してると束バカがそんなことを言いやが
った。

必死にコアの日本語を英語に直そうとした俺の苦勞、返せ。

ギリギリギリギリギリギリッ！！

「痛い痛い痛い痛い！頭が割れるよはーくん！天才の束さんの
脳が割れちゃっ！」

「残念。脳ミソは右脳と左脳があるから片方が潰れても問題はない。
・・・というわけでシネ」

「みやああああああああああああああああ！！」

メシメシッ・・・ゴキユッ！

更識家ロシア支部の一日は東の絶叫で締め括られたとき。

織斑春樹、三十八歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、七歳。

ロシアは寒い。まる。

その頃の娘と息子は・・・

・千冬の場合

「なん・・・だと・・・？私は行けないのになぜ東はロシアにいるのだ!？」

『えへへへ。なじみさんに頼まれてはーくんにISを教えるためだよ。今ははーくんと一緒に寝てるよ』

「なに!?!東と父さんが一緒に寝てるだと!?!
ま、まマママ、まさかやったのか!?!」

『んー。正確には机に突っ伏して寝てるんだよねはーくん。頭から煙が噴き出してるもん』

「そうか。ならばいい・・・ダガトウサンニテヲダシタラコロスゾ」

『ひい!?!なんか電話なのにちーちゃんの殺気がビンビン感じるよ』
『!』

「時折、父さんの写真を送れ。さもないと貴様の部屋にある父さんの部屋から盗んだ服を全ていただくぞ」

『そ、それだけは勘弁を!』

取り敢えず電話は切った。父さんに手を出したら文字通り、束を真っ二つにしてやる。

「む。夕飯の時間が・・・母さん、ご飯は・・・」

「・・・ガハッ」

「一夏アアアアアアアアアアッ!？」

リビングに入るとテーブルの上で一夏が痙攣しながら箸を持っていた。

「おい一夏!??どうしたんだ!？」

「ち、千冬姉より・・・酷い。ガクッ」

「いち・・・ん?これは・・・オムライスか?いや、ならなぜ箸を・・・」

「あ、千冬。千冬にも作っただけど食べる?オム焼きそばなんだけど・・・」

「ば、馬鹿な・・・これがオム焼きそば?父さんのとまるで違っじゃないか!？」

見た目は普通なのだが何かが違うと私の直感が告げている！

「さ。食べて？」

『あ。そうそう。秋枝のメシは食うなよ？あれは料理と名だけの大量殺戮化学兵器だからな』

・・・ああ、父さんの言ってた理由がわかったよ・・・。

「う、うわあああああああああ！！」

父さん・・・最後に貴方に会いたかった・・・。

B A D E N D

「・・・む！千冬から電波か！？」

親父はそれを感じたようだ。

ちなみに、二人は病院に運ばれ、治療されましたとさ。ちゃんちゃ
ん。

第二十一話、親父（後書き）

おまけ

その頃の更識家は……。

「あの人がお姉様の思い人の春樹さんか。なんかカツコよくて優しい人だったわね」

「だね。はつきりは優しかったよ。かんちゃんも手を握られて嬉しそうだったし！」

「ほ、本音！」

「本音。簪様が慌てるだろう。やめなさい」

「てひひ。ちょっとした冗談だよお姉ちゃん」

「んー、私、あの人なら結婚していいかなー？人柄もいいし」

「……お嬢様、それは前当主と戦うということですか？」

「う……さすがにお姉様とはやりあいたくないわ……」

「け、結婚……お姉ちゃん、話が、飛びすぎ……」

「……姉妹井ならいいかしら？」

結論。春樹はリア充野郎である。

姐さんは更識家でも絶対暴君のような立場らしい。

「・・・ほほう・・・なら死ぬかい？」

え？じ、冗談だよ！冗談だから！

「死になさい」

そのネジは・・・なぜケツに構え」

アッ

！！

作者が掘られたようです。ちゃんちゃんWWW

第二十二話、親父（前書き）

今回は

- ・世界会議開始。春樹の胃がストレスでマツハ。
 - ・春樹、（貞操を）世界に狙われる。
 - ・四季組の過去の因縁の影。
- の三本立てでお送りします。

お気に入りが入りが4000近いのは嬉しい！

あ。アンケートはまだまだ募集してます。

感想返せなくてすみません。普通に返信してもメッセージで文句言われ、自重してます。

第二十二話、親父

本日は憎らしいほどの晴天なり。

俺こと織斑家大黒柱の織斑春樹は現在……。

「じゃ、春君頑張つてね」

「うわ……めっちゃ緊張する……こんなの前にやった知り合いの結婚式にやったスピーチの緊張感と比べもんにならねえ……」

「大丈夫だよはーくん！東さんもいるから。ね！」

世界会議サミットの会場、ジュネーブにいる。

もうここには各国からお偉いさん方が来て着席して待っていた。雑談をしているようだがチラチラと俺達と日本代表の外交官を見ているな。

というか日本から送られた外交官、顔を真っ青にしてガタガタ震えてるけど大丈夫か？

「大丈夫？水でも飲んだら？」

「だ、だだだ、大丈夫です」

「駄目だこりゃ・・・すみませんが今日は座ってくれてるだけでいいです。説明は我々がしますので・・・」

今回は異例の会場内部に全世界からマスコミが来ており、カメラの準備をしている。

これもまた、姐さんの手配であり、全世界に知らせることでISを出し抜いて手に入れようとする者を牽制するためにしたらしい。

最初はアメリカ、日本、中国がISの存在を知り、それから情報規制で漏れないようにしたようで姐さんが準備するまで他の国は知らなかったようだ。

というかなんでこんな時だけ漏洩が少ない結果になる？いつもこんな風に仕事しやがれよ。

「はーくん？準備はできたよ。後は流すだけでオッケー！」

「でかした束。だが本当にいいのか？IS開発者の名前をお前にして？今ならまだ響にすることはできるぞ？」

「大丈夫！はーくんがいるからなんとかなるよ！」

「人任せか！」

なんかしんみりとしたがやはり束は束。全部俺任せにしやがった。

ま。いいけどね。柳韻から頼まれてる以上、俺は束の味方である。約束もしたしな。世界を敵に回しても守ってやるって・・・これ、

告白じゃね？

「早く終わらせて帰ろう。久しぶりに千冬達の顔が見たい」

かれこれ、更識家ロシア支部に来てから二週間は経つから顔をそれと同じくらい見てないのだ。
たまに電話で話したが秋枝の大量殺戮^{てりやうりつ}化学兵器に殺られて死にかけてるのは知ってる。というか知ってしまった。

早く帰らねば。二人の尊い命が星になってしまう。

『それでは世界会議を始めます。今回の議題は巷に噂されている新型兵器についてです。日本代表の織斑氏より発表していただきます』
きた。覚悟を決めてやりますか。

「頑張つてね春君」

「ガンバだよはーくん！」

「……逝ってきます……」

字が違うとかツッコミはなしだ。

壇上に上がり、全員が見えるように顔を上げるとカメラもまた、俺の顔を捉える……が。

「（うつ……なんか舐め回すような視線を感じるぞ……俺は男だ！そつちには興味はない！！）」

実際には男性ではなく、女性の大半が春樹を舐め回すような視線を送ってるのだが。

鈍感な春樹は自分の容姿は普通よりはいいと思っているため、気付かない様子である。

「あー、こほん……これより僭越ながら私、織斑春樹が新型マルチフォームスーツについて説明させていただきます」

束に合図を出すと束がパソコンを操作してでかいモニターにそれを映し出した。

「宇宙活動を想定したまったく新しいマルチフォームスーツ、我々インフュニットストラトスはISと名付けました」

モニターに映る束が最初に開発したIS、千冬専用の“白騎士”を説明しながらISがなんたるかを詳しく説明した。

案の定、感嘆の息を洩らす者が多く、さらには邪な感情を持つ者もいた。

やはりこうなるか・・・東のインフィニットストラトスは宇宙活動を想定したマルチフォームスーツなのに兵器として使えないか考える奴はいるみたいだ。

「ISにはシールドエネルギーと呼ばれるものがあり、それは戦艦の主砲にも耐えうるものだと実験にて判明しています。さらに、シールドエネルギーが無くなれば操縦者の命の安全のために絶対防衛が発動し、ミサイルにも」

・・・そろそろか。

「（東。もういいぞ。プロジェクターを切れ）」

「（ほいほい!）」

「・・・非常に申し上げにくいのですが・・・ISにはある重大な欠点があります」

『それはなんですか？ミスター織斑』

プロジェクターを切ると原稿も畳み、ある重大な欠点、つまりは女性にしか使えない点を言おうとする。フランス代表と書かれた場所にいる男性が手を挙げて聞いてくるがまず、姐さんに通訳を頼んで聞いた。

「はい。重大な欠点とは・・・」

「このISの要となるISCコアが女性にしか反応しない事です。反応を示さないのならISは絶対に使えません」

ザワワワツ！

『馬鹿な！あれだけの兵器が女性にしか反応しないだど！？』

『むう！これでは我が国のアドバンテージが・・・』

『どうせ使えないように嘘をついてるんだろ！』

『そつだそつだ！』

・・・あー、うるさつ。だからこんな自分の利益しか考えないバカは嫌いなんだ・・・。

黙らせるためにさらに実演することにし、うちの研究施設“春夏秋冬”のスタッフによるIS起動を見せることにした。
あらかじめ、姐さんが手配した更識家の女性数名、会場にいる軍人護衛数名に触らせることになった。

まあ、結果は軍人護衛男性数名は沈黙、女性には反応し、ISを纏うってのが出た。

「おわかりいただけましたか？本当はなぜ男性には反応しないのか調べてから発表したかったのですが、何処その誰かさんが発表を強要したため、そんな暇はありませんでしたが・・・」

ジトツとアメリカ代表、中国代表、そして別の日本代表を見ると気まずそうにするのではなく、逆ギレをした。騒ぐ三国の代表は警備員に強制退去になり、残った各国代表にさらに提案をすることにした。

提案は俺達、四季組の会社のIS開発の黙認（姐さんによる脅迫）、さらには開発者である篠ノ之束の完全なる保護により、狙うことをやめさせるようにした。

それらにより、ISコアを対価に渡すことになり、467個のコアの大半は世界に散らばることになった。

さらに、ISコアの設計図の一部解放、IS一体は作れるようにもしておいた。

「さらに私は提案したいのですが・・・IS操縦者の育成及びに保護をする新しい学園の創設はいかがでしょう？」

これはまだISを知らない人達を教えるためとISの操縦の仕方や整備なども教えなければならぬため、学園の創設も提案した。

驚いたことにポンポンと学園の創設は賛成を得、新しく“IS学園”の創設が決まった。

それにより、IS学園の校則、そして不可侵の条約を結ぶことになった。

これが後の世に伝わる“アラスカ条約”である。

世界会議終了

「あー！疲れた！」

「お疲れ春君。なかなかいいスピーチだったよ」

「うんうん！東さんもまた惚れ直しそうだよ！」

「任せなよ」

予想通り、このリムジンに近付く黒いバンが見える。

おそらくはどっかの国に雇われたかISを狙うテロリストかなにか
だろうな。

「よっと・・・取り敢えず潰れてろ」

リムジンから降りるとそのまま走るバンに取り付いてパンチで穴を
開けた。

中には覆面をした男がいたがもれなく、全員ぶん殴って眠っていた
だった。

さて。これで・・・ってまだいるのか・・・。

「お。これ麻酔銃じゃん」

潰したバンの中からは麻酔銃やら拳銃などがわんさか出てきた。

どんだけ用意がいいんだ・・・麻酔銃以外に拳銃とか持ち出して誘
拐とか物騒すぎ。

ぶつ殺してもいいが裏にいる奴がいないかを確かめる必要があるか
ら眠らせるか。

ちよつと麻酔銃もあるから時間は掛からんだろうし。

「ヤッホオオオオオオオ!!」

「な、なんなんだこいつ!?!ただの優男じゃないのか!?!」

「いいから黙って寝てやがれアホがあ!!」

近くに潜んでたいかにもテロリストです。捕まえてね みたいな格好をする奴等を片っ端から叩きのめしていく。防弾チョッキとか生意気な奴もいたが腹パンで貫通させて気絶させまくった。

人類最強の異名を持つ俺にただのテロリストが敵うはずはなく、五分で全滅し、一人だけを首持って尋問する。

「さて・・・誰から雇われた? 答えれば命だけは助けてやるよ」

ギリギリギリギリギリッ!

「ぐうつ! だ、誰が答えるか!」

「ふーん。なら死んでもいいんだな?」

さらに力を強めると苦しそうにするが落ちるか落ちないか微妙なラインで手加減をしながら首を絞める。

んー、殺したら殺したでまたうるさい奴等が出るから殺りたくはないんだがな……。

それからじつくりと尋問をしているとテロリスト側が折れ、話し始めた。

「お、俺達は知らない女に雇われたんだ！今回のサミットで篠ノ之束を誘拐しろって……！」

「他には？」

「か、可能ならあなたの始末も頼まれたんだ！ちくしょう！なんでこんな奴がいるんだ……」

「……女、ねえ……」

「そ、そうだ！あなたに伝言がある！女からだ！」

「へー……なに？」

「『貴方の父君が死んでからは自由に動けるようになったわ。大戦の時には随分邪魔されたけど貴方はどうかしら？』って伝えるって……！」

なんだと？親父を知ってるのか？

いや、待て。大戦、これは親父が生きていたから第二次世界大戦の時か……邪魔、自由に動ける……まさか！？

「大戦の亡霊か……！おい！他には？他にはなにか言っていたか！」

「そ、それは……」

タアアア……ン

「っ！？しまった！狙撃か！」

さらに情報を得ようと問い詰めるとテロリストの男の額に頭が開き、周りを見渡す。

しまった……油断して狙撃を許してしまったか……！

だがまずは一人でも情報源を確保せねば！

「ちっ！まさかサミット直後に大胆なことをするとはな！とにかく早く……殺気！？まだ来るのか！」

テロリストの一人を掴んで離脱しようとするところからか殺気を感じ、急いでその場から離れる。

途端、立っていた場所が爆発を起こし、あらゆるモノを焼き尽くした。

「・・・つぶはあつ！！死ぬとこだった！」

爆発に巻き込まれたが咄嗟に防御をしたため、着ていたスーツが焼かれるだけで済んだ。

あぶねえ・・・氣を使つてなかったら火傷を負つてたな。

元の形を無くしたスーツの上着を脱いで爆発した場所を調べてみた。

「・・・あー、駄目か・・・全員やられてやがる」

生存者はゼロ。爆発に巻き込まれてあの世行きだった。

・・・この手口は奴等か・・・取り敢えず姐さんに話さないと。

「できたら大人しく潰れていて欲しかったんだがねえ・・・」

そうボヤきながらその場を後にした。

ついでに姐さんに電話して後始末をする奴を寄越してもらった。

キングクリームゾン！ーリムジンまで翔んでいった過程は飛ばされる！

「つてなわけです。狙いはやはり束でした」

「あらら・・・予想はしてたけどかなり酷い方向にいったね・・・」

「はーくん大丈夫？服がボロボロだけど」

「やられたのは服だけで体自体にはダメージはないから安心しろ」

空中の空気を蹴りながら姐さん達のいるリムジンに戻ると早速、姐さんに報告する。

なんか帰り方がおかしくね？みたいなツツコミはなしだ。

「あっちゃー・・・それは間違いないのかい春君？」

「はい。その可能性が高いですね。まだ決まったわけではありませんせんが・・・」

俺・・・いや、姐さんと親父が長年の間にただならぬ妙な関係を持つ世界の闇が凝縮したような組織。

俺も戦ったことがあるが無視できない力を持っている。

奴等は昔から存在し、大戦のたびにその影をちらつかせる。親父もまた、奴等に対抗したため、日本は親父がいても第二次世界大戦に敗れた。

「狙いは間違いなく・・・」

「うん。大方、束ちゃんのインフィニットストラトスだろうね。あれ一機で軍隊と戦えるから」

「んー、よくわかんない！はーくん、どうゆこと？」

・・・あ。東は知らないのか。まだ生まれてないし、存在自体があまり知られてないんだった。

「・・・東、お前はある奴等に狙われてる」

「？」

「大戦の亡霊と呼ばれる俺の親父が手を焼いた秘密組織・・・」

ファントム・タスク
亡国機業だ。

織斑春樹、三十八歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、七歳。

しばらくはまだ帰れなさそう。まる。

その頃の娘と息子は・・・

「・・・父さん、堂々としていたな」

「やっぱり兄さんには緊張感はあり得ないわね。でもこれからが大変よ」

「・・・男尊女卑の反対、女尊男卑の時代が始まる・・・」

全世界放送のサミットの一部を見て私と母さんはため息をついた。父さんが色々していたが止められそうにはなさそうだ。

それにISS学園か・・・私は高校に行くのが決まってるから行くことはなさそうだ。

「千冬。今から兄さんは忙しくなるわ。貴女はどうするの?」

「無論、父さんを支えるつもり。そのために強くならないと」

母さんのありがたいアドバイスにより、私は父さん好みに性格を変えていくことにした。

まずは露骨なファザコンは見せないように、くーるびゅーてぃーを
目指すつもりだ。

・・・道はまだまだ長そうだな。

「母さんー、千冬姉ー、ご飯ができたよー!」

「今行く」

まずは腹ごしらえだな。腹が減っては【閲覧規制】はできぬと言っ
からな。

春樹なき織斑家を支えるは織斑一夏。

料理や家事が壊滅的な母と姉の代わりに一夏は主夫となる……。。

「私は料理ができないのではない。しなただけだ」

「私もよ」

「……大丈夫二人とも？」

一夏は凍えたような視線を母と姉に向けていた。

取り敢えず父さん……。かむばつく!!!（一夏の切実な願い）

第二十二話、親父（後書き）

おまけ

とある場所にて。

「うふふふ・・・前よりも凛々しくなっただわね・・・私好みだわ」

そこには絶世の美女と言える容姿を持つ女性が写真を眺めてうつと
りしていた。

写真には春樹が写り、誰かと話してるのか、楽しそうに笑う姿があ
った。

「はぁ・・・昔は霸王にしてやられたらしいけど今ならこの人を手
に入れられそうだわ・・・」

「・・・なあ　　。私じゃ物足りないのか？だからこんな男が
欲しいのか？」

「うふふふ。　　、大丈夫よ。私は貴女もこの人も愛してるの
・・・こんな罪深い私で失望した？」

「そ、そんなことはない！そんな　　も私は受け入れるよ！」

「そう・・・ありがとう　　。愛してるわ・・・そして貴方も

ね

織斑春樹？

そう言つと女性の写真の春樹をいやらしく舐めるのであった。

「……！？な、なんかやばい奴にまた狙われる気が……！」

「ほらほらはーくん！続きを読んでー！」

「あ、ああ。わかった・・・」

その頃、春樹は得たいの知れない悪寒に襲われていたとき。

おわれ。

第二十三話、親父（前書き）

今回は

・アラスカ条約結ばれ、春樹の胃がダメージマックス。胃薬が友達に。

・春樹、違和感に気付く。

・ミサイルが発射され、春樹が倒れ、千冬が飛翔^とぶ。

の三本立てでお送りします。

なんか無理矢理な展開ですが、春樹の鈍感を治す+いかにバグなのかを書きたいのでこうします。

第二十三話、親父

本日は雪が吹雪く天候。

現在、俺はなぜかアラスカの第二回世界会議の会場にいる。
なんかアラスカ条約を結ぶから来いや若造。みたいに呼ばれたのである。

ISを発表したせいでまた面倒な事になったもんだ……。

「あー、頭が痛い……」

「お兄さん大丈夫？どこかで休もうか？」

「ん、大丈夫だから早く帰ろう。姐さんも急かすし」

「そうですね。ならタクシーを拾いましょうか」

あとなんでか知らんが更識楯無も同行してアラスカから離れたアメリカにいます。
姐さんはもう日本に帰る準備をしており、楯無はその迎えに来ているのである。

「いやー！なんか早く終わったねはーくん！」

「ああ・・・お前がコアを全停止させるだなんて脅しを言わなきゃもっと早く終わったけどな・・・」

勿論、束もISの開発者として同行し、アラスカ条約が結ばれた場面にいた。

アラスカ条約が結ばれると同時に、提案していたIS学園創設についても様々な治外法権を入れたものを決定させ、今からIS学園建設を始める予定である。

IS学園特記条約はまたの機会に話そう。

IS学園創設に伴い、各国から留学生を受け入れることになり、俺もそれを選ばなければならなくなった。

まあ、ぶっちゃけ言えばIS学園の教師を選ぶのに手伝いやがれ。つてことである。

まず、ISは女性にしか使えない。

ならばIS学園には女子高生しかいないことになるから男性は極力選ばないようにしなければならない。

最初はISを教えるためになんてか知らんが俺自身が教師をやるはめになり、学年主任として教師を選べコノヤローってわけなのである。

くどいようだが何回も何回も言われたから頭にすっかりと残ってる。

「あ。タクシー来ましたよお兄さん」

「うー」

第一回世界会議からもう二ヶ月が経ち、季節はもう冬であり、クリスマスイブも近い。

そんな中、世間にはISの二文字が浸透し、ISに乗ってみたいと志願するものが爆発的に増えてるのである（どっかの国の代表さん情報。ありがとうハゲオヤジ）。

最初は男性も志願したようだが、適正テストにて反応を示さず、諦めるものが多々。

それにより、反応する女性が待遇されるようになり、世間は男尊女卑から女尊男卑へと移り変わっていた。

「さて。千冬にメール・・・うわ・・・」

「うわぁ・・・またお見合いとか引き抜きのメールが多いですね」

そう。ISを発表した俺は開発者である篠ノ之束と親密な関係であるため、日本国籍から他国籍になるように引き抜きが来たり、結婚して甘い汁をもらおうとする奴等からしつこい勧誘が来てるのだ。というかなんでお見合いの中には千冬と同年かそれ以下の奴がいる？俺はロリコンじゃねーよハゲ。

後は親父が経営していた会社の後を継ぎ、WT社から四季グループへと改名した。

俺は四季グループ総帥。姐さんは社長として協力してくれるみたい。

・・・ちなみに。WTって“ウィンターツリー”、つまりは冬樹。親父の名前だったりする。

「んー・・・春夏秋冬からのメール・・・なんなん・・・」

GNDドライブ解析完了。複製できるぜ

「無論却下」

死ねバカヤローとメールを送るとお見合いやら引き抜きメールを全削除してからパソコンを閉じた。

うーむ・・・IS学園はどないすべきか・・・。

一応、高等学校なので学業も教えにやならんから教師もかなりいるな。

んー、まず最初の一年は各国から科学者と留学生を集めてIS理論について教えるか？

人数もかなり絞らないといけないし・・・教師にも授業の仕方を教えないと・・・。

「・・・あ、頭が痛い・・・ついでに胃もなんかキリキリしてきた・・・」

「わわっ！はーくん大丈夫!？」

「胃薬！胃薬はどこにあるの！？」

タクシーの後部座席で頭を押さえると束と楯無は慌て、束は頭を撫でる、楯無は俺のスーツケースから胃薬を探していた。
ああ・・・我が心友（胃薬）よ。我を癒しておくれ・・・。

「はいお兄さん！」

「助かる・・・」

胃薬を何錠か出してミネラルウォーターで飲むと少しだけマシになり、静かに息を吐く。

千冬の時から愛用はしていたがISが世に出てからは量が倍になってしまったのだ。

それにより、装備が増えたわけである。

・形見の指輪（親父と母さんの結婚指輪）

・ペンダント（千冬と一夏、俺の写真入り）

・なんかカッコいい黒サングラス

・携帯電話

・胃薬×99

みたいな感じに。RPGみたいに胃薬を使うとストレスが減ります的な。

上から効果を挙げると、『昔の思い出。忘れずに今を生きる
全ステータス向上』

『今を生きる家族との思い出　全ステータス向上、千冬と一夏
に危険が迫ると黒化』

『これを付ければみんな貴方にメロメロ!?　スキル“魅惑”』

『現代人には必要です』

『戦うサラリーマンの味方　ストレス回復』

「・・・はーくん、ゲームやりすぎだよ」

束がなんか言っているが無視無視。

ミネラルウォーターで喉を潤すと響からのメールを再び、開いて見る。

その内容は・・・。

俺のIS専用機の作製について。

正直、極めに極めたIS操縦者でなければいくらISといえども、俺は無傷で勝てる。

そして現在はまだIS操縦者はまだ出てきていない。なぜならコアからの情報を感じても知っても感覚だけで動かせるほど、ISは甘くない。

だからIS学園を創設するのだが、専用機はいらない。

響によれば、生半可なISでは俺は屈服させてしまうため、通常のISよりもさらに強化されたものでないと動かせないようだ。

一応、俺はISは使えるが使えない(･･････････)と矛盾した事になっている。

ISコアは屈服させてしまつとはいえ、反応はするので操縦できるのは間違いない。

「･･････････なんなんだこのスペックは････千冬が使ってた白

騎士より高性能じゃねえか・・・」

「あ、それは束さんも協力したから当たり前だよはーくん」

「・・・だとしてもGNドライブとかは無しだろうが。イケメソ君のクアンタのドライブを使うなんてな」

「・・・？はーくん、イケメソ君って・・・だれ？」

「・・・ん？」

「いやいやいやいや。束も知ってるだろ？ストーカーなイケメソ君だよ。」

「???」

「・・・お前、俺をからかってんのか？」

「えー!?し、知らないよはーくん！束さん、本当に知らないんだよ」

「・・・おかしい。束は嘘を言う性格じゃないし（春樹限定）、嘘をついてるようにも見えない。」

「あんだけしつこく迫ってたのに忘れるのはあり得ない。」

「どういうことだ？束は劣化・瞬間記憶能力、完全記憶能力を持ってゐるから忘れるのはまずない。」

まあ、束は興味がないものは意識的に除外してるから宝の持ち腐れだけだ。

・・・イケメソ君に会ってみるか。それからどうなのかを考えよう。

「・・・はい？春君、頭がイカれたのかい？」

「・・・え？」

姐さんと空港で合流してから聞いてみてもイケメソ君を知らないとか言った。

あれれれれれれ？姐さんは忘れないはずなのになぜ？

マジでおかしいぞ！記憶力ならば抜けてる二人があんな強烈なキヤラを忘れるはずはない！

ならクアンタ！クアンタを聞いてみたらイケメソ君思い出さる！

「・・・春君、病院行かないかい？」

「ダブルオークアンタならばーくんが見つつけて束さん達に渡したじやない」

「・・・はあ？」

姐さんと束によればイケメソ君のダブルオークアンタは俺がいつの間にか持ってきたと言っ。

といふかなにそれ？俺なら仕方がないみたいな空気やめてくれない？

そんな又ルツとした空気のまま、俺達（姐さん、束、楯無）は用意された自家用飛行機（姐さん名義）に乗った。

「（なんかおかしい。世界に一人だけ残されたような感覚がする）」

「どうしたんだい春君？さっきから難しい顔をして」

「あ、いや・・・」

いかんいかん。考えすぎて姐さんに怪訝そうな目で見られてる。

「最近忙しくて疲れてるのはわかるけど無理はしないように。いいね？春君」

「はあ・・・」

「それに束ちゃんの場合も大体は決まってるから大丈夫。だから春君はIS学園についてだけ考えなさい」

気遣ってるのかコキ使ってるのかよくわかりません姐さん。

束の件というのは束の身柄保護の事である。

束はISの開発者であり、現段階においてISコアを造れるただ一人の存在。

いくらアラスカ条約に守られるとはいえ、強行手段に出ないとは限らない。

だから、まずはIS学園の他者不可侵の特記条約を利用し、束をIS学園の生徒として三年間保護する。

その間に四季グループの立場を確固足るものにし、そこで卒業後に保護するといった具合である。

まあ・・・俺がいればISごときを使っても束は渡さんがな。

だが束がそれを嫌がり、姐さんのIS学園入学の提案を受け入れたというのが現在である。

「んー、でもIS学園か・・・はーくんがいるなら行くけどめんどくさそうだなあ・・・」

「いまさらそれが」

「だってだよ！IS学園に行くならたぶん全寮制だから（はーくん）家に帰れないし篝ちゃんにも会えないんだよ！？束さんに死ねって言ってるよはーくん！」

「取り敢えずヤバそうな発言はスルーするが外出許可書類を出せば出れるようにはする。その代わりに監視をつけるけどな。後は護衛」

「その護衛は彼等を？それとも？」

「あいつらに頼みます。なんでか知らんが四季組の女性って男性より強いですし・・・」

女性ならIS学園に入れても大丈夫だし、男性でも馬鹿以外を使えばいけるだろ。

『これより離陸します。シートベルトを締めてお座りください』

「お。終わったみたいだね。さあ、春君。家に帰ろうか？」

「なに俺の家を自分の家みたいに言ってんすか・・・楯無や簀、本音に虚はどうするんですか姐さん」

「ちっ、つれないね春君。少しだけ秋ちゃんと話せばロシアに帰るよ。まあ、たっちゃんは先に帰ってもらうけど」

「え？お姉様、お兄さんの家に泊まるんじゃない・・・」

やめれ。千冬が暴走するから。

もう長いこと会ってないから忘れてたりしてないよね？
薄情な親父だつて思われてないよね？
不安だ。不安すぎる！

「ないない。あれだけファザコンの二人だよ？春君に会ったらたぶん真っ先に抱きつくんじゃない？」

「ちーちゃんもいつくんもはーくん大好きだからねー」

突然鳴った警報が俺のせいみたいに三人は見るため、狼狽えたが、機長からそんな放送が入った。姐さんは椅子に備え付けられたボタンを押すと何かを呟いた。

「取り敢えず話してくれるかい？なにがあつたかを」

『はい！日本の羽田空港より伝達！』

次に発せられる機長の言葉に俺は今までにないくらい驚くことになる。

『今日未明、日本に向けてミサイルが発射されたようです！数は4000発です！』

「……………なんだと……………!?!?」

「確かなのかい?」

『はい!間違いないそうです!前方300?にミサイル群があるとのことです!』

「……………ちつ!日本に向けてミサイルだと?千冬や一夏に箒ちゃんが危ないだろ!

「おい!後部にあるハッチが影響が受けない扉はないか!?俺が迎撃する!」

全力で空を蹴れば日本に着く前にミサイルに追い付けるはずだ!初めての試みだが、あいつらの命がかかってる!なんとかしてミサイルを落とさねえと!

「待ちなさい春君!君にどうこうできるのかい!?!?」

「できなくてもやる!あいつらの命がかかってるだよ姐さん!」

「いいから落ち着きなさい春君!束ちゃん、ミサイルをハッキングで落とせるかい?」

「……………ん!大丈夫!今からハッキングすればなんとかなるかもしれない!でも飛行機でやっていいの?」

「いいからできるならやりなさい！下手すれば日本は滅亡するよ！」

「わ、わかった！はーくん、パソコン借りるね！」

束にパソコンを取られ、ハッキングをし始める束を見て俺も抑えられなくなり、外に続く非常ドアに走る。

「駄目だ！ま、待ちなさい春君！」

「いくら姐さんでも聞けません！俺は・・・俺はあいつらを守ると誓ったから！」

ドアに手をかけると異変は起きる。

「・・・？」

グツと力を入れてドアを開けようとするがビクともしない。片手が駄目なら両手で。と引っ張ってみるが結果は変わらず。

「春君・・・？」

姐さんが様子がおかしいことに気付いたのか、近付いてくるが俺は

さらにドアをガチャガチャ鳴らすように動かす。
だが、まったく動かさず、妙に体が気だるくなった。

なんだ……？力が入らない上に疲れる。今まではなかったのになぜだ……。

「くそっ！なら壊して……！」

腕を振りかぶってドアを殴ろうとするがガクツと体が急に糸が切れた人形のように床に崩れる。

「春君!？」

「お兄さん!どうしたんですか!？」

「あ……(声も出せない……何が……起きて……)」

そこから急激に意識は闇に沈み、血相を変えて駆け寄る姐さんと楯無が最後に見た光景だった。

織斑春樹、三十八歳。

織斑千冬、十五歳。

織斑一夏、七歳。

その頃の娘と息子は・・・

「なんだと！？それは本当なのか!？」

『間違いないよ！今も東さんがハッキングでミサイルを落としてるけど全部は無理!』

「なら父さんは!?!父さんなら真っ先に駆けつけるだろう!」

『・・・はーくんは倒れて目を覚まさないんだ・・・』

それを聞くと私は頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

『とにかく!今はミサイルをどうにかしないと!間に合わないからちーちゃんは避難をして!』

「……………いや。私は残る」

『ちーちゃん!?!』

「私がミサイルを迎撃する。父さんが動けないなら私がやるしかないだろう」

それに束からまだ白騎士は預かってるから可能なはずだ。

父さんが倒れた理由はまだ知らないが今は父さんの帰る日本を守らないと。

『……………わかったよちーちゃん。束さんがサポートするから』

「ああ、頼むぞ束」

現在、母さんと一夏は夕食と明日の父さんの帰国を祝う用に買い物に行っている。

家には私しかいないから見られないはず。

「……………いくぞ白騎士。お前の力を貸してくれ」

『後はちーちゃん。バイザーもつけるんだよ。さすがに顔までバレたらはーくんが心配する上にIS学園に無理矢理入れられるから』

「……………了解した」

白騎士を纏うと猛スピードで東の指定するポイントに飛翔させる。

父さん・・・今だけ力を貸してくれ！

第二十三話、親父（後書き）

おまけ

その頃の春樹は……。

「……そう、俺は……変革しようとしている」

白い空間にてネタを披露していた。

おわれ！

しなののほじきちゃんの口帯（空気になりかけているため）

「面っ！」

スッパアアアン！！

篠ノ之道場にて剣道を学んでいた。

「（・・・春樹さん、今度はいつ会えるかな？）」

・・・そして、恋する乙女でもあった。

姉である束から送られる春樹の写真を見てニヤニヤする姿はまさに姉と同じ変態であった。

おわりやがれ！

アンケート結果。

1：9

2：4

3：19

4：4

つてなりました。

他にもメッセージがあり、アンケートに協力してくれた方も合わせるともつとありますが、3の数がパネエツす。

つてなわけで3の一夏と簿の小学校入学式とらぶる？を書きたいと思いません。

落ち着いたら二百万アクセス記念番外編もやりますので・・・。

アンケート協力、ありがとうございました！

(メッセージも含むアンケート結果)

1：15

2
: 8

3
: 6
2

4
: 9

でした。なんでぶっさぎってんだ・・・。

第二十四話、娘（前書き）

今回は

- ・後の白騎士事件発生。千冬、ミサイル迎撃。
 - ・アンノウニス（ってか知ってる）がミサイルを一掃。
 - ・千冬はやっぱり千冬。一夏がグレル。
- の三本立てでお送りします。

第二十四話、娘

今日の天気は晴れ。

空はどこまでも見渡せるように晴れていた。

私はそんな空をISである白騎士を纏いながら飛翔させる。

『ちーちゃん。もうすぐミサイルが見えてくるよ』

「ああ。ハイパーセンサーで見える」

つい先程、東からの連絡で日本にミサイルが接近しているのがわかり、私はその迎撃に向かう。

父さんは原因不明の理由で倒れてしまい、私が代わりにISでミサイルを迎撃することになったのだ。

だが、私はまだISを完全に使いこなせるわけではないので不安は残るがやらねば日本は滅びる。

ならば私がやるしかないだろう。

「・・・ミサイル目視。これより迎撃行動に入る」

『わかったよ。ちーちゃんはミサイルの破壊だけに専念してね？ハッキングでできるだけ落とすから』

「ああ」

ISのコアネットワークを通じて束と会話をすると、私はISの飛行ユニットを最大稼働させ、一気にスピードを上げる。

ISの特有技能、イグニッション・ブースト 瞬時加速。

開発者である束、稀代の研究者である響さん、人類最強の異名を持つ私の父、織斑春樹により生み出されたモノ。

ISの推進力を溜めて一瞬で爆発させることのできる高速移動技能。高スペックを持つ白騎士でそれを使うとマツハ並みになるが、ISのシールドエネルギーにより、保護されているから大丈夫であるが。

「はっ……ああああああっ!!」

白騎士の武器、近接特化型ブレードの試作型を振るい、ミサイルの六を破壊する。

『ちーちゃん！白騎士はまだ試作段階だからシールドエネルギーは少ないから気を付けてね!』

「わかってる！」

束からの通信に乱暴に答えながらさらにブレードを振り、ミサイル

を撃破していく。

いける……！父さんとの鍛練は無駄じゃなかった！
父さんとの鍛練……。

回想開始

『いいか千冬。相手と戦うならまずは読み取れ？』

『なんで疑問形？』

『んー、だって俺は親父と毎日毎日毎日殺し合って今の實力になったからな。あんま教えられないのはないんだよ』

『なにそれ？なら父さんは私に何も教えてくれないのか？べ、別に剣術以外の性授業でもいいんだからね！』

『きしよい』

強制終了

・・・あれ？

『ちーちゃん前前！ミサイルが！』

「おっおっ」

目の前に迫るミサイルを一刀両断するとまた回想に入る。

・・・というか父さんからマトモな教えを受けてない上に冷たい目で見られたな私。

あんな目をされるとゾクゾクして（ry

『ちーちゃん・・・』

「なんだ束」

『ううん。なんでも・・・それより右前方からミサイル！数は・・・30だよ！』

「なら砲撃で落とす！荷電粒子砲展開！」

白騎士のもうひとつの武器、荷電粒子砲を展開させるとハイパーゼンサーでミサイルをロックオンする。

「いけっ・・・！」

荷電粒子砲を放ち、ミサイルを爆発させて誘爆させる。

くっ！まだまだミサイルはあるな・・・！

白騎士のブレードを持ち直すと、再び瞬間加速イグニッション・ブーストで近付く。

すれ違い様にミサイルを斬りに斬って撃墜していくがまだまだハイ

パーセンサーにはミサイルの反応があった。

『・・・よし。また落とせた・・・ちーちゃん、次はそこから左後ろにミサイル!』

「了解!」

束の指示を受けながらミサイルを破壊していく。

ただ、ただ、ミサイルを落とす。それだけの行為を機械のようにこなしているとは疲労が貯まってきた。

束もハッキングで落としているようだが、難航してるようだ。

束によれば、誰かが妨害しながらハッキングの邪魔をしてるから思うように出来ないらしい。

「くっ・・・シールドエネルギーがまずい・・・」

『あー!もう!なんなんだよこいつ!さっきから束さんの邪魔ばかりして!』

正直、未完成の白騎士では荷が重い。

時々、ミサイルの迎撃が遅れることがあり、冷や汗をかきながら続けるがいつまで持つか・・・。

「っ!しまった!」

『やばいよちーちゃん！ミサイルが！』

一瞬の油断により、ミサイルの突破を許してしまっ。

時が止まるように感じ、急いで白騎士を駆り、ミサイルを破壊するがその隙をついてさらにミサイルが突破する。

「（間に合わない！これでは・・・！）」

『！？ちーちゃん、後方より熱源反応！何かagak・・・ザザザッ』

「束・・・？おい束！」

急に束との通信が途絶え、ハイパーセンサーが少しだけノイズが走る。

そして束に呼び掛けたせいでミサイルから意識が外れ、さらに突破を許してしまった。

ミサイルを荷電粒子砲で落とそうとすると日本の本土がある方向からピンク色の光がミサイルを破壊する。

「なっ・・・」

さらにそれが走り、どんどんミサイルが落とされ、私は止まってしまっ。

ピンク色のビーム……見たことがないが東の援軍か？

「……ハイパーセンサーに反応……敵ではないよう……」

ハイパーセンサーにはISの反応があったが、敵性反応はないようだ。

さらに詳しくハイパーセンサーが情報を見せてきた。

ダブルオークアンタ

ISタイプ射撃特化型、近接特化型

シールドエネルギー800

GNドライブ正常稼働。GN粒子による電波障害

GNソード？

GNソードビット

GNビームサーベル

ワンオフ・アヒリテイル
単一仕様能力、不明

操縦者、不明

「ダブルオークアンタ……！？なんで架空のMSが……」

私が驚く間もなく、ダブルオークアンタと呼ばれる父さんの好きなガンダムシリーズとまったく同じISが目視できた。緑色の粒子を広い範囲に撒き散らしながらこちらに飛んでくる。

・・・そういえば・・・束と響さんが父さんの専用機として渡したと言っていたような・・・。

「援護する。貴公は近くのミサイルだけ撃墜せよ」

「なにっ！」

「繰り返す。貴公は近くのミサイルだけに専念せよ」

そう、ダブルオークアンタから暗号通信が入るとダブルオークアンタは手に持つ武器でミサイルを破壊し始めた。

・・・仕方がない。今はミサイルが先だな。

「束？聞こえるか束？」

『ザッ、ザザザッ』

「駄目か・・・GN粒子にはレーザーシステムや通信機器妨害の効果があつたな・・・」

そう考えているとダブルオークアンタはGNソード？を撃ちに撃ち、ミサイルを破壊する。

惚れ惚れするような射撃性能だな・・・一発で当てるなんて。

さらにダブルオークアンタは縦横無尽に飛び回り、緑色のソードでミサイル斬っていく。

「私も負けられない・・・いくぞ、白騎士！」

私も白騎士の近接特化型ブレードと荷電粒子砲を駆使し、協力する。援軍のおかげで、ミサイルの突破を許すことなく、全て破壊できそうだ。

「大技を使う。巻き込まれなければ俺の後ろに来い」

「・・・おいまで。まさか・・・」

ダブルオークアンタの大技といえばあれだよな？妙にぶつといあの
ビームサーベルだよな？

.....

.....

.....

.....

やばい！！

「待て！それはさすがに……！」

言うまでもなく、ダブルオークアンタは赤く輝き、左肩についていたビットが右手のソードに連結した。

やりやがった！誰かは知らんがやりやがった！

私は急いでダブルオークアンタの後ろに回ると、ダブルオークアンタのソードがバチバチとスパークを起こしながらエネルギーが溜まるのを確認した。

〔圧縮粒子・・・解放！〕

「なぜ をつけるんだあああああ！！！」

本日の千冬はツッコミストのようだ。

ダブルオークアンタのGNバスターライフルが放たれると、前方にあるミサイルを全て破壊する。

さらにビームサーベルを曲げるように左へソードを動かすとさらに
ミサイル撃破。

・・・誰だ。ダブルオークアンタは使い物にならないとか言ったや
つは・・・。

「・・・終わった、のか・・・？」

「では俺はこれにて」

「！ま、待て！聞きたいことが・・・！」

ダブルオークアンタは赤く輝かしていたボディを緑色の粒子と同じ
ようになると左肩についていたビットが円を為す。

その円に入るとダブルオークアンタはそのまま姿を消し、ハイパー
センサーからも反応が消えた。

・・・なんだつたんだ・・・。

『ザッ、ザザ・・・ちーちゃん？聞こえるちーちゃん？』

「東か!？」

『ちーちゃん大丈夫!?!いきなり通信ができなくなっただから心配し
ただよ!ミサイルは?』

「ああ・・・それがな・・・」

束に先程までの経緯を話した。ダブルオークアンタの事もありのま
まに全て。

『・・・ダブルオークアンタが・・・』

「ああ。それで束、父さんは？」

『まだ目を覚まさない。今、空港に到着して病院に運ばれたよ。な
じみさんがマスコミを抑えてるからはーくんが倒れた事は漏れてな
いはずだけど・・・』

「病院は？今から行く」

『ごめん。今はまだ無理だよーちゃん。なじみさんがちーちゃん
やいっくんであつてもいれちゃ駄目だって言うから・・・で、でも
ちゃんと連絡はするよ！』

「・・・納得がいかないがなじみさんが言うなら仕方がないな・・・
束、取り敢えず私は家に帰って母さんと一夏に話す」

『うん！また連絡するねちーちゃん！』

それから私は白騎士のステルス機能を使い、こっそりと帰宅した。
それから二人に父さんが倒れたことを話すと・・・。

「……………ああ……………」

「か、母さん!?!」

母さんが倒れた。

父さんが倒れて頭が真っ白になってしまったらしい。
……………でも父さんならいつの間にか起きておいっす。とか言いそう
なんだけど?

「でも兄さんは今まで倒れたことはないから心配だわ……………それ
になじみさんが貴女達を入れないわけもわかるし」

「……………あれ?でも父さんはじいちゃんと喧嘩しては入院してるっ
て聞いたけど?」

「あれは別よ一夏。お父さんが手加減無用で殴り飛ばすから気絶し
て入院するのよ。でも今回みたいに何の前触れもなく倒れたことは
なかったわ……………」

「過労じゃない?なじみさんがそう言ってたって東が言ってたし」

「……………まさか、ね。お父さんと同じようにはならないわよね?
兄さん……………」

話し合いの結果、なじみさんからの連絡を待つことになり、今日は
もう寝ることにした。

御飯は父さん直伝メンチカツであつたが・・・一夏がグレてあまり作らなかつた。

「・・・当たり前だろ千冬姉。いつも俺にやらせておいて自分は何もしない上にしたら邪魔になるし」

「うっ・・・」

「な、なぜかしら・・・私も胸が痛いわ」

・・・一夏がグレた(二回目)。

妙に冷たい目をする一夏は味噌汁を飲みながらテレビを見ていた。あの目、父さんの目とそっくりだな。豚を見るような目を見るとゾクゾクする。

改めて、なぜ私と母さんには家事スキルは無くて父さんと一夏にはあるのか神を恨んだ。

「兄さんによれば私と兄さんのお母さんが家事上手でお父さんは家事が壊滅的だったらしいわ。兄さんは家事スキルを受け継いだけど私はお父さんの大半を受け継いだからね・・・」

「・・・つまりは祖父が原因・・・?」

おかしい!なんで父さんに受け継がれる!?普通は母さんだろ!

それに私に家事スキルが無くて一夏に受け継いだのは何故だ！

母さんはため息をつきながらメンチカツを切って食べる。

むむ・・・父さんから料理を教わるのもあれだな・・・前に父さんに味見させたら三途の川が見えたって・・・私の料理は兵器か。

「そうなのよねえ・・・兄さんはお母さんが好きで女性のタイプもお母さんそのものだもん。ポニーテールにしているのはお母さんの真似よ」

「な、なんと・・・」

「ばあちゃんってどんな人だったの？あんまり聞かないけど」

一夏が食後のお茶を飲みながら聞く。

「そう、ねえ・・・兄さんの初恋の人で今もただ一人、お母さんを愛してるよつよ」

「羨ましい！！」

「・・・もうやだ千冬姉・・・父さん助けて・・・」

父さんから愛されるなんて・・・なんともつらやまげぶん！げぶん！羨ましい！！！！

「兄さんの女性のタイプ、ポニーテールはお母さんの真似だし、後は大和撫子、料理や家事ができるおしとやかで凜とした、母性のあ
る感じかな？」

「orz」

「あー、それは千冬姉は無理だね。家事壊滅的だし」

「そこに直れー夏あああああー!!」

「うわー！暴力反対千冬姉！」

料理や家事ができるってことは私は駄目だということだ。
母さんの料理よりかはいくらかマシだが、やはりできないのは辛い。
というか神様死ね。

私は一夏を木刀を持ちながら追い掛け回すことにし、捕まえると拳
骨+正座で父さんへの愛と説教を語った。

・・・ん？少し待てよ・・・？

ポニーテール たまに父さんの真似をし、似合う。

大和撫子 神社の跡取りで作法は身に付いている。

家事 私よりぶっちゃけうまい。料理も父さんのお墨付き。

「こら千冬。そんなんじゃあ兄さんに嫌われるわよ?」

「おっと、いけない・・・ありがとう母さん」

「・・・・・・なんかお腹が痛くなってきた・・・父さん、まじかむばっく」

どつやら主夫「夏は若いながら胃痛持ちになったようだ。
こつして夜は更けていく・・・。」

第二十四話、娘（後書き）

おまけ

千冬がミサイル迎撃してる頃……。

「お兄さん、起きませんね」

「……大丈夫かな」

「心配は無用だよ。心拍も呼吸も安定してるから……それ……よ……り」

ナニがあつたかは言うまでもないだろう。
強いて言えば、副機長がなじみに殴られたことがあつたとぞ。

おまけ

千冬がミサイル迎撃してる頃……。

「……親父エ……」

「フツハハハハハハハハハハ！」

「テンションハイだなおい。ところで……」

「ぴい!?!?」

「……………そう怖がられると露骨に傷付くんだが……………」

こちらもカオスなことになっていたとさ。ちゃんちゃん。

第二十五話、息子（前書き）

今回は

- ・春樹、復活＋病院脱走、なじみに鎮圧される。
- ・春樹、伝説のニコポを取得。
- ・春樹がキシ、千冬と秋枝が折檻。

の三本立てでお送りします。

第二十五話、息子

今日の天気は雪。クリスマスイブ当日。

今日は安心院さんからの連絡により、俺と千冬姉に母さん、タバ姉に篤と一緒に父さんの見舞いに行くことにした。最初は柳韻ししょーも来る予定だったのだが、帰ってきた篤とタバ姉の母親に説教されてるために来れなくなった。

「いやー。はーくんは目覚めたんだけどまた寝たんだよね。今は落ち着いてガンダムやつてるみたい」

「そつなの？私はあまり知らないからよくわからないわ」

「なんかいきなり」「てめえのキ タマ潰してやる！！」って叫びながら起きてそこにいた医者股間を蹴ったんだよ」

・・・なにやってんだよ父さん。

「倒れた原因はわかったのか？」

「過労。アラスカ条約以前にも世界を飛び回って疲れが貯まっていたみたいだよ。普段はあまり使わない頭も使って知恵熱も出たようだし」

「（そう・・・もし貧血だったらどうしようかと思っただわ・・・）」
「・・・父さんも父さんで苦勞してるんだ・・・ごめん。気付いてあげられなくて。」

今度、一緒にゲームしよう。ガンダムで気を紛らわせよう。

俺達はザクザクと雪の上を歩きながら父さんがいる病院に行く。
でも篤とかタバ姉が来るのはなんで？

「そりゃ旦那様だk「メギョツ」ミヤアアアアアアアアアア!!」

「ただ心配だからお見舞いに行くだけ」

「へー」

タバ姉が千冬姉にアイアンクローされてるのはもう見慣れたから普通に華麗にスルーして篤と話す。

確かに父さんは公式チートだから倒れるのがあり得ないからなくて篤は思ってるんだろうな。

父さんが世界を飛び回ってる間によく電話をくれたけど疲れてる様子はないんだけどな？

帰ってきた父さんのためにマッサージ法とか四季組のおねーさんとかに教えてもらったけどできるかな？

特に肩凝りが酷いって父さん自身が言っていたから何とかしないと。

「・・・もう街並みもクリスマス一色だな。イルミネーションとかがある」

「そりゃ、クリスマスイブだからね。はーくと熱いクリスマスの夜を「チャキツ」じ、冗談だよーちゃん！」

千冬姉がまたタバ姉の頭を掴んで何処からか日本刀を取り出して首に添えていた。

銃刀法は？銃刀法違反じゃないの？

まあ、千冬姉の言う通りに街並みはイルミネーションで飾られてクリスマスらしい雰囲気が出ている。

そこらにも、カップルやサンタコスプレした人、ケーキを売るトナカイコスプレ、緑の服を着て走る父さん、後ろから追い掛ける医者＋ナース。

・・・ん？

もう一度確認。カップル、サンタコスプレ、トナカイコスプレ、緑の服を着て走る父さん、後ろから追い掛ける医者＋ナース・・・ん！？

「あーはーくんだ！」

「・・・何を言ってるんだ東。こんなところに父さんが・・・いた」

「あ、あれ！？春樹さん！？」

「なにやってるのよ兄さん・・・」

あ。やっぱりクリスマス特有の幻覚じゃないんだ・・・ってなにしているの父さん!?

「ま、待ちなさい織斑さん!」

「うつせえ!なら後ろのナースとか女医のセクハラをやめさせる!毎日毎日しつこい上に迷惑なんだよハゲ!!」

・・・えつと?

「うん。春君が入院 病院で目が覚める 検査入院でしばらく病院 検温やらで女医さんがセクハラ さらにナースもセクハラし、 必要ない尿瓶プレイもしようとする 夜中には当直医が夜這い ついに春君がキれる 病院から脱走、定食屋で食べてるところを見つかる 現在に。みたいな流れだね」

「あ。なじみさん」

「まあ、病院食に媚薬まで入れられて腹が減ってたんだろうね。肉まん食べながら逃げてるよ春君」

確かに見てみると父さんは入院した時に着るような緑の服を着たま

ま、両手にたくさん肉まんを持ちながら走っていた。
しかも口にも肉まんをくわえてるし・・・息できんのか？

「兎に角。春君はボクが捕まえるから君達は先に病院に戻りなさい」

「え？でも・・・」

「・・・千冬ちゃん、あれを捕まえられるのかい？」

・・・無理だろ。父さんを見てみれば道だけじゃなくて建物の壁や
屋上を飛び移り逃げてるし。

しかもまた肉まんw(r y

あんなの捕まえられるのは父さんと渡り合える化け物が千冬姉・・・
はできるのか？

たぶん今の状態じゃ、安心院さんしか捕まえられそうにないな。

「・・・わかりました。なじみさん、兄さんをお願いします」

「任せなさい」

安心院さんは白い和服をはためかせながら走り出し、父さんと同じ
ように壁を走りながら追い掛け始めた。

・・・パネエ・・・。

まあ、俺達は安心院さんに父さんを任せると病院に一足早く行くことにしたのだが……。

うげえ！？姐さん！？ちょ、ま、ストップ！ストップ！それは・
・ミタアアアアアアアアアアアツ！？

……うん。気のせいだな。

病院、織斑春樹の病室前

「とうわけで父さんは叩きのめされて病室に連れられたとさ」

「・・・一夏、大丈夫か？」

なんか筈が変な目をしてるが気にしない。

俺、父さんが心配で堪らないんだが・・・心配は余計だったな。

「・・・いいかい？特に秋ちゃんや束ちゃん、千冬ちゃんに筈ちゃんね。気をしっかり持つように、いいね？」

「・・・はい？どういことですか？」

「はーくんがどうかしたわけ？前に会った時はなんともなかったけど・・・」

どういことだ？俺には何も無かったのに女性陣だけ言うのかね？
・・・まさか、父さんの魔性の魅力が強化されてたりするのか？

「ぴんぽーん。よくわかったねー夏ちゃん」

「……え？マジ？」

ボソツと安心院さんが教えてくれた。

……おいおい。これじゃあ千冬姉の機嫌がさらに悪くなるじゃないかよ。

無理矢理安心院さんに押されて中に入ると父さんが……頭に包帯を巻いてリンゴ食べてた。

「よいつす。なんか久々にお前らの顔を見たな」

そう言いながら笑いかける父さんはすごく穏やかで憑き物が落ちたような、そんな顔をしていた。

……うん。なんか男の俺でもドキツとするなこれ。

千冬姉達は……。

「……」 秋枝、呆然と春樹を見る。

「……」 千冬、ぽーっと春樹をガン見。

「ぶっぱあ！」 束、鼻血の噴水。

「あわわ」 篁、顔を真っ赤にしながら春樹に見惚れる。

「ナニコノカオス」

片言になるくらい四人の反応がすごいことになってた。

安心院さんは・・・あ。少しだけ顔が赤い。でも扇子で顔隠してるからわかりづらいな。

「おお、一夏。久し振りだな。少し背が伸びたか？」

「おわつぷ!？」

ベッドに近かったためか、父さんに頭をグリグリと撫でられ、首を回される。

・・・なんか懐かしいって感じるな。今まで会えなかったから父さんのこれは久し振りだ。

うん。父さんはやっぱり父さん。何も変わらない俺の自慢の父親だ。

「・・・ん？そんなに違うのか？」

「え、ええ。兄さんの顔、スッキリしたような顔をしてるわよ？」

「そうか？あんま実感はないんだが・・・」

少し時間を置くと千冬姉達は落ち着き、母さんが父さんに今回の議

題を聞いていた。

うん。確かに気になる。だって今まで見たことがないくらいスッキリしたような顔をしてるもん。

父さんはむーと唸りながら顔を触ったりしているがその仕草も何かが違うと感じる。

「・・・強いて言うなら・・・失恋した、からかな？」

「「「「「・・・？」「「「「

父さんはそう言つと雪が降る窓の外を眺める。
その横顔も哀愁感とかが相まって絵になる。

実際にタバ姉がまた鼻血を出してるし。

「ま、そんなことより元気にしてたか？東は別として秋枝に千冬、一夏、篝ちゃんはこうして顔を合わせるのは久し振りだしな」

「あ、はい！元気に殺つてました！」

「篝篝。字が違う字が。誰を殺つたんだよ」

「おかげさまで二人とは仲良く暮らしてるわ兄さん。二人ともしっかりしてるから驚きの連続だったわよ？」

「だろだろ？自慢の子供だ」

くっ……父さんがいちいち笑っただけで心が揺らされる！
これが……伝説の……！

ニコポか！！

「どうした一夏。そんなあり得ないものを見たような顔をして？」

「なんでもない」

……また苦労しそうだな……ニコポなら誰彼構わずに効きそうだから油断したら俺も惚れちゃいそ。
千冬姉とかタバ姉はボディীবロー食らったみたいに心を撃ち抜か

れるから余計に苦労しそうだな二人は。

話は変わって前の白騎士事件についての話題へと変わった。

あれ、千冬姉がやったのは知ってるけどミサイルは知らないよ？

「ああ、日本政府が意図的に隠したんだ。名目はパニックを防ぐためらしいけど」

「どーせ自分達だけ逃げようとしたんだろ。ネットでも話題だぞこれ」

「でもまあ！束さんとちーちゃん破壊したからいいでしょ！」

「だがダブルオークアンタはまだまだ謎のままだ。いきなり現れてからミサイルを破壊して量子ワープで消えたからな」

クアンタ？マジなの？俺も見なかった！

トランザムとかGNバスターライフルとかも見なかった！

・・・あれ？なんか父さんの顔がひきつってるぞ？

「それとなんだけど白騎士のスペックが僅かというかかなりダウンしてたのも気になるね」

「ああ。まだ未完成に近いのになぜかあそこまで扱いづらかった」

え？あれで未完成なの？ネットで見たけどかなりのハイスペックで
ミサイル相手に無双してたぞ。

白騎士はネットで流れたけどダブルオークアンタはなぜか衛星とか
でも映像が撮れていなかったようだし。

って父さん？なんでそんな冷や汗流して外を見てるわけ？

「い、言えない・・・クアンタの正体も白騎士が弱体化した理由
を知ってるなんて・・・」

「・・・ん？春君の心が読めなくなってきたね。何かあったのか
な？」

「それより兄さん。これからどうするの？」

「え？あ、ああ・・・予定としては・・・」

父さん曰く、IS学園創設に合わせてIS学園の教師の育成を四月
前までに終わらせ、IS学園入学希望者の厳選をするらしい。

大役だなあ・・・父さん、今の世の中でよくIS学園の教師になれ
たりするな。

「いや？俺は教師はしねーぞ？あくまでも教師育成教師として三ヶ
月だけ教鞭を振るうだけ。しばらくはお前らという予定だ」

「ば、馬鹿な・・・はーくん、束さんとイチヤイチャ学園ライフを
送ると誓ったのは嘘だったのー!？」

「ハウス（家に帰れヴォケ）」

ギーツと親指を立てて首をかつ切るように動かした。

「……いやいや。なんでそんなことするん？今まではしなかったのに過激だな父さん。」

「それで父さん。私もIS学園に……」

「いいぞ」

「行つて……へ？」

「いいぞつて。お前の人生だ、お前が好きなのように生きればいいよ。俺は止めはしない」

「兄さんつたら……」

「いいだろ。俺もお前も昔は親父に束縛されてあまり好きなようにはできなかったら？だから子供達だけは自分が生きたいように生きさせるつもりだ」

そう言う父さんはまたリンゴを食べながらゲームをしました。俺、こんな父親を持って幸せだな。俺や千冬姉の事をいつも思い、導いてくれる。

父さんはブチキレた。

拳骨どころか延髄斬りで黙らせると正座を冷たい床の上にさせて延々と説教してた。

・・・なんか一部の女医さんがハアハア言ってたのは恐ろしかった。

「教育的指導ッ！」

織斑家自宅

「なんつじゃこりゃあああああー！」

「ごめん。俺には止められなかった」

荷物を纏めて（ゲームと着替えをトランクケースに入れただけ）自宅に帰宅。

久々の我が家！と歓喜する父さんは自分の部屋に行くと絶望した。

服がない。パンツやらシャツとか肌に触る服が箆笥から消えていた。

まあ、犯人は後ろにいるけどね。父さんのシャツ着て立ってるけどね。

「む？どうした一夏？私の顔に何かついてるのか？」

「……………そう言える千冬姉って勇者だね。尊敬はしないよ」

「千冬うううううううううう！！そこに正座あああああああ
！！！」

父さんが（ry

もう怒りの雄叫びをあげながら千冬姉に頭突きをすると頭をがっしりと両手で挟み込んで潰す勢いで力をいれる。

「うあああああ ああああ!? 父さん! 頭が! 頭が割れるうううううううう!!」

「は・ん・せ・い・し・や・が・れええええええええ!!」

「・・・はあ・・・」

千冬姉の絶叫+父さんの梅干しする効果音でついたため息をついた。でも・・・これが待っていた日常。父さんがいるだけで明るくなるのはさすがだな。

「秋枝ええええええええ!! 貴様も正座だあああああああ
!!!」

「ええ!? 私は何もしてないわよ兄さん!」

「千冬が貴様の計画だと言ったんだよ! さっさと正座あ!!」

「千冬、貴女!」

「いいじゃないか母さん！一緒に地獄へ逝こう！！」

最悪だ。千冬姉最悪だ。母さんを道連れにして自分への被害を減らしてるし。

・・・まあ、母さんも父さんのベッドで寝てたから同罪かな？股をモゾモゾしてたから千冬姉よりも酷いかもだけど。

二人を正座させた父さんは膝に何処からか持ってきた狸の置物（17?）を置いて説教してた。
口答えすればハリセンで頭を叩かれてミニ狸の置物（5?）を少しずつ追加していくから拷問に近いけど。

「お前ら飯抜き」

「「えーっ！！」」

「・・・さてビッグ狸の置物（30?）を探るか」

「に、兄さん！私達を殺す気！？」

「むしろ死ぬ。一夏、飯作ってやるから座ってな」

やたっ！久々の父さんの料理！

自分でも作れるけどやっぱり父さんののが食べたい！

父さんはロープで母さんと千冬姉を縛って吊るすといつの間にか作っていたケーキやらチキンやらクリスマス仕様の料理が大量に出て

きた。
いい匂いがしてゴクリ、と喉を鳴らすと父さんが食べようか。と言
った……吊るされてる二人を無視して。

「一夏！分けてくれ！父さん、反省してるから下ろしてください！」

「兄さん！それは生殺しすぎるわ！」

「「……………」」

俺も父さんもガン無視してチキンにかぶりついた。

……うん！いい味付け！やっぱり父さんの料理だって実感できる！

「父さん」

「兄さん」

「……………はあ。次、やったら今度は外に吊るすぞ」

父さんは呆れたような顔をしながら縛っていたロープをほどいた。
千冬姉は真っ先に父さんに抱きついてグリグリ顔を胸に押し付けて
いた。

言われたそばからこれだよ千冬姉は……。

案の定、父さんは拳骨をして気絶させた千冬姉をソファーに放り投

げた。

パンパンと手を鳴らす父さんに、母さんはチキンを食べていた。

「うーん。やっぱり兄さんの料理は美味しいわ」

「い、いつの間に・・・？」

「馬鹿（千冬）には残しておくから食べるぞ。冷めると不味いからな」

父さんは母さんの事を気にせずグラタンを食べていた。

・・・父さんのスルースキルも磨きがかかってるな・・・。

その後、夕食中に千冬姉が復活。父さんのケーキを食べてた。

あーんをさせようとしたら父さんは仕方がないな風にケーキを食べさせたりしてもいた。

千冬姉は嬉しそうだったし、父さんも懐かしそうに食べながら食べさせたり、話したりした。

食べた後には父さんと風呂に入った。父さんに背中を流してくれと言われたからね。

風呂でも世界を飛び回った話を聞かされ、お土産に色々プレゼントしてくれるとのこと。

・・・父さんのビームサーベル、トランザムライザー並にでかかった・・・。

結論、父さんといると落ち着く。

また、父さんと同じベッドで寝たけど千冬姉が乱入しようとするの
はやめてほしい。

第二十五話、息子（後書き）

おまけ

次の日の朝。

「またか。またなのか千冬コリア・・・」

「むう〜、父さん〜」

「・・・ま。いいか・・・二度寝しよ」

やはり子供には甘い春樹であつた・・・。

駄菓子菓子。

「（・・・フッフッフ。寝たフリをしたかいがあつたな・・・今のうちにキスを・・・）」

千冬は邪な心で薄汚れており、眠る春樹の唇を狙うように顔を近付けていた。

距離がゼロになると・・・。

「ZZZZZ・・・」

「~~~~~!!~~~~~!!」パシパシ!

寝惚けた春樹が千冬の首を絞めるように手を動かしていた。

千冬は朦朧とする意識の中、春樹の腕をパシパシ叩くが微動だにしなかった。

薄れていく意識の中、千冬は密着する春樹に喜んでいいのか、絞められてガツカリするべきか戸惑っていた。
そして、千冬は二度寝をすることになる。

O W A R E !

閑話休題（前書き）

微妙な出来。

今回は白騎士事件の裏側、春樹の身に起こったことを書いてますが・
・クソ駄文だろーなー・・・。

閑話休題

「・・・あ。また懐かしいもんを見つけたな・・・」

クリスマスツリーを片付けてると倉庫から懐かしいものが見つかった。

織斑家和室炬燵

「あけましておめでとういっしょに暮らします」

「いやー、早いもんだな。もう年も変わるか・・・ほれ、お年玉だ」

お正月。年もまた明けて我が家にていつものメンバーが炬燵に入つて新年の挨拶をする。

子供組、つまりは千冬、一夏、束、篝ちゃんにお年玉を渡す。

その前に秋枝にそのお年玉を取られた。

「・・・ちよつと待って兄さん。いくら・・・入れた？」

「三十万」

「馬鹿！子供に大金を与えてどうするの！？そっいえば兄さんの金銭感覚が狂つてたのを忘れてたわ・・・」

秋枝が呆れたような眼差しで俺を見るが三十万が普通じゃないのか？千冬とかを見てみると首を横に振つてた。

・・・そうかそうか。俺が間違つてたのなら（八つ当たり気味に）お年玉はいらないな。

「なんでそうなるの！？ああ、もう！一夏はこれ！千冬はこれ！束ちゃんと篝ちゃんはこれね！」

「あ、ありがとうございます・・・」

「よっしゃー！これでまたゲームが買えるー！」

「一夏？あまり無駄遣いはしないようにね？ただでさえ兄さんの金銭感覚が狂ってるから移らないか心配だわ・・・」

「んだとコノヤロー。秋枝、貴様の黒歴史を暴露してやるうか？見つかったからあることないことバラしまくってやるう。」

正月の恒例、おせち料理を食べながら少し古いアルバムを取り出す。

「？父さん、それは・・・？」

「兄さん！それ、まさかとは思うけどお父さんのアルバムじゃないでしょうね!？」

「ピンポン。しかも三冊全部あるぞ」

アルバムを奪おうとする秋枝の顔を足で押さえつけながらまずは一枚の写真を子供組に見せてみる。

一夏と束は興味津々、千冬は餅を食べながら覗き、篝ちゃんは恐る恐るといった感じに覗く。

「これが、俺。秋枝はこのチビ」

「・・・はい？父さんの子供時代・・・？」

写真には家族、親父がまだ生きていた頃のものが写り、写真の俺と

秋枝を指差した。

写真の構造は真ん中に小学生の少年、少し背が高い俺、熊さんのぬいぐるみを持つ小さな秋枝、後ろには姐さんが立っていた。

秋枝は顔を真っ赤にして俯き、一夏と千冬、篠ノ之姉妹は初めて見る子供の俺に興味津々な様子を見せる。

「なじみさんまで・・・この子は弟かなにか？」

「は？違う違う。それは親父」

「・・・ごめん。耳が腐ってよく聞こえなかったからもう一度お願いできる？」

え？なんて言った？みたいな顔をする千冬にもう一度だけ言う。

「だ・か・ら。これは俺の親父。お前らのじいさんのの」

「・・・」

「・・・」

それは魔王だ。親父は人間やめてるけど人間だからね？

「羽が生えて火を吐く人かと思った」

レッ　アリーマーみたいじゃねーか。親父は人間だからね？

「明治時代の剣客かと・・・」

どこの流浪人だ。それなら親父は何歳だバカヤローが。

改めて聞くとこいつら親父をなんだと思ってるんだ？

しかも親父から話題が外れて俺の写る写真ばっか見てやがるし。

・・・そういや、親父とは会ったんだよな・・・まさか神様に喧嘩を売って圧勝したとは思わなかったが。

「・・・そう。俺は変革しようとしている・・・」

「ダブルオーネタはいいですから話を聞きなさい」

飛行機で倒れて気が付いたら白い空間にいたわけではあるが、アリエール使ったみたいに白いなこれ。

後はなんか背中に白い翼をつけた金髪ねーちゃんが偉そうにしながら説明をしてるだけか？

曰く、俺は物語の異端者イレギュラーだからこちらの対応に困るのだ、物語が正しく働かないのは仕事が増えるからやめるみたいなの？

・・・あのイケメソ君よりも頭が悪いのか、心を病んでるのか心配になった。

「・・・なんか失礼なことを言われてる気がするわ・・・」

「イエイエ。ワタクシ、ナニモイッテナイアルヨ」

「……まあ、いいでしょう。とにかく貴方には死んでもらいます。
イレギュラー
異端者は存在するだけで罪ですから」

「……いい病院紹介しようか？」

「なっ！女神たる私になんて失礼な！許しません！」

いきなり槍やら盾を出して襲い掛かる精神異常者のねーちゃん。
仕方がなく、対応することにした。

時間経過

「……………」

「ア、アハ！アハハハハハ！女神たる私に勝てると思っていましたか！」

「……………」

「まあ、いいでしょう。答えられないのなら仕方ありません……」

「……………なあ」

「なんですか？命乞いなら聞きませんよ。貴方は神に喧嘩を売ったのですから……アハハハハハハハハハハ！」

「…………取り敢えずこれだけは言わせてもらおう。」

「手、貸そうか？」

「……………お願いします……………」

まあ、わかるように立ってるのは俺。寝ているのは精神異常者自称女神である。

開始七秒で武器を破壊し、十八秒で盾を砕き、三十二秒で襟を掴んで地面？に叩きつけてK.O.ってわけだ。

精神異常者自称女神は涙目になりながら俺の手を取ると真っ赤な顔を逸らした。

……………なんぞこれ。正当防衛なのに俺が悪いみたいになってるやん。

「う、うう……………まだ見習い女神の私が勝てるわけ……………というかなんで人間なのに神相手に勝てるんですかぁ!？」

「ふ、ふゆくん!？」

「おうおう。最高神に近いお前さんが息子に泣かされるなよアテナ」

「………待て待て待て待て。どゆこと?二人は知り合い?なんで親父がいるの?俺、死亡?」

「まずは落ち着け春。きちんと説明はしてやるから」

……話は聞いたが吹っ飛んでるな。

俺が今いるのは神の座と呼ばれる場所で、イレギュラー異端者の俺を裁くために連れられた。

精神異常者自称女神の名前はアテナ。次期最高神らしい。

で。親父がここにいるのは現最高神のゼウスをボコって以来、親友になり、天国から抜け出しては飯をたかりに来てるらしい。

……親父エ……。

「ってことはなんだ?俺は死ぬのか?」

「ないない。お前にも子供がいるだろ。死んだら悲しむだろ?ワシが死んだときのお前のようにな」

「す、すみません!まさかふゆくんの息子だったとは……」

「……なにしたんだ?この人、なんか親父を若干崇拜してんじや

そこはまさに天国と言える光景で、花畑が広がり、テラスのような場所が見えた。

「……綺麗だ……ん？」

「~~~~~」

……この歌声……どこかで聞いたことが……？
遠い遠い、それくらい昔に聞いたような……？

声につれられ、そちらを見てみると花畑の中心で女性が一人で座りながら歌を歌っていた。

黒く美しい長い髪、服は大和撫子のような白と赤の和服、後ろから見ても美しい体を持つ女性……それを見て俺は生きた中で一番の驚きを体験した。

「……か……かあ、さん……？」

「~~~~~ あら？貴方は……そう。春樹なのね？」

「え、あ、な、なん……え？なんで母さんが……」

「まずはいらっしやい春樹。こちらに来て話しましょう」

「あ、ああ……」

振り返った女性の顔は遠い昔に愛した母親、死に別れた母さんだった。

そうか・・・あの歌は俺が小さい頃に聞いていた子守唄か・・・。

母さんに手を引かれ、花畑の中に一緒に肩を並べるように座る。

「大きくなったわね・・・最後に会った時はこんなに小さかったのに」

「あ・・・うん。あれから二十年以上も経ってるから・・・」

「ふふふ。そうね・・・あんなに甘えん坊だった春樹がここまで・・・私、嬉しいわ」

母さんに褒められるとなんか照れくさくなり、頬をポリポリ掻きながら顔を逸らした。

母さんは優雅に上品に口を隠しながら笑うと俺の手を握ってきた。母さんに触られるとなぜか恥ずかしくなり、顔が赤くなる。

「本当に・・・立派に育って・・・ごめんなさいね？貴方を置いて逝ってしまって・・・」

「い、いや！母さんは悪くない！悪くないから！」

「でも。貴方には辛い思いをさせたわ・・・」

「そんなことない！母さんが死んでも俺は寂しくないなんて嘘にな

るけど母さんに心配かけないように……！」

「……春樹。私の可愛い息子……貴方にまた会えて嬉しいわ」

「！お、俺も……俺も嬉しい！」

「……よかつたら、今まで春樹が体験した人生をお母さんに話してくれないかしら？」

「そ、それくらいなら……」

そこからは母さんと他愛もない話をした。

親父や姐さんと過ごした四季組の時代、親父が死んでから千冬と一夏を引き取り、育てたことなどと。

母さんは楽しそうに、悲しそうに感情をコロコロ変えながら話を聞いていた。

「……ふふふ。色んな体験をした人生を歩んだのね、春樹」

「……うん」

「なら春樹？今までも含めて貴方は幸せかしら？」

「……うん。千冬や一夏と一緒に過ごした日々は俺の宝物とも……」

言えると言おうとすると母さんの細く白い人差し指が唇に触れた。そして、穏やかな笑顔を見せる。

「ふふふ。いいのよ春樹・・・貴方は“現在”を生きてるの。“過去”の私とは違って・・・」

「・・・」

「春樹。貴方がそれを大事にしてるならこれからも大事にしないで。私なんか縛られないで子供達と過ごさない」

「母さん・・・」

「・・・あら。もう時間かしら？」

「ああ。春、悪いがもう時間が来た」

母さんは後ろを見ると親父とアテナと名乗る女神が歩いてくる。母さんは名残惜しそうに立ち上がると服についた花をパツパツと落とした。

それにつられ、俺も立ち上がると母さんは笑いかける。

・・・会えなくなるなら今のうちかな・・・。

「・・・やれやれ。三分だけだぞ」

「・・・すまん親父・・・母さん、貴方に言いたいことがあります」

「なにかしら?」

親父とアテナは少しだけ離れ、母さんとテラスに向かって歩きながら今まで言えなかったことを言う。

「母さん……いや、織斑千夏さん」

「はい」

「俺は……今まで貴女を愛していました。母親としてではなく、一人の女性として、異性として今までずっと……」

「春樹……」

「一方的なのはわかります。ですが言わせてください」

「ずっと……貴女が大好きでした（……………）」

そう言うと花畑にまた風が吹き、俺と母さんの髪がユラユラと風に揺られた。

母さんは一瞬だけ驚いて目を見開くとすぐに人懐っこい笑顔を向けた。

「

」

「え……？」

「

」

気が付くと母さんの顔が目の前にあり、額に何か触れたのを感じた。

「……………ありがとう春樹……………」

「かあさ……………！」

織斑家和室炬燵

「……………ん！……………んん！」

「……………」

めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」
『めんなさい!!』

『・・・なんぞこれ？俺、なんかしたか？』

『ブワツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ!!』

『あ、あははは・・・（わかる気がするわ・・・）』

ってカオスなことになってた。

アテナによればこのねーちゃん（白騎士に宿る意識思念体で、触られた時（IS起動実験時）に俺に怯えてるらしい）。

甲冑とか剣とか持ってたけど白騎士ってそういうことかよ・・・って思った。

まあ、なんやかんやで大事な部分は教えられずに親父のドロップキックで下界に戻されたわけなのだが。

白騎士はまだ怯えてたけどね。

「・・・兄さん。準備はできたわよ？」

「ああ？」

気が付くとまたまた時間が飛んでおり、全員が炬燵に入ってるが外出用の服に着替えてた。

ううむ。いかんいかん。取り敢えず出掛けようかね。

「ああ、悪い悪い。行こうか？初詣」

炬燵の上に最初に見せた写真を置くと炬燵から出て玄関へと足を向けた。

子供組も約二名ははしゃぎ、一人は頭を抱えながら追い掛け、もう一人は苦笑して俺を待っていた。

・・・母さん、俺は“現在”^{いま}を生きる。
生んでくれて・・・ありがとう。

誰もいなくなった和室の炬燵には、三枚の写真が重なるように佇んでいた。

それは・・・

“過去”（赤ん坊の春樹を抱きながらピースする親父に布団で笑う母親が写る写真）

“現在”（最初に見せた写真）

そして・・・

“未来”（一夏と千冬と春樹が仲良く笑う写真）
を写していた。

「だー！くっつくな！」

「いいじゃないか！腕を組むくらい！」

「そうだそうだー！」

「ねえ母さん、どこの神社に行くの？」

「篠ノ之神社みたいよ。兄さんが用があるって……」

「……姉さん羨ましい……」

そして……思い出は未来に紡がれる。

『春樹、私を愛してくれたのは嬉しいわ……だけど、貴方には貴方の人生がある。死んだ私よりいい女性ひとが見つかるわ……だから、私の分まで幸せにね？私の可愛い息子、春樹……』

舞台は……IS学園へと移り変わる。

閑話休題（後書き）

というわけで。春樹は恋をしていた母親に思いを告げ、フラれて？
新しい道を歩み始めます。

これがニコポ取得の秘密。吹っ切れたからこそ、目覚めたもんです。
というか最初は

親父 チート転生者（永遠のシヨタ）

姐さん 親父の特典の相棒

みたいにしようかと思ったけどめんどいいからやめました。

親父、冬樹は合法シヨタ、永遠の少年ですが、戦闘能力は神をも圧
倒するくらいバグです。

・・・余計に謎が増えた・・・。

春樹の母親、織斑千夏ですが、もしかすると番外編で出すかもしれ
ません。バグ親父と一緒に。

うーん・・・もう少し上手く書けなかったかなー？

第二十六話、親父（前書き）

今回は連続投稿だぜヒッハー！

三百万アクセス突破したからテンションはランナーズハイ！みたいになっております。

百万アクセス記念は書き終え、予約投稿する予定です。

今回は

- ・ I S 学園編スタート。春樹は学年主任、千冬と東は生徒に。
 - ・ 山田美弥、まさかの再登場。副担任に。
 - ・ 襲い掛かる I S 学園の教師の媚薬攻撃に春樹は胃を痛める。
- の三本立てでお送りします。
- ・・・まさか美弥先生がまた出るとは作者も予想できんかった。

第二十六話、親父

本日はまたもや憎らしいほどの晴れ。

日本に凱旋帰国した俺は久々の我が家にて一夏、千冬、秋枝と過ごした。

やはり千冬は千冬と言つべきか、変態な部分はまったく治っていなかった。

そんな・・・織斑家の親父である俺は・・・。

「皆さん、入学おめでとう。まず学年主任である織斑先生から・・・

」

「・・・なんでこうなってんだ・・・！」

「先生？織斑先生？自己紹介を・・・」

「ああ、はいはい」

司会をする理事長（表）から促されて教壇に上がってマイクを持つ。

「えー、はじめまして。IS学園学年主任、織斑春樹です。これより皆さんはIS学園の生徒として・・・」

なんですか、IS学園の入学式に出てる。

・・・なんで？なんで？なんで？なんでえええええええええええ！！？

あれ？おかしいな。クリスマス、正月と過ごして一月十五日からIS学園の教師育成のためにIS学園（未完成）で指導して三月には終わらせて終わる予定だったはず・・・。

なのに！IS学園の教師からの推薦で学年主任に任命されてIS学園で働くハメになってしまった！！

しかもダブル理事長の轡木夫婦からも推薦されたから逃げられねえし！

「では、次にIS学園の教師を・・・」

そんな俺を無視するように理事長（表）がさらに教師を紹介する。一応、IS学園は高等学校なので学業もしなければならぬ。なので普通の教師も雇ったのである。

最初は男の教師も募集したらしいが、間違いが起きないとは限らないとか、男？んなもんいらねーよ！みたいに言う奴が出てきたため、女性のみ教師を募集したのである。

というか俺は？俺、男。あんたらが嫌う男なんですけど？

「いや。織斑先生、貴方はISを発表した上に篠ノ之博士の次にIS理論に詳しいから採用されたんですよ」

「・・・俺はやりたくない・・・教師を教育するだけなのになんで・・・」

「いいじゃないですか。諦めて教師をして私に喰わ・・・げふん！一緒に頑張りましょう」

「本音が漏れた。本音が漏れたな？おお？」

「や、やだ・・・こんなところで襲うなんて織斑先生つたらだ・・・いたん」

「・・・ブチッ」

ガッツン！！

「えー、これから生徒達と顔合わせをします。各自、自分の担当するクラスを確認してすぐに向かってください」

「「「はい！」「」」」

「へーい」

「・・・織斑先生？貴方が一番頑張らないといけませんからね？」

「了解つす。轡木理事長」

入学式が終わると職員室にて簡単な説明を受けて出席簿やらプリント、寮の部屋番号＋鍵を持って受け持つクラスへ。
学年主任である俺は一年一組の担任であり、新一年生の道徳、IS理論、体育を担当することになっている。

道徳は俺が提案し、無理矢理通したものであり、ISを使うときの心構えを教えるため。

IS理論は言わずもがな、一番知識が豊富だからという理由で無理矢理決められた。

体育はバグキャラのスペックを持つ俺だからみたいに決められた。

・・・国際IS委員会、いつか復讐してやらあ・・・。

「・・・山田先生、大丈夫ですか？」

「は、はは、はひ！」

「はいはいほら深呼吸。そんなにキョドってたらうまくいきませんよ」

そして一年一組の担任をサポートする副担任はなんと、前に一夏と
筈ちゃんが通っていた幼稚園の山田先生なのである。

IS学園の教師を募集する際、IS適正調査をした。

それで山田先生はIS学園の教師の中でもトップレベルのIS適正
ランクがあつたので、問答無用で合格になったわけだ。
後は教員免許を持つてるからって理由かな？

美弥先生、幼稚園をやめてまで来てくれたから嬉しいもんだな。

「おいーっす。席につけー」

「あ、あわわわ」

一年一組に着くと躊躇いもなくドアを開け、立っている生徒に座る
ように促した。

俺と山田先生は教壇に上がり、教卓の真っ正面には俺が立ち、隣に
は山田先生が立つ。

ザワザワと騒いでいた教室はすぐに静まり、全員が席に座ったのを

確認すると教室を見渡す。

中には千冬と束があり、束は手を振っていた。

「まずは諸君。IS学園に入学おめでとう。入学式でも紹介されたが学年主任兼一年一組担任の織斑春樹だ。担当する教科は道徳、IS理論、体育（実技）だ。よろしくな」

「や、山田美弥です！一年一組副担任、担当する教科は現代文です！よろしくお願いします！」

そう自己紹介をするとしーんと静まり返る。

「……？」

「き……」

「きっ」

「」「」「きやあああああああああ！！」「」「」「」

「……つう……」

「はわー！？」

瞬間、生徒達が大歓声を上げ、頭をかなり揺すられ、山田先生も圧倒されていた。

「実物！本物の春樹様よ！」

「テレビで見るよりイケメン！」

「春樹様ー！貴方に会うためにイタリアから来ました！」

「私を飼ってー！」

「そしてしつけて貴方のペットにしてー！」

阿鼻叫喚。まさにその言葉が似合うようなカオスな空間になっていた。

キヤーキヤーと騒ぐ生徒達に、山田先生はあたふたするが止めようとも、止められない。

そして、阿鼻叫喚なカオス空間は加速し、ビリビリと教室が震える。イライラしてきてついには……。

ガッゴオンー！！

「「「「「！？」「「「「

「……五月蠅い」

「あわ……」

教卓を強く叩くと黙らせ、ギロリと騒いでいた生徒達を睨む。
あれだけ騒いでいた彼女らは沈黙し、ガタガタ震えるものまで出てきた。

「・・・俺の授業に私語は許さん。いいな？」

「「「「「は、はい！」「」「」「」

「お、織斑先生・・・」

「さて。まずは諸君らには自己紹介をしてもらおう。あ行から順に名前、趣味、好きな人、夢を言ってもらおうか。無論、嘘を言えば出席簿でシバくぞ」

「「「「「（なんか幼稚園みたいなノリだ！？それになんて恐怖政治！！）」「」「」「」

こつすりゃ騒ぐやつもいなくなるだろ。

あ行から順に名前を言い、自己紹介しているとおの番、つまりは娘の出番である。

「はじめまして。織斑千冬といいます。趣味は剣道、写真撮影（盗撮）で好きな人は父さん、夢は父さんのおよm「スッコオオン！」「ぶぷっ！？」

ヤバい事を言う前にチヨークを額に投げて黙らせる。
しくった。千冬がいることをすっかり忘れてたな・・・好きな人は
とかいうのはやめておくべきだったか。

「・・・織斑先生？」

「ん。千冬は俺の娘だ」

「ええ！？織斑先生の娘！？」

「なんと羨ましきポジション！父親と禁断の愛が始まるのね！」

「キヤー！」

・・・イラッ。

キヤーキヤーとまた騒ぐ生徒達に出席簿を持って近付く。

スパパパパパーン！！

「・・・まだ授業ではないが静かに」

「ククククサー！イエッサー！」「ククク」

「よろしい。娘だからといって鼻屑はしないから安心しろ。はい次」

取り敢えず、放課後に千冬を呼び出して写真を没収しよう。また盗撮しやがったみたいだし。

それから自己紹介をしていくのだが、誰もが俺に会いに来ただの、抱き締めたいなガンダム！みたいに言う生徒もいた（そーゆーのは好きだから少しだけ待遇してやろう）。

やはりというか、国から命令されて来た生徒もいるようで、男である俺を見下すものもいた。

出席簿でシバいておいた。

「はじめまして！篠ノ之束さんだよ！趣味はプログラミング、ハッキング、ISを弄ること！好きな人はーくん！夢はーくんと子供w「スッコオオオン！！」にゃ！？」

「ちなみにだが篠ノ之束の身柄はアラスカ条約及びにIS学園特記校則により、守られている。勧誘などをした場合は即刻退学になるので気を付けるように」

そう言うと露骨に舌打ちするものが出たのでチョークを額に投げて黙らせ（ry

自己紹介を全員が終わらせるとプリントを配る。

内容は時間割、IS学園特記校則、IS学園にいる間の注意事項などかなりのプリントを配った。

「今日は初日だから早く終わるがいきなり問題を起こすようなことはやめるよ・・・早速だが、一年一組の委員長・・・まあ、つまりはクラス長だがそれを決めようと思う。山田先生」

「あ、はい！」

教卓のキーボードを軽く叩いて黒板にモニターが現れるとクラス長と出てくる。

候補者、と書かれて空白の欄を指差して説明をし始める。

クラス長とは名の通り、クラス代表なのだが、それをやれば経験を積むことができ、将来は国家代表のIS操縦者の近道となる道なのだ。

「まずは立候補からだ。やりたいものはいるか？いなければ自他推薦で決める」

「はい！私、やりたいです！」

「ほうほう・・・まずはアルマが立候補するのか・・・はい次は？」

「・・・はい。私もやりたい」

「そして織斑千冬・・・と。他は？」

立候補したのはアルマ、アメリカから来た留学生と娘の千冬のみ。他にも立候補するのはいたが、なんか千冬の覇気に気圧されて辞退したものがいたのは事実。

ちよūdどいいな。まだIS学園は始まったばかりだからクラス代表は二人いた方がなにかといいだろう。響木理事長からも指示を出されてるしな。

「他は・・・いないな。では織斑とアルマをクラス代表とする。二人にはさらにプリントを配るので放課後に職員室に来るように」

「はい！」

「わかりました」

「ではLHRを終わる。これより参考書を受け取りに移動しろ。受けとり次第、織斑とアルマ以外は寮に戻って荷物を纏めるんだ・・・それと寮の部屋の部屋番号と鍵を山田先生から受け取っておけよ」

それだけ言うと出席簿を肩に置くように持ち、山田先生と並んで生徒を誘導する。

ここ、IS学園はまだ未完成であり、完成しているのは校舎、学生寮、第一、第二アリーナのみでまだ教員用の寮と第三と第四のアリーナ等々、まだ工事中である。

教室から移動し、とある空き部屋に案内すると山田先生に任せて)

丸投げして）自分は職員室に先に戻る。

・・・山田先生？涙目でこちらを見ていたけどなにか？

「・・・あゝあゝ、慣れないことをするもんじゃねーな・・・」

「お疲れ織斑先生」

「あー、どーも・・・ってなんか入れた？変な臭いがするんだが？」

「ちっ、勘は鋭いな・・・」

スツパアアアン！！

取り敢えず出席簿で（ry

お茶をもらったのだが、他の先生（頭が緩い、つまりは馬鹿）に飲ませると発情した。

やはり媚薬か・・・経験しといてよかった。

油断も隙もありやあしねえな。気を付けねば。

しばらく経つと、IS学園の教師陣が揃い、初の職員会議が開かれた。

幸い、女尊男卑の風評に囚われてる女性はいないため、スイスイと進み、議題は変わっていく。

・・・ふふ。賤たかいがげふん！げふん！オハナシしたかいがあつたと言つものだ。

「それで、なんかコイツヤバくね？みたいに感じた生徒はいました？今のうちに警戒をしておく必要があるので・・・一年一組は俺のクラスなでちょうky・・・げふん！げふん！問題があつても対処できますが」

「二組は特にいません。篠ノ之さんを勧誘しようとする生徒はいましたけど」

「三組も同様。篠ノ之束を狙う留学生がちらほらだ」

「四組は一人だけいました。他はいませんが二組、三組と同じように篠ノ之を勧誘しようとする生徒がいます」

「五組、同様」

「成る程・・・勿論、話しましたよね？」

コクリと頭を縦に振る二組、三組、四組、五組の担任+副担任。うむ。ならば勧誘すればストレス発散という名の説教ができる・・・フ、フフ、フフフフフ・・・。

「（ヒイ！？織斑先生からなんか黒いのが出てる！？）」

「（ああ・・・やばい。前に指導してもらったときのトラウマが・・・）」

」

「（ハアハアハアハアハア。あんな冷たい目で見下されるなんて堪らないわ・・・）」

「あ。ちなみに今日の夕食時に親交を深めるためにパーティーをしますんで先生方はどうしますか？」

IS学園初の生徒と教師だから今のうちに親交を深めとこつ的に轡木理事長と相談して食堂でパーティーをすることにしてる。

ちなみにだが、IS学園に雇った人員は次の通りである。

- ・教師陣二十名（常時募集中）
- ・食堂担当炊事七名（常時募集中）
- ・IS整備担任教師二名（現在指導中。一名は響）
- ・IS学園警備担任教師、プライスレス（つまりは俺）
- ・清掃担当校務員（十蔵さんのみ。たまに俺も手伝う）

まだあるが簡単なのは上の通り・・・のだが、全部が全部、俺もやってるから労働基準法を無視してるだろ。

つまり、俺の肩書きはIS学園学年主任兼一年一組担任兼IS整備担任教師指導係兼食堂の鉄人兼IS学園警備担任教師兼清掃担当校務員教師となるわけだ。

・・・すごく、長いです・・・。

「ああ・・・最後に俺の部屋には来るなよ。来たら問答無用で出席

簿か何かでシバいてから廊下に正座させるからな・・・イイナ？」

すると頭を高速で縦に振る教師陣。物分かりのいい女性は好きだぞ。

まだ十一時半か・・・よし。食堂が開くのは十二時からだから伝達事項を張っておくか。

第一回IS学園職員会議を終わらせると、真っ直ぐに食堂にパソコンとプリントの束を持って向かうことにした。

・・・山田先生はやるのが山ほどあるから職員室に放置したがな。食堂に来るとまだ誰もいなかったため、先に頼んでいただく。食堂で働く人らはあらゆる国から呼んだ料理のエキスパートなのでどんな料理も作れるのがミソである。

「・・・・・・・・ん、んー・・・・・・・・」

「父さん？」

「ん、ん、んん？千冬か？」

「東さんもいるよはーくん！」

中華セット（炒飯＋醤油拉麺）を食べてからパソコンを弄っていると千冬と東がトレーを持ってこちらを見ていた。聞く前に向き合う形で座ると、東がプリントを取って勝手に見始めた。

「・・・おい」

「んー、進路相談？これがなんなの？」

「いいから返せ。まだ秘密なんだから見るなよ」

「それより父さん。さっきの伝達事項を見たんだけどパーティーって本当なのか？」

「まあな。親交を深めるためにやるって十蔵さんが言ってたから急遽、やることになったわけだ・・・早く返せ篠ノ之」

「ぶー！東さんを名字で呼んだー！はーくんは東さんが嫌いになっただんだー！」

「なわけねーだろ。公私混同は控えてるだけだ・・・おっと、ちょっといいな。織斑、これを渡しておくからアルマにも渡しておけ」

「・・・これ、クラス代表の？」

「よく目を通しとけてアルマにも言っとけ。クラス代表の名に泥を塗るなよ」

口にくわえた爪楊枝をシーシー動かしながらパソコンのキーボードを叩いた。

パソコンの画面には教員用の寮の部屋割りや授業のローテーションが映っており、簡単に纏めると保存した。

食後の緑茶をズズツと飲みながら千冬と東と話をするが、なんでス
イツ姿が似合うとかの話になるわけ？
そんなに違うのか？

「「うん」「」

「・・・そうか？洋服の 山で買ったもんなんだが？」

「でも似合うよ。私達のIS学園の制服よりかはね・・・なんで最
初がすごいミニスカートなのか気になったけど」

「東さんは気に入ってるけど！」

・・・確かに最初の制服は狙ったかのようなミニスカな制服だった
からな・・・。

改造は許可したからロングでもいいけどな。

しばらく話していると他の生徒が話し掛けたり、同伴を求めたりと
かなり忙しい昼食になった。

そんなに俺が気になるのか？妙に熱のこもった視線を送るし。

「（ギリギリギリギリギリ・・・父さんは私のものだ。私のモ
ノだ。ワタシのモノだ。ワタシノモノダ。ワタシノ・・・）」

「（はーくんは東さんのものはーくんは東さんのものはーくんは東
さんのものはーくんは東さんのものはーくんは東さんのものはーく
んは東さんのものはーくんは東さんのものはーくんは東さんのもの）」

「・・・お前ら・・・」

心の声が丸聞こえである。

逃げるように食器を片付けてから学生寮の仮部屋に行くことにした。セキュリティは万全、防音やら一人風呂（露天仕様&檜風呂）もあるし生徒とあんまり顔は合わせない・・・はず。

パーティーまでにはまだ時間があるため、少し仮眠を・・・仮みんを・・・かみんを・・・ZZZZ・・・。

第二十六話、親父（後書き）

おまけ

「・・・ああ・・・なんか父さんがいないとやる気が出ない・・・」

前にいきなり日本政府が家までやって来てIS学園の教師をやれと言われてから父さんは帰ってきてない。

ラーメン食べてる最中に言われ、高圧的だったから父さんがキレて日本政府の派遣達をボコボコにしてから国会議事堂まで乗り込んだ。

・・・いま家にいるのは母さんと俺だけ。

後はなんでか筈も俺んちに泊まっていたりする。

「し、仕方ないだろう！春樹さんが保護するから来ない？みたいに言うから！」

「要人保護プログラムを受けなくていいようにって兄さんがね。誰もあのバグキャラと戦いたくないだろうし」

「あー、なんかわかるー」

ししょーは要人保護プログラムを受けるためにどっかに行ったからようわからん。

筭は離れたくないと駄々をこねたらしいから父さんが家に泊めることにしてみた。

・・・父さんに会いたいな・・・。

今はいない父親を思うファザゴン息子であった・・・。
頑張り一夏！君の未来は光がある！

「一夏、ご飯は？」

「自分でやれこの残念母親が」

・・・うん。光はある・・・はず？

第二十七話、親父（前書き）

今回は

- ・春樹、教師を頑張る。
 - ・知らぬ間に四季グループが世界一に。
 - ・ストレス爆発。美弥先生が哀れすぎる。
- の三本立てでお送りします。

第二十七話、親父

「・・・であるからして、ISの無断使用は国家反逆罪の罪と同等になる。現在、確認されてるISは白騎士、量産型の“鉄”三機のみだからな」

諸君、もはやう。

俺こと織斑春樹は現在、IS学園にて授業をしてるでござる。内容はIS理論とアラスカ条約について教えている。

アラスカ条約、またの名をIS運用協定、IS条約と言い、ISに関するルールのまとめである。

「・・・さて、ここまでで質問はあるか？」

黒板にチョークで書き終えてからチョークを置き、教材を片手に振り返る。

そこには俺のクラスの生徒が真剣に授業を聞き、メモを取っているが、何人かは手を上げていた。

「・・・よし。高嶺」

「はい。ISの要となるコアですが、現在はどのようになっているのですか？」

「それは保持してる国か？それともどのようにして使われているか？」

「出来たら両方お願いします先生」

「わかった。取り敢えず座れ・・・まず、ISコアは467個確認されており、それらは世界各国にアラスカ条約を結んだ日に散らばり、各国が責任を持って保管し、実験やらコアの解析をしている」

黒板にまた字をカツカツと書いていくと説明を同時にしていく。

「知つての通り、ISを作った篠ノ之束はこのクラスに・・・おい起きろ」

「むへへへえ・・・」

スツパアアアアン！！

「みやあああああああ！？」

「この馬鹿が作ったのだが、ISコアの複製などはアラスカ条約にて禁じられ、現在あるだけのISコアなのだが・・・」

寝ている束を問答無用で出席簿でシバくと、前の教卓に歩きながら

授業を進める。

「なお、ISコアはなぜか女性にしか反応しない理由はまだわかっていない。各国が総力をあげて調べているがまだ不明である」

「はい」

「なんだ」

「それならばなぜISを発表したのですか？織斑先生が世界に発表しましたよね？」

「・・・ああ、どっかの国のお偉いさんが急かしたり、独占しようとしたり、発表を強要したからだな。どことは言わないが・・・」

キーンコーン・・・

「・・・よし。今日はここまで。今日学んだ内容はISに関わるとすれば重要な案件になるので必ず暗記するように。わからないところがあれば放課後に職員室に来い。挨拶」

「起立、姿勢、礼！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「今回はIS本体について話すから予習をするように」

教材を纏めると生徒と聞いていた山田美弥先生と教室から退室、廊下を歩く。

「さ、さすがですね織斑先生！」

「んん？人間、やればできるんですよ・・・はあ。慣れないことはしない方がいいな」

IS学園始動から早三週間。

初日の親交パーティーはまさにカオスパーティーになってしまった。生徒はやたら俺と絡むし、教師陣は酒を飲みまくって絡むし、生徒に酒を飲ませた教師陣が暴走したりと。

無論、拳骨で鎮圧すると罰として夜中に外の運動場のトラックを走らせた。

静かになった食堂で頂垂れてると十蔵さんが胃に優しい茶を持ってきてくれた。謝謝。シエイシエイ

走り終えた罰を受けさせた生徒+教師が戻ると、部屋に強制送還、俺も部屋に戻って授業の用意をする。

「・・・なんか、あつたな・・・」

「お、織斑先生!？」

戻ったら戻ったらで束が裸エプロンなるものをしてリビングで待ち構えていた。

頭が真っ白になって気が付いたら束が頭にタンコブを付けて死んだ。

指で何かを書きかけたらしく、「かゆう」で終わっていた。

・・・かゆうま？

「山田先生、今日の実習はどうしますか？見学します？」

「あ、はい！行きます！見学します！」

「なら他の先生方にも連絡してください。俺、トイレに行くんで」

ズンツと教材三冊＋出席簿を山田先生が持っていた荷物（教材五冊）の上に置いた。

山田先生はヨロヨロっとなるがすでに俺はおらず、トイレに直行するのだが・・・。

「いた！織斑先生だわ！」

「またか！毎回毎回飽きないなてめーら！」

IS学園でもお馴染みの光景となりつつある休憩時間の俺追跡大作戦により、生徒に追い掛けられる。

前にやられて説教したらまた数が増え、説教したらまた数が増え、説教したらまたまた数が増え・・・みたいにエンドレスワルツになつてしまったのである。

中には説教されてあらやだ・・・何この感覚？みたいに新たな扉を開いた生徒がいたりもする。

迫る生徒の壁を避けるように壁や天井を走りながらトイレに行くと六分時間を無駄にしまった・・・鬱だ。

ここには男性は俺しかいないからトイレは校舎の一番端にあつたりするので、行くのにも帰るのにも時間がかかるからやめてほしいんだが・・・。

・・・退学をちらつかせてみるか？

「よし。これよりIS実習訓練を始める。各クラス、全員いるか？」

「一組、篠ノ之を除いて全員います」

「二組も同様！」

「三組は一人見学。それ以外は大丈夫」

「四組は二人見学で他は大丈夫です！」

「五組、異常なし」

「……………おい篠ノ之カマーン」

「んー？なにかなはーくん？」

昼前の三時限と四時限を使い、ISを動かす実習訓練をすることになり、一番大きい第一アリーナに全生徒が集合し、整列している。後ろにはクラスの担任やら副担任もいる、のだが……。

「あのISスーツ、どうにかならんのか？目に毒だ」

「う~~~~ん……無理！」

「死ね」

ゴキユツ！！

「……………さて。授業を始める。ISに搭乘してもらつから名前を呼ばれたら前が出る」

「あの……織斑先生、篠ノ之さんが泡吹いてますけど……」

「あ……？」

「す、すみません！なんでもありません！」

「えー、まずは織斑千冬、サーシャ・F・アルマ、高藤由紀恵、ア

リシア・ロンドブルー、シャリオ・ハーヴェリー、シエリア・ハーヴェリー、前に出る」

今、名前をあげたものはIS学園入学審査においてIS適正ランクが高かったものである。

千冬をトップに、他も劣ると言えないような資質の持ち主である。

ちなみに束は体が弱いため、日光に当たらない場所にてISの状態チエックを。

今回使うのは四季グループの試作型IS“鉄”^{くろがね}、白騎士を劣化させたものである。

まあ、完成したISを持つのは四季グループだけだから鉄^{くろがね}しか使えないんだけどな。

「つい先程、完成したようなので本日より三機から七機に増え、他の者の使用も可能になった」

「そ、それは私達も使う機会が増えるってことですか!？」

「もちろん。まだまだ試作型ISを作る予定だし、フランスも試作型ISをレンタルに出すようだしな・・・だが逆に言えば諸君らを実験体に、IS稼働データを取ることになるのだが・・・ああ、安心しろ。別に体をいじくり回すわけでもない」

「あの、織斑先生?どこ見て喋ってるんですか?」

馬鹿野郎。自分達がどんな格好をしてるのかわかってんのか？

ISスーツ、なんでスク水にニーソみたいなんだよ。

まだ発達途上だが、胸やら腰やらのラインがはつきりと浮かんでるから思春期の少年は鼻血を出して気絶するぞ。

何が悲しくて娘のエロい姿を見なければ・・・おい千冬。お前わかってるだろ？わかっててやってるな貴様！！

「（フッフッフッフ・・・あの父さんが赤くなって顔を逸らしてるな・・・チャンス！一気に攻めこ）」

スッパアアアン！！

「はいはい。次行くぞ〜」

「~~~~~!」

出席簿をブーメランのように投げて千冬を黙らせると戻ってきた出席簿を肩に置きながら指示を出す。

先程名前を呼んだものは用意された試作型ISに乗り込んだ。

・・・というか一夏に会いたい。声だけじゃなんかやだ。

「……………国際IS委員会の奴等全員ぶつ殺したら家に帰れる

かな？（ボソツ）」

「（ヒ、ヒイイイ！織斑先生から黒すぎる言葉があ！？）」

「（というか国際問題になるんじゃない？・・・あれ？でも先生ならなんかやらかしそうな・・・）」

顎を手でさすりながら考えていると近くで整列する生徒がガタガタ震え出したので首を傾げた。

風邪か？なら早く保健室に行ったら？

まあ、ここで軽く纏めておこう。

我らが四季グループは世界初の量産型ISを開発したことにより、ISの業界では断トツのトップになり、世界から注目されてる。ま。俺が立ち上げた会社だからという理由もあるがな。

そして現在、世界各国ではISを作るのに躍起になり、今のところ、一番完成が近いのはフランス、アメリカ、ドイツ、イギリスである。日本と中国も似たようなものだが、日本にはあまり情報を与えていないために難航。

前に情報開示を強要されたら、姐さんがキレて東とコアを全停止させようとしたのは記憶に新しいな。

四季グループが開発した試作型IS“鉄”くろがねは基本的なISのスペックに近接ブレード、簡単な中距離用のIS専用ハンドガンがある。オプションにアサルトライフル、グレネードランチャーなどを合わせるのも可能だが、シールドエネルギーの運用が問題になる。

だから使えるのは訓練用のブレードとハンドガンのみ。本格的なの

は世界各国と四季グループが開発中である。

・・・でも東と響の二人が暴走してスペックオーバーなISを作らないか心配だわ・・・。

「織斑先生、終わりましたが・・・」

「ん？ならいつものようにクラスごとにISを使用、訓練をするように。山田先生は俺のサポート、他の先生方は自分のクラスを見てください」

と、まあ・・・こんな毎日がIS学園の日常である。

・・・ああ・・・一夏に会いたい・・・。

二日後の放課後

「・・・・・・・・はい？」

「ですからですね。国際IS委員会からの命令で留学生三名を一年一組に入れるようにと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・この時期に？」

「へうっ！は、はい！その通りでしゅ！」

山田先生が泣きそうになるが無視。

職員室の俺の机はプリントに占拠されてるのに山田先生の持つプリントの束×3が追加されるだ・・・・・・・・？

「ん？どうしたんだ美弥先生・・・・・・・・」

「ひゃい！？」

「これは・・・・・・・・生徒の？知らない名前だが・・・・・・・・何？留学生だと？」

「はい？この時期にまた誰か来るの？」

「えー、アメリカから二名、ドイツから一名来るみたい」

わいわいと先生方が話し合ってるようだが、俺は妙にイライラしてきた……。

この微妙な時期、世界各国からの留学生に対する専用機の支給やら、篠ノ之束の待遇やらなんやらと仕事が多い。

なのに留学生追加+俺のクラスに配属……？

「ざっけんなアアアアアアアア！」

どんがらがっしゃーん！！

「おわ！？どうしたんだ織斑先生！？」

「こんなクソめんどくさい仕事をやらせておいて仕事は押し付け！さらに追加とか俺を殺す気があのクソジジイどもはアアアアアアアアア！！」

ガッシャアアアアアアアアン！！

「あいたっ！！」

「は、春樹先生！落ち着くんだ！暴れてもなんにもならないぞ！」

職員室にいる先生が俺を止めようとするが、ストレスが溜まりに溜

まった俺は歯止めが効かない。というかりミッター外してやるう！！
バンバンバンバン！と机を叩きながら壁に頭をぶつかけたり、プリン
トの一部を破り捨てたりと暴れまくった。

仕方がないだろう。織斑春樹はIS学園の学年主任として赴任して
からプリント処理やらなんやらと寝不足な毎日を送っていたのだ。
今までのストレスが溜まり、我慢していたのにトドメのパイルバン
カー並の攻撃（留学生襲来？）により爆発した。

「フアアアアアアアツキウウウウウウウウ！！」

「ぎゃー！織斑先生を止めるー！」

「だがどうやってあのバグキャラを止めればいいんだー！？」

そして、唯一のストレス発散方法である一夏、いや・・・ICHI
KA成分補給はIS学園の仕事が多忙なため、不可。
よって、ストレスはマツハに加速し、ブチキレ度はマックスとなっ
てしまったのだ。

止められる人材は残念ながら、四季グループ社長として働いている
ためにいない。

・・・止められるのは・・・もう一夏と姐さんと慕うなじみだけで
ある・・・南無南無。

そしてそこに・・・。

「失礼し・・・失礼しました」

「ああ！織斑さん！ちょうどよかったわ！春樹先生を止めるのを手伝って！」

「・・・えー」

「くっ・・・なら止めたら今日だけ織斑先生の部屋に「父さん！なじみさんから電話！」・・・いや、それで止まるわけ・・・」

「アベヤアアアアアアアア！！！」

途端、春樹が頭を抱えて絶叫するとゴロゴロと床を転がりまくった。暴れていた春樹がいきなり錯乱し始めると、羽交い締めしてた教師やオロオロしていた教師もビックリしていた。

入ってきた生徒・・・千冬はふうとため息をつくと転がる春樹に近付いて肩を叩いた。

「何をやってるんだ父さん・・・これ、クラス代表の提出必須プリント。アルマもある」

「あ？は、はえ？姐さんは？」

「嘘だよ。ほら、立ち直って早く帰らない？たまには一緒に帰りたいんだ」

「・・・ま、いつか・・・山田先生」

「は、はひ！？なんですかその素晴らしいほど清々しい笑顔は！？」

復活した春樹はめっさイイエガオで隅っこで震えていた山田美弥に声をかける。

そして机にあるプリントの束×12を片手で持ちながら近付くとそれを渡した。

山田先生、顔をひきつらせながらそれと俺の顔を交互に見ているが・・・生け贄になってくれ。

「これ、よろしく」

「ええええええ・・・私がですかあ！？」

「うん。たまには働け天然教師が。俺に仕事を回すな」

もはや誰だよ。とツッコミをするが、誰も反論ができない。というかしたら殺られるだろうから。

涙をダバーツと流す一年一組副担任、慰める教師、鼻唄を歌いながら退室する学年主任、退室してから誰もいない廊下で腕を組む生徒がいたとき。

そして・・・山田先生の手にあるプリントにはこう書かれていた。

国際ISS委員会より勅命。留学生三名の受け入れを要請。

名はアメリカ国籍“ナターシャ・ファイルス”“イーリス・コーリ
ング”

ドイツ国籍“クラリッサ・ハルフオーフ”。

担任織斑春樹教諭、副担任山田美弥教諭の一年一組の配属を命ずる。

第二十七話、親父（後書き）

ふと思いついたシリーズ

・あなたが欲しいクリスマスプレゼントは？

織斑春樹 休暇と胃薬

織斑千冬 父の愛と添い寝と熱い夜

織斑一夏 父と一日中、一緒にいければ何もいらぬ

織斑秋枝 家事スキル

篠ノ之束 春樹の子供と嫁の座

篠ノ之箒 新しい木刀と春樹の料理教室受講マンツーマン

安心院なじみ 春樹との既成事実

更識楯無 特になし。かんちゃんと春樹と過ごすクリスマス

更識簪 新しい特撮のDVDやゲームやら

布仏虚 新しい眼鏡

布仏本音 大量のお菓子

織斑（高山）大和 休暇と嫁との熱い夜

織斑（兵藤）響 金

山田美弥 豪華なクリスマスケーキ

轡木夫妻 休暇と熱い夜

・・・ナニコレ？

第二十八話、親父（前書き）

今回は

・ナターシャ・ファイルス、イーリス・コーリング、クラリッサ・ハルフォーフが入学。増える書類に春樹が泣く。

・クラス対抗トーナメント開催決定。書類仕事に春樹が泣く。

・春樹、ISゲット + 胃痛がファースト・シフト一次移行。

の三本立てでお送りします。

スランプで上手く書けないわ・・・。

第二十八話、親父

「アメリカより留学しました、ナターシャ・ファイルスです。よろしくね」

「同じく、イーリス・コーリングだ」

「ドイツより留学したクラリッサ・ハルフォーフだ。これからよろしく頼む」

「・・・なんか胃が痛くなってきた」

「ふ、ふあいとです織斑先生！」

国際ISS委員会からの勅命を受けてから三日。

留学生がジャパンインして今は俺のクラスで自己紹介を終えたところ。

これから仕事が増えると考えたら胃がキリキリしてきた・・・。

「山田先生、胃薬飲んでくるから後よろしく」

「え？」

「質問タイムは今の内にしとけ。HRを終わる・・・ああ、胃が痛い・・・」

で現在四日連続徹夜してんだぞコラ。俺の休暇を寄越せ。癒しの一夏と会わせる。ジジイ共、死ぬ。そんなかわいそうな俺に追い討ちをかけるようにISの専用機？また委員会に申請書出さなきゃならんし、また書類が増えるだろうがよ。おい、聞いてんのか束？」

「わ、わかった！束さんが悪かったから離してよオオオオオオオオオオオオオオ！！」

メキメキメキツ

「あ、頭が割れちゃううううううううう！！」

「FUHHAHAHAHAHA・・・」

ストレス発散（という名の八つ当たり）で少しだけ胃痛が治まると、ダウンした束を米俵を担ぐように持ち、職員室へGo。

職員室に着くとまだ誰もいなかったが、真っ直ぐに自分の席に行つて胃薬を取るとバリバリ噛み砕いた。

・・・え？大丈夫なのかって？たぶん・・・大丈夫じゃない？

ミネラルウォーターを喉に流し込みながらプリントのチョモランマが築かれるマイデスクを漁り、目的のプリントを見つけるとこっそりパソコンを弄る束に渡す。

「なに勝手にデータを抜こうとしてんだ馬鹿。ほれ、ここにサイン

をしとけ」

「いたたた・・・束さんの天才の頭が・・・」

「サイン、しろ」

「イエッサー！・・・って外泊許可申請書？なんで・・・ハッ！？まさかラブホで「死ぬか？」じ、冗談だよ冗談。まだちーちゃんに殺されたくないからね・・・はあ・・・」

「俺とお前の間には越えられない壁（年齢）があるから諦めなさい」

「うわーん！束さんの初恋がー！・・・って諦めないよ束さんは！」

・・・ウザったいなこいつ。と思った俺は最悪だな。

器用に右目だけ涙を流す束の頭をグリグリと撫でると、束の機嫌はみるみる回復、意気揚々と書類にサイン・・・。

「待てやコラ。普通に書けないのかテメーは。何が超絶天才美麗篠ノ之束さんだ」

「え？」

「え？駄目なの？みたいな目をするな。当たり前だろ、誰もそんな風に名前は書かねえよアホ。書き直して教室戻れ」

「うー。冷たいなはーくんは・・・」

「俺教師、お前生徒。わかつたら早く書いてくれ。仕事は山程あるんだから」

外泊許可申請書は夏休みも近いから束が家（俺の家。一応、柳韻から篝ちゃんと預かってるからな）に帰るためのものである。

普通なら、書いて担任、副担任、学年主任、理事長のサインを貰えば大丈夫なのだが、束の場合は特殊だからあらゆる申請書が必要なのわけである。

計十二枚の申請書にサインさせると、織斑の印鑑をポンポン押して理事長に提出。

「じゃ、教室に戻るか」

「おけい！」

廊下を歩きながら束と世間話。昨日はアメリカにハッキングしたりとか、IS造ったとか、千冬が涎を垂らして寝ていたとか。

・・・前半はあえて無視をしよう。

「授業、始める・・・ナニコレ？」

「お、織斑先生ええええ・・・」

教室に戻って目に入ったのは、ファイルと千冬が睨み合う姿であった。

山田先生はなんか涙目でこちらを見るし、周りの生徒もなんか煽ってるし。

・・・よし。取り敢えず近くの君に教えてもらおうか？

春樹、事情聴取

「・・・え？マジ？俺ってそんなに有名なの？入学式の時もそうだから」

「え、ええ。まあ・・・第一回世界会議の様子がテレビでやってましたから。ニュース、ご覧になってないんですか？」

「・・・いや。世界を飛び回ってたから見る暇もなかったわ・・・」
結果。このいざごきは“気になる人はいる？”発言により、ファイルスが俺と答えたために千冬がキレた。ということらしい。
・・・しまった・・・あれ、生中継だったの忘れてたわ。道理で世界を飛び回ってた時にサインをねだられるわけだ。

「ファイルス、織斑。授業をやるから席につけ」

「ぐるるる・・・」

「がるるる・・・」

「・・・一応、忠告はしたからな？」

ズドオン！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「馬鹿二人は放置して授業だ。教科書48ページを開け」

「・・・・」（御愁傷様。私達は関係ないから）「・・・・」

なんとも冷たいクラスメイトである。

これは日常の一部になってるから慣れた。と言った方が正しいだろうが……。

初めて見る残りの留学生、コーリングとハルフォーフはガタガタと震えていたけどな。

「じゃあまずは前回の復習を

」

キーンコーンカーンコーン……

「ファイルス、コーリング、ハルフォーフ。これが今日から住む学生寮の部屋の鍵だ。無くすなよ」

「は、はい！」

「り、了解しました・・・」

「ど、どうも」

放課後。授業模様はめんどくさいからカット。

職員室の俺の席の社長椅子擬きに座りながら留学生三人に鍵をポイポイと渡しながら書類を書く書く書く書く。

ファイルとコーリングは顔をひきつらせながら、ハルフォーフはなんか尊敬の眼差しが入り交じった視線で見ってくる。

授業は問題なく終わり、たんまりと宿題を出しておいた（生徒から激しいブーイングが来た）。

最近の話題はあるIS学園初の行事で埋め尽くされている。

それは、“クラス対抗トーナメント”。

予定ではもう少し早くやる予定だったが、まだISを上手く使えないものがあるため、延ばしていたがやっとできるようになり、俺達IS学園の教師は書類が増えて大忙し。

特に学年主任である俺と理事長の十蔵さんはひいひい言いながらペタペタサインをしまくっている。

各国のお偉いさんが来るから警備体制も考えねばならんし、一般人の観戦も議題となつてめんどいいことになつてたりする。

「まだ用があるのか？無いならすぐに部屋の荷物を纏めて風呂とか済ませとけ。十時半に点呼があるから過ぎたら大浴場は使えなくなるぞ」

「……えっと、織斑春樹先生？」

「なんだファイルス。勧誘なんかしたら課題を倍増して朝まで廊下で正座させるぞ」

そう言うとうぐつとともるファイルス。

右手だけは高速で動かしながら（タイピングしながら）顔をファイルスに向けると、苦虫を潰したような顔をしていた。

呆れた目をしながら左手で教員用のIS学園特記のあるページを見せた。

「IS学園は国家などは不可侵のいわば、鎖国のようなものだ。勧誘やら引き抜きはアラスカ条約により、罰せられるのは知ってるだろ」

「……すいませんでした……」

「いい。とにかく問題だけは起こさないでくれよ？主に、俺の胃のために。山田先生、胃薬買ってきてください」

「またですかあ?!というか私は中学生のか弱いパシリみたいになつてますけど!?!」

「冗談だといいな?」

「どっちですかそれ!?あ、ファイルスさん、コーリングさん、ハルフォーフさんについてはきてください。部屋に案内しますから!」

「後は学生寮の寮則も渡しとくから読んどけ。後は・・・あ」

タイピングする手を止めてから体ごと三人に向けると、ニヤリと笑う。

「IS学園にようこそ!これから三年間よろしくな?ナターシャ・ファイルス、イーリス・コーリング、クラリツサ・ハルフォーフ?」

そう言ったら赤い顔して逸らされた。なぜだ。

夜間、IS学園第二アリーナ

「暗いね」

「悪い悪い。この時間しかアリーナが使えなかったから文句はやめてくれ」

「なんか夜に男女がいたらイヤらしい雰囲気になるんだけど」

「娘に欲情する親がいるか阿呆」

夜。間違いなく真っ暗な夜である。

歓迎メッセージを送ったらファイルスが

「惚れ直したので付き合ってください」

とか言うもんだから職員室は荒れに荒れたな。

コーリングも同感。みたいにうんうん頷いてたし、ハルフォーフは

なんかメモをしてた。

取り敢えず年の差でやんわりと断ってみたら

「年の差？余計に燃えますよ先生！」

駄目だこりゃ……。

「ねえねえはーくん。おっぱい眼鏡（山田先生）から聞いたんだけどあの雌豚に告白されたんだって？」

「………!？」

「いやいや。束、そのレイプ目はやめれ。千冬はこの世の終わりみたいな顔をすんな。ファイルスのはたぶん半分は冗談だと思うぞ」

「実際にレイプしてよはーくん」

「その時は私もセットで付いてくるぞ」

取り敢えず正気に戻すために頭突きで目を覚まさせた。

二人は頭を押さえてアリーナの地面を転がりまくってたが、反省なんかしてない。むしろよくやったと自分を褒めたい。

だって束は目に光を無くしてぶつぶつと呟きながら近付いてくるし、千冬も服に手を掛けながら近付くから仕方ないっしょ？

・・・もうやだ・・・姐さんの病みモードでお腹一杯なのにこいつらまで病んだら俺、耐えられません。

「というわけでこれが一くんの専用機だよー！」

「・・・・・・・・」

ガッスンー！！

「ぎにゃあああああああー！！！」

「お前、まだ俺をおちよくってんのか？お？なんで待機状態がコレなんだよ。悪戯か？悪戯なのか？」

今度はわりと本気で頭突きをしてみました。

束は頭を押さえてアリーナの地面を（ry

千冬は頭が痛むのか、少し擦りながら俺の手にあるものをチラチラ見ている。

「ナニコレ？なんで待機状態が獣耳（猫耳仕様 黒色）なわけ？」

「そ、それは・・・束さんの要望！」

ゴン……！

「直せ。いいな？」

「ヒイイイ！？はーくんの顔が怖いよー！」

猫耳を返すと、束はまた新しい何かを取り出して俺に渡してきた。
……というか、これってまさか……。

「うん。はーくんが大事にしたから待機状態のモデルにさせてもらったよ！どうどう！？」

「……いいじゃん。なかなかイカすデザインじゃねーか」

「束え！それはあれか！結婚指輪なのか！？」

右手には黒い、小さな指輪があり、束はニコニコしながら渡すのだが、千冬は何を血迷ったのか、束の頭を掴んで尋問してた。

その指輪を右手の中指に填めると、キンツと金属音のような音が頭に響いた。

これは……ISに触れた時の反応か。懐かしく感じるな。

フィッティング
最適化処理、
フォーメット
初期化開始。

IS装甲展開・・・エラー。ハイパーセンサー・・・エラー。
武装展開・・・エラー。

エラーが多数。最適化処理及び初期化を優先。武装、ロック解除。

「・・・ん？」

指輪を填めた右手にはズシリとIS用の近接ブレードが握られていた。

長さは俺の身長より少し下だから・・・長くても180くらいか？
鉄くろがねの近接ブレードに似ているが、所々に黒い装甲やらがあるから特別製なのか？

「どう？はーくんのISの専用機の唯一の武器、“緋桜”だよー！」

「それ、父さんの刀の名前？」

「みたい、だな。手に馴染むし、重さも感じない」

試しに軽く振っても違和感はないし、長年握り続けてきた俺の緋桜と感覚も変わらない。

「んつとね。まずははーくんの専用機なんだけど、IS本体はまだ使えない（・・・）からね？はーくんが規格外す

ぎてISの思念体が怯えてしまってるんだ」

「……ん？ならなぜ父さんは武装だけは使える？」

「あくまでも緋桜はISから独立したプログラムを基に形成されるからだよちーちゃん。もし、IS本体が使えて、はーくんの実力を十二分に出すことが出来ればまさに最強、全世界を相手にしても勝てると思うよ……今でも勝てそうだけどね（ボソッ）」

「……さすがは響が認めた天才科学者だな。」

「で。はーくん、その指輪は肌身離さずに持っていてね？一応、防水加工や対衝撃にも耐えられるようにはしてあるから」

「無駄にハイテクなのは誉めてあげよう。ご褒美は頭ナデナデだ・・
・と言いたいが、許可もなしにIS造ったから無し。さっさと帰ろう。明日も授業があるからな」

「あー！はーくんの頭ナデナデがまだだよー！」

「撫でるなら私もお願いします！」

背中にへばりつく束、なぜか敬語で頭を下げる千冬。
胃がキリキリ痛むのを感じながら寮に戻ることにした。

「……ああ……一夏、お前に会いたい。」

第二十八話、親父（後書き）

おまけ

「え？じゃあ私が兄さんの秘書を？」

「そうそう。春君、IS学園で書類仕事に追われて大変みたいだね？暇そうな秋ちゃんにやつてもらいたいんだ」

「良かったね母さん。脱 ニートじゃん」

「グツハア！？」

織斑秋枝、仕事もせずに家でテレビ（韓国ドラマ）を見る毎日。

ついに職を得ました。

今までは春樹の稼いだ金で家事をしても一夏に止められるという始末。南無南無。

一夏の尊敬度が急降下した！

一夏の視線が冷たくなった！

一夏のファザコンが進化した！

「.....」

それを篠ノ之妹は顔をひきつらせながら見ていたとき。

お知らせ。

あらすじにも書きましたが、全話修正中です。

違和感があったりするので、増やしたり減らしたりします。

オリキャラも減らします。

姐さん、秋枝、山田姉、織斑響は出しますけど。

微妙にですが、アンチしてる場所があります。

修正したのは視点が追加されてるのでよかったですらどうぞ。

今年はまだ更新しませんが、新年開けたら二話投稿するので。

あと、無くてもいいと判断したものは消すのであしからず。

でわでわ・・・また来年にお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

織斑家の最強お父さん！

2011年12月29日21時29分発行